ヨセフ第二世の改革 3 Joseph II

ふは非なり。法皇は教會の統一を維持せんが爲首位を與へられたるものなれば、教會之を必要と認むれば他の教會の監督に此の地位を與ふることを得べし。信仰に關する事に於て無謬なるは大會議のみなり。故に教會一般に亘る法律は大會議のみ之を定むるを得べし。大會議は必ずしも法皇により て召集せらるゝを要せず、其の決議亦法皇の批准を經るを必要とせずと。これ明に法皇の主上權に對して挑戰せるものなれば、法皇クレンメス第十三世（一七五八—一七六九）は之を禁制したり。されど此の書は之が爲に益々有名なるものとなり、翻譯せられて歐洲諸國に流布せり。法皇黨は著者に迫りて或る題目の取消を爲さしめたり。

フェブロニウスの議論と大體相似たる立場に原きて、改革を企てたるものは墺太利の君ヨセフ第二世なり。彼は一七六五年以後獨逸の皇帝たり。一七八〇年母マリヤ・テレサ死するに及び墺太利に君臨して一七九〇年に至れり。彼れは改革者なれども專制的にして人民の意向を參酌せず、又躁急に過ぎて堅忍の精神を缺けり。其改革は要するに二義に歸す。一は加特力教徒以外にも完全なる宗教上の自由を與ふるにあり。即ち一七八一年信仰自由の令を發して其の臣民は羅馬教徒たると希臘教徒たるとプロテスタントたるを問はず自由に己の信仰を公表することを許したり。其の結果はプロテスタント教徒意外に多きことを示したれば羅馬教徒之に驚きて多大の檢束を加へしむるに至れり。第二は爲し得べきだけ羅馬法皇より獨立して墺太利の國家的教會を建つることなり。墺太利官憲の同意なくして法皇の教書教令を公にするを許さず、國王の認可なくして法皇の與へたる稱號官職を帶ぶることを得ず。修道院は其の教區の監督の管轄を受くべく、外國の權威に服屬し、又其の歳入を國外に貢するを得ざることに定めたり。又禮拜に羅甸語を用ゐることを廢して之に代ふるに獨逸語を以てせり。其後國王は教育若しくは慈善に從事せざる教團を盡く廢止せしかば修道院の數二千四百餘に減じたり。此等の改革の結果は法皇との衝突を生せざるを得ず。一時は英王ヘンリイ第八世のなせし跡に倣ひ羅馬との關係を絶つに至らんとせしも、彼の大臣等は人民の思想未だ之に伴はざるべきを警告し、羅馬と分離を避くる方針を執れり。ヨセフの即位短くして其の志を果し得ず、改革の事業は後繼者の代に至り漸次其の跡を沒して舊態に復したり。

4 Peter Leopold　ペスカニ改革
5 Ems　エムスの會議

當時他の國に於てもヨセフの改革に倣ひし者少からず。彼の弟タスカニ大公ペテロ・レオポルド[4]亦羅馬の干渉を斷ち教育の改良を圖りたれども監督等之に贊同することを拒みし爲に志を果すに至らず。獨逸に於ても一七八六年加特力教會の大監督[5]エムスに會して大監督の權限を劃定し、羅馬の干渉を制限せんと試みたり。即ち羅馬に納むる金額に制限を附すること、獨逸の教職の與へたる宣告に對して法皇に上告する時に於ては審判者は獨逸生れの人のうちより法皇之を撰定すべく獨逸國内に於て法廷を開くべしと云ふ如き事これなりき。この改革もマインツの選帝侯の詭計と佛國大革命の爆發により効果を見るに及ばずして已めり。

以上記せし改革運動は國民的自覺心と啓蒙時代の精神より出でしものにして宗教的經驗に根をおろしたるものにあらず、又君王の政策主因となりて民衆の生活と交渉する所少かりしなり。之と相反して時代の思潮等とは何等の關係なく民衆の間に行はれし信仰の現象と見るべきものあり、其の二を左に記す。時代はやゝ早しと知るべし。

1 Devotion of the Sacred Heart　聖心臟禮拜
2 Paray-le-Monial
3 Margaret Alacoque
6 Trappists　トラピスト
7 Bouthillier de Rance
8 La Trapp

6トラピスト　佛蘭西にブウチリエ・ド・ランセエなる人あり。門地高くして7教職に在りたれども奢侈放逸を極めたり。或る時家に歸り健にして別れたる美なる妾の死せるを見世を遁れ、己が少年時代より院長の名を保ちしノルマンヂイのラ・トラップ[8]の修道院に隱れ前代無比なる嚴しき修道法を立てたり無言、粗食、激しき勞働を課し、學問せず休憩せず。トラピストの修道院に入りしものは放蕩の生活より悔ひ改めし人に多かりき。歐洲諸國に此の派の修道院あり、我國にては北海道にこれあり。

1聖心禮拜　ブルガンヂイのパレ[2]エ・ル・モニアルの修道院にマルガレタ・アラ[3]コオクと云へる尼あり。幼時より苦行を勉め、度々聖母を幻に見たり。此の後聖母にては滿足せず基督を戀人とし、基督より愛情と結婚の徴を與へられたりと信ぜり。一六七五年六月十六日救主の脇腹開けて其の心臟太陽の如く輝けるを見しが彼女の心臟を取りて其の中にさし入れたり。次には己の心臟のみならずゼズイットの一人なる聽告白者の心臟の燃ゆるを幻覺し、次の日には聖心臟の禮拜を始むべきことを命じたり。其の日は聖體日の第八日の後に來る金曜日及び毎月第一の金曜日と定められたり。ゼズイットは

之を助けて此の禮拜は至る處に普及し、一七二六年には教會の數三百十に上れり、一七六五年法皇クレメンスは之を公認したり。

第三十四章　佛蘭西革命

佛蘭西革命は佛蘭西國内に於ても、又歐洲の全局面に於ても、關係甚だ多大なる事件なり。茲には專ら宗教に交渉せる方面を記すに留めざるべからず。

加特力教會の腐敗

革命前佛國の加特力教會の腐敗は亦革命の一因を爲せり。最も人民の怨を買ひしは其の富なり。當時教職は貴族平民に對する一階級を爲せり。其の數凡そ三十萬人にして全人口の百分の一なりしに係はらず其の收入は全國の歲入五分の一に上れり。彼等は納稅の義務を負はざりき。教職の多數は貧しき生活を爲し、少數の教職のみ富と權力を擁して貴族の如く奢侈を極め、宗教上の勤務を怠れり。當時佛國の修道院の七割は任地に住せざる人の有に屬したり。されど地位低き教職のうちには脫俗にして信仰ある人亦少からず、彼等は人民の愁苦に同情し、革命を希ふもの多かりき。

三民會

一七八九年五月五日、[1]三民會はヴォルセイユ宮に召集せられぬ、これ財政の窮迫を救はんために宰相[2]ネッケルの獻策によれるなり。此の會議は貴族、教

1 States General
2 Necke

職、平民即ち第三階級各別に集會して議を定め、然る後階級投票により決議するを以て定制となす。然るに斯の如くせば平民は多數なる故を以て利する所あらざるを知り、合して一の會議となすべきを主張し、多數の教職と少數の貴族之に加はりて會議を開き國民議會と稱す。六月二十七日國王遂に之を承認して此の議會總ての政務を議することとなりぬ。

國民議會

是の如くにして大革命の序幕は開かれ、七月十四日バスチイル城の攻撃は自由、平等、兄弟主義の誕生日として祝はれぬ。翌月階級の別は一切廢止せられぬ。十一月の始アウタンの監督タアレンランの發議により、數億フランに[3]價する教會の財産を國家の所有となし、之れによりて公禮拜の費を辨じ、其の殘餘を以て國債の償却に充つべき事を決議したり。十二月にはユウゲノオ教徒に禮拜の自由と市民權を回復し、翌一七九〇年二月修道院の制度は廢止せられ、宗教的教團は禁ぜられぬ。此等の運動に於て議會の議長となり委員となりし人にはヂャンセン派の人多かりき。

バスチイルの攻撃

3 Talleyrand

國民議會は更に進んで新に分ちたる各縣を一の監督區となし、監督及ひ各教區の教師は公撰によりて定めらるべく、其の俸給は國家之を支辨することとせり。羅馬法皇は心靈的事物に於ては教會の首長たることを認めたれども、教會の實務に於て國外の監督の干渉を受くべからざることを決議したり。法皇は之に承認を與ふることを拒みぬ。議會は總ての教職をして國民、法律、國王及び新制度に忠義の盟をなさしめ、之に從はざるものの職を免ずることを令したり。此の盟をなせしものと、之を否みて國を去るものと二に分れたり。

國民議會の閉會

4 Mirabeau

共和政治

一七九一年九月二十九日國民議會は閉會を告げぬ、國民は其の議せし所を批準し、議會亦爲すべき任務を果たしたりとせり。既に憲法は制定せられ、貴族僧侶の特權は破壞せられ、過重なる稅は廢せられ、革命の事業は一段落を告げたる如く見へたり。然ども着實なる意見を以て國民議會を指導したる伯ミラボウは死し、時の變に遭ひ地方に於て生活の途を失ひたる人民多く巴里に入り、過激なる議論益々勢力を得たり。且つ此時普魯亞、墺太利二國と戰開かれたり。國を脫したる貴族の遊說與りて力あり、國王亦之と氣脈を通せりとの疑は民心を激せしめたり。之より革命の運動の性質一變せり、國民議會に次で開かれたる立法議會は一七九二年九月二十一日共和政治を立つる

國王死刑

宣言を發し、翌年正月國王ルイ第十六世は殺され、次で數限りなき人の血は斷頭機に塗られぬ同年十一月七日加特力教會は共和政府に反對すと云ふ理由を以て廢止せられたり。

加特力教會の廢止

基督教の臭味を斷つ爲に曆法は改正せられ、共和政治制定の日を以て自由紀元第一年となし、月の名を改め、十日を以て一週となし、日曜日を廢したり。結婚は解消し得らるべき民法上の契約なりと宣言し、教會の裝飾器具は國家の財產なりとして之を賣り拂ひ或は破壞したり。終に或る卑しき女を祭壇に立たしめて道理の女神に祭りて之を禮拜し、會堂は之を閉鎖し、若しくは道理の神殿とせられ、各都府に無神の祭は行はれぬ。

道理の禮拜

非基督教の勢は絕頂に達し、反動は早くも始まりぬ。一七九四年ロベスピイル[5]は國民評議會をして、佛國人民は神の存在と靈魂不滅とを信ずる旨を宣言せしめたり。ロベスピイルは超越神教の徒たりしなり。ロベスピイルは失墜したれども宗教を求むる人情は抑へ難く、一七九七年「セオフイランスロピスト」[7]（愛神人會）なる團體巴里に興りたり、時の當局者の首唱にかかれり。此の會は道理の宗教を宣言し、說教讃美其の他の儀式を行ひたり。一時之に加はるもの壹萬人に上り、十個處の教會堂に於て禮拜を行ひ、地方にも傳道せしが、熱心直に衰へ、一八〇二年に至り禁止せられたり。

5 Robespiere
6 National Convention
7 Theophilanthropists

ナポレオンと羅馬法皇

既にしてナポレオン佛蘭西の軍國の權を掌握する時代となりぬ。一七九六年ナポレオンは兵を率ゐて以太利に入り、北部以太利に共和國を建て、一七九八年羅馬を以て一個の共和國となし、法皇の政治的權威は終れる旨を通告したり。法皇ピウス第六世は都を去りて屈辱の裡に死し、「カアヂナル」會議はヴェニスに開かれ、ピウス第七世は法皇として選擧せられたり。ピウス第七世はナポレオンと妥協を圖るを得策なりとし、數回の協商を重ねて後一八〇一年七月法皇を代表せる「カアヂナル」[8]ゴンサルヴイとナポレオンとの間に協約は締結せられたり。此の協約には、羅馬加特力教は佛國人民多數の宗教なることを聲明し、羅馬教會は佛國政府と協議して監督領の境界を定むべく、大監督監督は「コンシユール」（即ちナポレオン）之を指名して法皇之に裁可を與ふ、斯の如くにして任命せられたる教職は就職前國家の元首に忠義なるべきを盟ふ等の事を定めたり。法皇之を承認したり。これより後法皇とナポレオンとの間には數年に亘りて葛藤ありしも爰に之を記する必要なかるべし。

8 Gonsalvi

第十時代　最近世時代

一八〇一年より現代に至る

第三十五章　第十時代總論

世界的傳道

交通機關の發達に伴ふて地球の表面縮少せられ。政治商業軍事を始め諸般の經營活動すべて世界的性質を帶び來りぬ。是に於て基督敎は暗黑大陸の中心より絕海の島嶼にまで宣傳せられ、前古未だ曾て有らざりし傳道時代は來りぬ。これ此の時代の主なる光榮と云はざるべからず。北米合衆國の繁榮は精神界の歷史にも一の新しき原野を加へたり。基督敎が次第に東洋諸國民の間に扶植せらるるに隨ひて、東西文明の接觸と其の思想の融合は今後の著しき現象となるべき運命を有す。

社會的事業

佛國大革命は從來有したる階級を打破して、社會組織に激變を生せしめ、歐州諸國を通じて平民の勢力著しく增進したり。一方には產業の發達は資本家と勞働者との懸隔を大ならしめ、社會問題の解決を促したり。基督敎は之が爲に種々の方面より影響を受けざるを得ず。今まで比較的閑却せられたる社會の下層に基督の福音を傳ふる團體起り、生活狀態の改善を目的とする諸種の機關設けられたり。

自然科學の影響

自然科學の進步亦此の時代の一特徵にして、世界觀は之が爲に一變せられたり。唯物的の世界觀人生觀は跋扈したり。殊にダルウィンの進化論學界に提出せられし以來宗敎と科學の調和は一時思想を惱したる問題となれり。年を經る間に兩者の關係につきての思想漸く定まる所ありたれども、科學的研究の要求は基督敎神學の內容と形式とに大なる改造を必要となしぬ。

理想主義の思潮

物質の勢力益々强大なるを認めらるる一方には、精神の權威を主張し內的生活の偉大を自覺する思潮亦深みを加へ來れり。第十八世紀の唯理說勢力を失して、情意の要求重きを置かれ、全人格と其の經驗を基礎として近世の哲學は建設せられたり。これカントに始まりヘエゲル、ロッエを經て今日に至れる唯心的哲學の流れなり。別に哲學文學に神秘的の潮流あり。新時代の要求に原きて神學の建設を成したるものをシュライエルマッヘルとなす。

新時代の神學

シュライエルマッヘル後獨逸には幾多の神學者現れ、リッチルに至り更に新生面を開きたり。英國に於けるコオルリッヂ、米國に於けるブシネル各々新時代の神學の開拓者たる地位を占む。

神學諸科の進歩

史學、言語學、古物學の研究の進歩は聖書の研究に新しき資料と光を與へ、神學諸科の研究は非常なる進歩をなせり。殊に基督の傳記と其の教の研究は神學の中心問題となりぬ。此の時代の神學は基督中心の神學なり。

中世的反動

近代思想の流れ滔々として進む一方には、中世の趣味理想に憧るるものあり、個人主義世界を風靡する一方には教會の主權を固守せんとする思潮あり。羅馬にはヴァチカン宮の會議開かれて法皇無謬の教義を定め、英國にはオクスフォルド大學に宗教的運動起りキイブル、ニウマン等の偉人活動して宗教思想に大なる影響を及ぼせり。

參考書

參考書　基督教の最近世歴史に於ては思想の歴史重要なる部分をなせり。プロテスタントの神學の歴史にはプライデラア Pfleiderer の『カント以後の獨逸に於ける神學の發達及び一八二五年以後英國に於ける進歩』(英譯あり)、リヒテンベルガア Lichtenberger の『第十九世紀獨逸神學史』(英譯あり)、エドワアド・カルド・ウエル・モオア Edward Caldwell Moore の『カント以後基督教思想史』、ヒュンヒル Fünjer の『基督教宗教哲學史』の近世の部、『現代の文化』Cultur der Gegenwart 叢書に於けるトレルチ Troeltsch の文章、タロック Tulloch の『第十九世紀英國に於ける宗教思想史』、ウエルノスン・ストオル Vernon Storr 『第十九世紀英國神學の發達』、ハアトフォルド神學校より出版したる『晩近基督教の進歩』、『日本文にてはギウリッキ『獨逸神學略史』あり。一般思想の歴史にして參考すべきものはメルツ Merz の『第十九世紀に於ける歐洲思想史』、クウノオ・フィシャ Kuno Fischer ヘフヂング Höfding ウインデルバンド Windelband の近世哲學史、オイッケンの『大思想家の人生觀』ロイス Royce の『近世哲學の精神』、ブランデス Blandis の『近世文學の潮流』等なり。

シュライエルマッヘルの著『宗教論』は石原謙譯あり。研究にはデルタイ Dilthey ムラアト Mulert あり。リッチル及び其の神學はガアヴィ Garvie モズレヒ Mozley ヒッゲヒル Edgehill リプシウス Lipsius 等の書あり。

オクスフォルド運動の歴史はニウマンの『アポロギア』Apologia チャアチ Church の『オクスフォルド運動』を見るべし。ニウマンの傳記はウイルウリイド・ウオード Wilfrid Ward、ハットン R. H. Hutton 等あり

英米神學者の傳記にはスタンレヒ Stanley のトマス・アルノルド傳、其の子の筆に成りしマウリス傳、アレン Allen のフィリップス・ブルック傳、メリイ・ブシネル Mary Businell のブシネル傳あり。

傳道の歴史はワルネック Warneck のプロテスタント『傳道史』ヒドウイン・マンセル、ブクッス編纂の『傳道百科辭典』リヴインゲストオン、ケレヒ等の傳記、一九一〇年ヒエデンバラ宣教大會の報告書十册參考すべし。

第三十六章　哲學文學の新思潮

破壞的趨勢は佛國革命に至りて絕頂に達したり。獨り佛國のみならず全歐洲の社會の據て立てる基礎は動搖を感じたり。如何にせば、斯の如く破壞せられたるものを再び、建設するを得べきか、傳說其の勢力を失したる時基督教は猶ほ能く人心を支配するを得べきか。これ第十九世紀劈頭の歐洲に於ける問題なりき。然れども建設の勢力は佛國革命前より既に働きつゝありき。其の勢力は一面哲學界より來り、一面文學界より來れり。今第十八世紀後半の思想界に於て新氣運の開け來る源を尋ねんとす。

建設的勢力

カント

理知を以て一切の問題を解釋せんと試みたる啓蒙思潮に反對して新時代の哲學系統を建てたるものをインマヌエル・カントとなす。カントは一七二四年ケエニスベルグに生れ、同地の大學に學び一七七〇年同大學の教授となり、終生ケエニスベルグを離るることなく眞理の研究に一身を委ねて一八〇四年に死せり。一七八一年『純粹理性批判』を著し、一七八八年『實踐理性批判』を著し、一七九〇年『判定性批判』を著して哲學の系統を完成したり。爰に至るまで彼の思想は略ぼ二個の時期を經過したり。啓蒙思潮に養はれ、ライブニッツ及びウォルフの哲學說を取りし時代を第一期となす。此の時期に於てニウトンの物理學の感化を受けし所亦少からざりき。次にはヒウームにより て所謂獨斷的睡眠の裡より喚び起され第二期に入れり。一七八一年『純粹理性批判』の著を以て第二期の始となす。此の時期に於てカントは漸く獨創の思想を發揮して批評哲學の建設を成就せり。彼は理性の批判によりて此の目的を達したり。總ての認識には外より受くる要素と理性の供給する要素とあり。時間空間は從來人の思惟せし如く客觀的に實在せるものにあらず、我等が由て以て實在を認識し得る主觀の形式たるに過ぎず。此等の形式即ち範疇の型に當て嵌めて我等の精神は現象世界を創造す。故に、現象世界に現れたる統一と調和は理性の自律即ち理性に存在する統一調和の產物なり。我等の主觀を離れたる實體即ち物自體は存すれども是は經驗の範圍外に屬せるが故に、我等之を知り得る力なし。神、宇宙、靈魂は我等の觀念を統一整理

カントの思想に於ける兩時期

認識論

神に達する道

するに必要なる原理として立て得れども果して實在せるものなるや、如何なる性質のものなるや、經驗の達せざる所なり。因果律の如きも現象と現象との間に應用さるべき概念にして絶對的原因に溯り得べき性質のものにあらず。斯の如くにして從來の有神論は盡くカントによりて破壞せられたり。カントは純粹理性により、て神の存在の論證を破りたるとともに又理性によりて神の存在を否定する議論をも破りたれば、唯理論に根本的の打擊を與へたり。彼は實在に達する道を別に實踐理性に求めたり。曰く『余が神と自由と靈魂不滅の知識を否定する必要を感じたるは信仰の爲に一の地位を見出さんが爲なり』。カントは道德の根本的前提として意志自由、靈魂不滅神の存在の三なかるべからざるを論じたり。是等は實踐理性の要求なり。實踐理性の要求は命令の形を以て我等に臨む者にして我等は尊敬の念を以て之に遵ふを要す。ここに義務の念あり。この義務を神の命令と見る、これ即ち宗教なり。是の如くにしてカントの宗教は倫理的要素を主とす。『カントは明なる輪廓を以て信と知との分界線を引けり。現象世界をば自由に研究すべき範圍として知識に與へ、他の一方に於ては價値の觀念により人生と宇宙と

根本惡の說

カント哲學の影響

を解釋すべき永久の權利を信仰の爲に保留したり。』

カントは自我に於て現象自我と實在自我とを區別す。現象自我は必然の法則に支配せらる、實在自我には自由あり、撰擇の自由あり。この故にカントは實在自我に存する根本惡を認む。

カントは哲學の中心點を外界より內界に移し、偉大なる自我を發見し、總ての知識の立脚點を自我の經驗に求めたり。彼の哲學が基督教神學に及ぼしたる影響甚だ大にして、カント以後の神學者にして其の影響を脫し得るものあらず。經驗を基礎とすること、道德的價値を主とすること、不可知論的要素の如き、シュライエルマッヘルよりリッチルに至るまで皆大なる影響を被りたり。カントが宗教の本質を道德に限り宗教を道德の附屬物の如く考へしことは未だ全く啓蒙思潮の束縛を脫せざる所なり。然して物自體を以て全く經驗を超越せるものとなせる意見に對して訂正は試られざるを得ず。これカント以後に興りたる哲學者の問題なりき。

カントの哲學は唯理論的思潮に對する反動なるが、更に美的感情の方面よ

り起れる反動あり。佛國文學の古典主義に反對して想像力を以て詩歌の最高要素とすべしと主張する思想は勝を制せり。史詩『メシヤ』の作者たる詩人クロップシュトック[1](一七二四—一八〇三)は獨逸文學を古典主義より解放するに與つて力ありし第一人なり。クロップシュトックの後にレッシング[2](一七二九—一七八一)あり。レッシングは批評家にして又詩人なり。獨逸の文學美術の發達に貢献する所頗る大なり。彼は少時より熱心にライブニッツの哲學を研究し、又スピノザの感化を受けたれども思想の根底はライブニッツに在り。彼は又メンデルゾオン及びニコライ(第二十八章參照)の諸人とともに文藝の雜誌を刊行せり。文學上の著作には『ラオコオン』『ミンナ・フォン・バルンヘルム』等有名なるが、宗教思想に關係あるものは『賢人ナタン』(一七七九年)及び『人類の教育』(一七八〇年)の二書なり。レッシングは此の世界を懲罰の場處と見ず教育する學校なりと見る。當時に於ては新しき思想なり。彼の說によれば、神の啓示は人類の知能發達の程度に應じて時期の差別あり、宛かも個人の教育に時期あるが如し。第一は舊約時代なり、專ら現世の賞罰を以て動機となす。第二は新約時代なり、訴ふる動機漸く純粹なるものとなり、賞罰は未來世界に置かる。

1 Klopstock
2 Lessing

レッシング

次に永久福音時代來る、此時代に於て人は賞罰の動機を離れ、其の事善なるが故に之を爲す、これ『人類の教育』の論旨なり。『賢人ナタン』は劇詩なり。孰れの宗教にも善き所あり、寛容の精神を以て見れば信條教義の差別はさして重大ならずと云ふ思想を表さんとせるものなり。其の思想は大体に於て啓蒙時代の立場にあり。然れどもレッシングが宗教を以て神と人との活ける關係と見、隨て啓示を重んじ、啓示の發展を說きたる所は多數の啓蒙思潮の人と異なりて彼をして半ば新時代に屬せる人たらしむ。史的發展の觀念を一層明にせるものはヘルデルなり。

ヘルデル

ヨハン・フリイドリッヒ・ヘルデル(一七四四—一八〇三)はケエニスベルグに近き地に生れ、神學を修め又カントの講義を聽けり。然れども彼の好む所は文學にあり。此の方面に於て彼はルッソオの感化を受け、又シェクスピヤ及び英國文學より得る所あり。ゲエテより長ずること五歲にして彼に與へたる感化少からず。後其の周旋によりてワイマアルの宮廷牧師となり、一七七六年より一八〇三年まで同地に留り、ゲエテ、シルレル、エアン・バウル等諸文豪の間に伍して一名星たりき。然れども彼は他の諸人の如く純然たる文雅の人にあらず、嚴

格なる道義的精神を懷きて立てり。彼は多方面の天才なり。主知的思潮に反對して感情を重んじ、個人主義に傾きたれども、其の眼光は社會的歷史的の廣き舞臺を射たり。一七九二年に著したる『歷史哲學の觀念』の一書は歷史哲學の思想に貢獻する所多かりし書なり。彼は曰く國語、詩歌、宗敎ともに作られしにあらず、生長せり　孰れも鬱勃たる國民的精神もしくは人道的精神の表現なり。單に文學者の製作にあらずして民族的精神の表現なる所に文學の價値ありと　ヘルデルは民謠及びシェクスピヤ、オシヤンを重ずることを獨逸人に敎へたり。基督敎を觀るにも同じ精神を以てせり。宗敎は人道の體現たるべく、基督敎は其の最高體現なり。基督敎が理想的の宗敎たる所以ここにあり。基督敎を知らんとせば基督の宗敎に接せざるべからず、基督の宗敎に接せんと欲せば原始的史料を研究するを要す。此の見地より福音書を研究してマコ傳が最古の史料なるを發見したるは大なる貢獻なり。ヘルデルは聖書を以て人民の書なりとなす。曰く『聖書は人の爲め人の著したる書なれば之を讀むに人的方法によらざるべからず。神的たる書を最も善く讀む道は人的に之を讀むにあり』

ロオマンチツク派

ヘルデルと時を同ぐしてゲエテ、シルレルの二大星はワイマアルの宮に輝けり。此の二人、ことにスピノザを宗とせるゲエテの宗敎思想につきては言ふべき事少からずと雖もここには略すべし。更にワイマアルを距ること遠からぬエナ大學に集りたる數人の青年は初期のロオマンチツク主義を代表せり。フリイドリッヒ・シユレエゲル其の弟アウグスト・ウィルヘルム、シユレエゲル、フリイドリッヒ・ノヴァリスの如き其人なり。乾燥せる知識を輕んじ道義の拘束を脫して、本然の感情を重んじ奔放たる耽美の理想に憧がれたるロオマンチツク主義はシユライエルマッヘルにより醇化せられて基督敎の神學に注入せられたり。

第三十七章　シュライエルマッヘルと其の神學

生涯

1 Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher

[1]フリイドリッヒ・ダニエル・エルンスト・シライエルマッヘルは一七六八年十一月二十一日獨逸東方の都府ブレスラウに生る。父は貧しき軍隊附牧師にしてカルヴイン派教會に屬せり。母亦良く其の子を教育したり。シュライエルマッヘルは幼時より宗教の觀念深かりき。十一歳の頃永久の刑罰の問題を考へ、又基督の苦難は人の刑罰に代る者なりとの教理を思ひ、滿足すべき解釋を得ざるが爲に眠らざりしこと數夜に及びたりと云ふ。一七八三年時姉及び弟とともに[2]ニイスキイに在るモラヴィヤ派(同胞教團)の學校に送られたり。シュライエルマッヘルは神秘的信仰の空氣濃厚なる此の別天地に於て教育を受けぬ。其の書翰に曰く『我は暫くの間に多くの經驗をなし自己に關しては多くの罪惡、救主に關して多くの恩寵を經驗したり。我は己より云ふ、我は怒を受くべきものなりと。十字架より小羊は呼び給ふ、我は汝の罪を贖ひたり』と。十七歳の時此處を去りて[3]バアルビイにある同じ派の神學校に進みしが、其の頃より長き信仰上の疑惑に惱まされ初めぬ。入學より六個月の後父に書翰を認めて曰く『我が爲に赦しを神に求めてよ、我は今此の信仰を失ひたればなり。自らを人の子と呼びしものが眞に永遠の神なりしことを信ずること能はず。我は彼の死が代理的贖罪なりしことを信ずること能はず　彼が然かく明言せしことなければなり。又我は其の必要ありとも思はず、何となれば神は元來人を完全なるものに造らず、ただ完全を追ひ求むるものとして造りたれば完全に達せざりしとて永久の罰を人に加ふることはゆめあるまじき事なればなり』。博く書を讀み自由に研究して此の疑問を解釋することは此の學校の許さざる所なりければ、彼は衷心の願を父に訴へ、漸くハルレ大學に轉ずることを許されぬ。彼の伯父は此の大學にて教授したり。斯くてモラヴィヤ派と別れたれども彼等より受けし感化の大なるを謝し、他日懷疑の嵐の間に己を支持したるものは此處にて養はれたる神秘的傾向なりしことを許し、『余は再びヘルンフウトの徒となれり、ただ高等なるヘルンフウトの徒なるのみ』と云へり。ハルレに學ぶこと二年、學資の乏しくなりし爲め一

2 Niesky
3 Barby

信仰上の疑惑

ハルレ大學に入る

七八九年大學を去り、説教者となりてドロッセン[4]に赴任したる伯父の許に留りて研究に耽りぬ。一七九〇年二十二歳にして第一回神學試驗に及第して説教者となれり。三年間或る伯爵家の家庭牧師となり、其の後ランヅベルグの老牧師の補助者となりて二年間牧師の務を爲ぬ。此の間に第二回の試驗を通過して按手禮を受け一七九六年より伯林郊外の慈善病院の説教者となり六年間在職したり。ハルレ大學在學以後の十年間は該博なる知識を蓄積して將來の基礎を築きし時代なり。彼は既に存せる大思想の系統を研究し批評する間におのづから獨立せる思想の天地を開拓せり。一七八六年より十年間は專らカントの研究に從事し、一八九四年以後はスピノザを研究して之に傾倒し、（其の宗教論のうちに『いざ我と共に尊み敬ひて聖なるしかも畏せられざるスピノザの英靈に頭髪を捧げよ、氣高き世界精神彼を貫けり。無限者彼の始にして又終なり、「宇宙は彼の唯一永遠の愛なりき」と云へり）又プラトオンをはじめ古代哲學に及べり。

カントとスピノザ

病院の説教者たる間にシュライエルマッヘルはシュレエゲル兄弟、ノヴァリス、チイク等ロマンチック主義の人々と交を結び其の感化を受けしこと少からず。一七九九年『宗教論』[7]を著し、一八〇〇年『獨語』[8]を著せり。其の頃シュレエゲルと協力してプラトオン集の翻譯に從事せしが其の後二人の交情前日の

7 Reden über die Religion
8 Monologen
4 Drossen
5 Landsberg

如くならず、獨力之を完成して一八〇四年に初卷を一八一八年に最後の卷を出版したり。一八〇四年ハルレ大學の員外教授に招聘せられ翌年より大學の講壇に立てり。一八〇七年伯林に歸り私學を開きて哲學を教授せしが、一八〇九年三一會堂の牧師に任せられ、翌年友人ウィルリッヒ[9]の寡婦と結婚せり。當時普魯西國フリイドリッヒ・ウィルヘルム伯林大學創立を計畫し、シュライエルマッヘルも之に參與せり。一八一〇年大學の設立せらるるや、彼は神學教授に任ぜられ、爾後二十一年間同じ椅子を占めたり。彼は毎日曜日には説教したり。普魯亞がナポレオンと戰ふや彼は講壇より愛國の精神を鼓吹せり。戰後ルウテル派教會とカルヴイン派教會と合同の議あるや之が爲に熱心に力を盡したり。一八二〇—二一年其の神學を系統的に論述したる『基督教の信仰』[10]の著成り、十年後大に訂正を加へて第二版を出版したり。一八三四年二月肺炎にかかりて死す。齢六十八歳。

人格と思想の要素

10 Der Christliche Glaube
9 Willich

シュライエルマッヘルは天性宗教心篤き人なり。モラヴィヤ派の神秘的敬虔の空氣に育てられて深き宗教的經驗を經たり。加ふるに博き教養を有し、醇美なるものを時代の思想より吸收して己の者となし、獨立の精神を以て

思想の建設を試みたり。彼は遠く希臘思想の泉に飲みぬ。羅甸型の思想基督教の神學を支配すること久しかりしが、シュライエルマッヘル出づるに及んで希臘型思想の勢力の復興を見たり。彼の神學は昔のクレメンス、オリゲネスの神學に似たる所多し。啓蒙思潮の興へたるものを維持し、スピノザ、カント、シェリングの哲學、ロオマンチシスムの氣風は皆彼の思想綜合の材料を供給して美しき調和を保ち、此の間に彼の創造的思想を發揮するを妨げざりき。彼の思想には發展と變遷あり、『宗教論』と『基督教信仰』の間に之を見るべく、兩書の初版と續版の間にも若干の不同ありき。カントが哲學の基礎を經驗に求めし如く、シュライエルマッヘルが神學改造を試むる出發點は宗教的經驗にありき。故に彼の神學には主觀的個人的要素多し。然かも彼の所謂宗教的經驗は全く個人的に偏せるに非ず、宗教的經驗に於て教會の地位を認識す。

宗教とは何ぞや

宗教とは何ぞや。シュライエルマッヘルは曰く思惟にも行爲にもあらずして直觀（アンシャウヌング）と感情（グフュール）なり、小兒の如き受働性を以て宇宙の直接の影響により捉へられ充たさんとす。直觀と感情とは本來分つこと能はざる同一の働にして其の根源は直接なる宇宙の經驗なり。これ『宗教論』第一版に於て與へたる定義なるが、後に至りて直觀を省きて單に感情に歸し、又「自然」と云はずして「神」と云ひ、宗教の本質は神に對する絶對的歸依の感情に存すと云へり。これを敬虔と云ふ。敬虔は神に屬する意識なり。基督教の敬虔とは基督を創造者とせる關係を有する敬虔なり。シュライエルマッヘルは宗教を以て感情の働きとなすことによりて、形而上學及び道德と獨立せる領分を之に與へたり。

基督教の本質

基督なる仲保者によりて得らるゝ救拯、これ基督教の本質なり。シュライエルマッヘルの神學は基督中心の神學なり。基督により得らるゝ救の經驗を記述するこれ教義神學の本分なり。之より救はるべき罪とは何ぞや。感覺が靈を征服することなり、世間に屬する意識が神に屬する意識に勝つことなり。これ人類の發達に於ける低き段階を示すものにして、始め無罪の狀態ありて墮落してかくなりしにあらず。基督は罪無し。『基督の爲す所は完全に神の意志に一致し、人性に於ける神に屬せる意識の支配を純粹完全に表示せり。我等と彼との關係の基礎こゝにあり』。我等はこの基督と活ける結合をなすことにより救拯を得べし、『彼と我等との間に成立せる活ける交通によ

基督の人格

り、神の意志は我等のうちに働き、我等は彼の完全に參與するものとなる現實に於ては然らずと雖も刺戟と契機（アンチリイフ）に於て然かあるを得るなり』。

基督は人類の原型（ワールビルド）なり。歴史的個人と理想的人格とは彼に於て完全に相一致す。人類の創造の冠冕となり、又新しき人類を創造する型となる。これ神の第一創造を完成して之を超越せる第二創造なり。基督の此の世界に現るゝは實に奇跡なり。彼は處女懷胎を信ぜずと雖も、靈的意味に於ては彼の生るゝは超自然的なるを主張せり。

基督の苦難は彼と人類との間に存する無比なる結合より生ず。苦難のうに我等は彼の聖潔と祝福とを見る。是の如き經驗のうちにさへ奪ふべからざるを見て我等は初めて能く彼の聖潔と祝福とを觀るを得るなり。

第三十八章　シュライエルマッヘルの後

ヘエゲル

シュライエルマッヘル以後の獨逸神學の狀態を知らんと欲せば、先づ他の大なる勢力あるヘエゲルを說かざるべからず。カントとヘエゲルの間に出でたるフィヒテ、シェリング、ヤコビの哲學は姑く之を省くことゝすべし。ゲオルグ・ウィルヘルム・フリイドリッヒ・ヘエゲル[1]は一七七〇年生れ一八三一年に死す。シュライエルマッヘルより二年の後に生れ三年早く死せり。スッットガルトに生れチウビンゲン大學にて敎育を受けたり。慧敏の質にあらずして晩成の器なりし故一時年少の友シェリングの感化の下に在りしが漸次に獨立せる思想の系統を建てたり。一八〇八年ニウルンベルグの中學校（アカデイオ）の校長となる。此の間に彼は其大著『論理學』を成せり、一八一六年ハイデルヘルグ大學の哲學敎授となり、次で伯林大學に轉じ、フィヒテの後を襲ふて敎授の椅子を占め、一八三一年死するに及べり。此の時代に於て、殊に一八二三年乃至一八二七年までヘエゲルの勢力盛を極め、獨逸思想界の王者たりき。『宗

1 Georg Wilhelm Friedrich Hegel

ヘエゲルの實在論

教哲學』と『歴史哲學』とは此の時代に成りて死後出版せられたり。

カントは現象と實在とを對立せしめ、實在は我等の經驗し得ざるものとなせしが、ヘエゲルの實在は經驗のうちにあり。宇宙の全生命は歸する所絶對者が自覺に達する過程なり。宗教は人の靈が之によりて事物の性質を了解する作用なり、言ひ換ふれば絶對なるものが完き自意識に達する作用なり、故に宗教は其の最高なる形に於て哲學と一致す。『哲學は其れ自身神に仕ふる一種の奉仕なり、宗教なり』哲學にもあれ宗教にもあれすべて絶對者の自覺にして歴史は其の過程なれば、發展の全體に就きて實在を觀ざるべからず、歴史の價値こゝに存す。すべて發展には措定、反措定、綜合の三の過程あり。此の三を綜合したる所に實在あり。部分的の事象は抽象的なり、眞理は具體的ならざるべからず。全般的の眞理に照して個々の經驗の意義、其の占むる地位を示すこれ哲學の目的なり。

ヘエゲルは此原理を應用して歴史の意義を解釋せんと試みたり。宗教發展の歴史亦然り。第一に自然の宗教あり無限の觀念主となりて個人之に吸收せらる、支那印度の宗教之に屬す。次に過渡の形たるペルシヤ、スリヤ、埃及の宗教を經て猶太、希臘、羅馬の宗教あり、それ第二の種類にして心靈的個人性の宗教なり。第三の基督教に於て綜合に達す。故に基督教は絶對的宗教なり。

この兩極端を綜合すべき宗教は基督教なり、基督に於て神と人とは具體的全性を構成す、有限の裡に含まれたる無限の神を見出す、これ即ち基督教の根本思想にして、想像的の言語を以て此の思想の發展を示すものこれ即ち基督教の教義なるなり。三一神の教義亦然り。父なる神に對して子あり。之を綜合する聖靈ありて神は自己の意識に達す。これヘエゲルの解釋なり。彼は又罪惡の教理を説明して曰く、意識に必要なるものは分化なり。分裂を經て後自我の意識に達す。ここに於て罪あり。故に罪の意識は人類の發展に於て經るを要する過程なり。

ヘエゲルの哲學は知識の全範圍を包括せる大系統にして一時は神と宇宙の秘義之によりて解決せられたるが如く思はれ、基督教の側よりも熱心に歓迎せられたり。然れどもヘエゲルの立場は其の根本に於て主知的汎神的にして基督教の立場と一致すべきものにあらざることは漸く認められぬ。然

れどもヘエゲルが基督教の思想に及ぼしたる影響は頗る大なるものあり。獨逸の神學界に及ぼしたる影響は以下に記す如し。其の外英國に於てはヘエゲルの系統に屬せるジョン・ケヤアド[2]、其の弟エドワアド・ケヤアド[3]、倫理學者チイ・エッチ・グリイン[4]等の思想を媒として基督教神學に及ぼしたるヘエゲルの感化亦決して淺からず。

ヘエゲルの哲學が神學に及ぼしたる感化は先づ歴史的批評の領分に於て最も明に現れぬ。所謂チウビンゲン學派はこれを代表す。

ダヴィド・フリイリドリッヒ・ストラウス[5]（一八〇八―一八七四）はチウビンゲン大學に學びシュライエルマッヘル及びヘエゲルの書を讀めり。卒業後牧師の補助となり、或は學校の教師となりしが、一八三一年二大家の講義を聽かんとして伯林に行けり。此の時ヘエゲルは既に死せし後なりし故シュライエルマッヘルの講義を聽けり。然れども性の近き所はシュライマッヘルにあらずしてヘエゲルにあり。翌年チウビンゲンに歸りてヘエゲルの哲學に關する講演を爲す。一八三五年『耶蘇傳』を出版し獨逸の宗教界に大なる動搖を起したり。

2 John Caird
3 Edward Caird
4 T. H. Green
5 David Friedrich Straus

ストラウスの議論によれば、初代の基督教が耶蘇につきて有したる觀念は知らず識らずの間化して事實となり、神話的の物語を成せり。人一代の間に此の如き變化はあり得べし。耶蘇なる人物は存在したるに相違なきも彼に就きて知り得らるべき史實は極めて僅少にして、今日行はるる教義の基礎となり得べきものなし。然らば耶蘇の奇跡的誕生、奇跡、復活、昇天等は何等の根據なき信仰なるかと云ふに、歴史的には價値なしと雖も、形而上的觀念の象徴として見れば大なる價値あり。散文的の固定したる記述よりも一層完全に靈的眞理を表現すること多し。人道なるものは神人兩性の結合によりて生れたり。無限の靈有限のうちに現れ、有限なるもの無限を想起す。無罪の性も死も復活も人道の歴史に於ける事實として解釋せらるべきものなりと。基督教の中心眞理は總合したる人類に於て神自己を現實にすと云ふにありて之を通俗的に表示したるもの今日の耶蘇に對する信仰なりと。これ全くヘエゲルの議論を踏襲せるものなり。ストラウスは『耶蘇傳』を著して後其の地位を失ひたり。一八六〇年通俗なる『獨逸人民の爲の耶蘇傳』を著せり。死する少しく前『舊信仰と新信仰』を著し、全く基督教を離れて唯物論厭世主義の徒

6 Leben Jesu für das Deutsche Volk
7 Der Alte und der Neue Glaube

となりぬ。

ストラウスが耶蘇傳に向て爲せし批評を基督教歴史に加へしものをヘエルデナンド・クリスチャン・バウル(一七九二―一八六〇)となす。[8] 彼はストラウスの師なれども著書はストラウスより後に出でたり。牧師の子にしてチュビンゲン大學に學び、第十八世紀に於て此の大學の榮たりしベンゲルの流を汲んで聖書研究に熱中したり。一八二六年神學教授に聘せられ以後三十四年間非常なる精苦勤勉を以て研究と教授に精力を注ぎたり。シュライエルマッヘルに動かされたる時代ありしも其思想を支配したる勢力はヘエゲルにてありき。主要なる著述はストラウスの「耶蘇傳」の出でし後に成りしも其研究は其の以前より獨立の途を執りて進行しつゝありしなり。彼は先づ保羅の書翰の研究に着手せり。一八三八年『基督教和合の教理』一八四一―三年に『基督教の三一神及び成肉身の教理』一八四七年に『基督教教義史』一八五三年『初三世紀の教會歴史』を著し、後中世より第十九世紀までの教會史を完成したり。バウルは以爲く歴史的事實の問題を決する前に、其の事實を傳へたる著者が如何なる目的を有し、如何なる傾向に支配されたるかを質さゝるべからず。福音書

8 Ferdinand Chistian Baur　バウル

に關する問題も先づ研究を此處に起さゝるべからず。新約聖書に收められたる諸書は孰れも傾向を帶びたる文書なり。使徒時代には狹隘なる猶太的律法的の基督教とパウロの世界的基督教との間に激しき爭鬪あり。此の爭鬪は百五十年ほど繼續し、終に綜合調和せられて公同(カトリック)教會は生れたり。新約の文書は此の史的背景に照して其の年代眞否を定むを得べしと。これヘエゲルの史觀を基督教史の研究に應用したるものなり。其の觀察には主觀的獨斷的の分子多しと雖も鋭利なる史的批評によりて問題を與へ研究を刺戟したる功大なるものありき。

ストラウスの死によりて生じたる空位を充たしたる學者をビイデルマン(一八一九―一八八五)とす。[1] 彼は瑞西の人チウリッヒの近傍にて生れ、同市にて教授せり。ストラウスを嘆美し其の批評亦ストラウスと同じく極端に陷れり。然れどもビイデルマンの長ずる所は歴史の方面にあらずして系統神學の方面にあり。其の著「教義神學」(一八六九)は學識に於てストラウスの上にあり。其文章亦力あり。彼も亦ヘエゲルより受けし感化の痕深く救拯の原理と救主の人格とを區別す。基督の人格に適用すれば立ち得ざる教義も、神と人との本體

1 Alois Emanuel Biedermann　ビイデルマン

的一致に就きて之を見れば眞理なり。成肉身は或る一の時に生じたる事件にあらずして神の生活に於ける無始無終の要素なり。贖罪、復活、昇天ともに時間以上の事實として觀るを要す。ビイデルマンは斯く救の原理と其の救主とを區別して然る後二者の一致を見出さんと試み、基督この原理を意識して之を世に知らしめしを說く。

すべてヘエゲル派に屬する神學者は歷史的の事實を離れて觀念のみに重きを置く弱點あり、然れども歷史的事實に籠れる普遍的意義を發見せんと勉めたる長處も忘るべからず。

中庸派

ヘエゲルの感化の少き方面にシュライエルマッヘルの感化は多く現れたり。中庸派或は自由福音派と稱せらるゝ一派の神學者あり。系統神學の方面にはドルチル、ユリウス・ミウレル、ロオテ、ニッチあり、歷史の方面にはネアンデルあり、聖書學者にはリウッケ、タラック、ブレエキの人々あり。中庸派と云ふも必ずしも折衷調和を旨とするにあらず、彼等は各獨立したる見解を具ふる學者なり。シュライエルマッヘルの感化を受け、同じく宗教的經驗を神學の基礎とすれども之に加ふるに客觀的要素の存するを認む。彼等は又宗教は感情にのみ存在せず、知と意との活動を含むことを主張す。神の人格、基督の神性、其の奇跡、信仰によりて義とせらるるの教理は彼等の信ずる所なり。

[4]イサク・アウグスト・ドルネル(一八〇九—一八八四)[2]に「基督教教理の系統」「基督教倫理」「基督の人格の教理の歷史」「プロテスタント神學歷史」の四大著あり。孰れも該博なる學識と組織の力を見るべし。彼はヘエゲルの感化を受くる所あれども神學の基礎を哲學に求めずして宗教に求めたる所シュライエルマッヘルに近し。ドルネルの神學の中心思想は成肉身に在り、神と人は反對せるものにあらず、人のうちに無限なるものあり。神のうちに己を人に與へんとする性あり。神人の現るるは道理上あるべきことなり。これ成肉身の道理なり。基督に於ける神人の生命は初より完成せられしにあらず、人的方面の生長に伴ひて神を容るる力生長して次第に完全に達したりと說く。これドルネルの神學に於て獨特の思想なり。

[5]ユリウス・ミウレル(一八〇一—一八七七)はハルレ大學の教授なり。罪の問題の研究に畢生の力を注ぎ、「基督教の罪の教理」と題する此の問題に關する無比の大著を

2 Isaac August Dorner

5 Julius Müller　ユリウス・ミウレル

成せり。彼はカントと同じく罪を以て意志の自決に歸す。然れども實際は自由の自決と從前より定まれる所と相合するが故に、溯つて終に純然たる自決あり、即ち最初撰びて罪を取りたる處に達す。この自決は此の世の生活以前に求めざるべからずと云ふ結論に到着したり。

リチヤアド・ロオテ[6]（一七九九―一八六七）はハイデルベルヒ大學の教授たり。其の大著は『神學倫理』なり。ロオエは最もシュライエルマッヘルに近く、神學は基督者の有する神の意識より論理的徑路を逐ふて演繹せられ得べしと考へたり。彼は贖罪論に於て獨創の思想を發揮したり。

カアル・エマヌエル・ニッチ[7]（一七八六―一八七〇）は始めボン大學に教授し後伯林大學に移れり。「基督教教理系統」「實際神學」の大著あり。

ヨハン・アウグスト・ウヰルヘルム、ネアンデル[8]（一七八九―一八五〇）はゲッチンングンに生る、父母は猶太人なり。十七歳の時洗禮を受けハルレ大學に於てシュライエルマッヘルに學び、一八一一年ハイデルベルヒ大學に於て教師となり、二年の後伯林大學に聘せられて教會歷史の教授となる。脫俗の學者にして終身娶らず。該博なる史料の知識に加ふるに各時代の歷史に於て宗教的價値を

6 Richard Rothe
7 Carl Immanuel Nitzsch
8 Johann A. W. Neander

ロオテ　ニッチ　ネアンデル

觀得る同情を有す。『基督教及基督教會史』「使徒時代の教會の建設訓練史」「教理史」皆好著なり。又基督傳を著してストラウスに對抗せり。

フリイドリッヒ・アウグスト・トオルック[9]（一七九九―一八七七）伯林大學にてシュライエルマッヘル及びネアシデルの教育を受け、長くハレル大學の教授たり。信仰の人にして大なる感化あり。著書亦多し。

シュライエルマッヘルの感化を受けしことは中庸派の神學者と同じけれども彼等よりもルウテル教會の信條に合するを重ずる一派あり。エルランゲン大學に屬するホフマン[1]（一八〇六―一八七〇）トマシウス[2]（一八〇二―一八七五）の人々、又一八六八年よりライプチッヒに據りて戰ひたるルタアトはこの派の有力者なり。

リッチル及びリッチル學派の事は現代に近きを以て之より以前に屬する他の歷史を語りて後之に復り來るべし。

1 Hoffmann
2 Thomasius
9 F. A. Tholuck

第三十九章　「オクスフォルド運動」以前の英國の基督教

三の思潮

第十九世紀前半に於て英國の宗教界を支配したる三の思潮あり。第一は前世紀末に於て勃興したるメソヂスト及び福音派（エバンゼリカルパアチイ）の勢力なり。メソヂスト教會の創立者は前世紀末世を去りしが、福音派の人々には「眞理の力（ヴァーチュオブツルウス）」の著者トマス・スコット猶ほ生存し、チャアルズ・シメオンはケムブリッヂにて説教し、ウイルバフォースは奴隷廢止の爲に盡力したり。されどこの一派の勢力は主として實際生活の方面に存し、深き思想の問題に觸れず、根本の哲學を有せざりき。第二は英國々教會内の「高教會派（ハイチャーチパアチイ）」なり。監督の職が使徒以來の承傳なることを主張し、細密なる儀式を用ふることは此の派の主義とする所なり。此の派の勢力は「オクスフォルド運動」に於て盛を極めたるが、第十九世紀の始に於ては未だ見るに至らず『高くして（ハイ、アンド）乾ける（ドライ）』狀態に在りき。佛國の革命思想の影響は第三の思潮を成せり。ルッソオによりて叫ばれたる『自然に歸れ自然の感情に歸れ』との標語は獨逸に於ける如く英國にも響き渡りて先づウォルヅウォルス、シェレエの詩想を喚起し、自然を愛する新なる感情を歌はしめぬ。政治界に於ける平民主義の勢力亦大に興らんとせり。此の時に當りウォルヅウォルス等と同じくロオマンチックの感情に動かされ、且つ獨逸に興りたる唯心的哲學の流を汲み新しき宗教思想の道を示したるものをコオルリッヂとなす。

1 Samuel Taylor Coleridge　コオルリッヂ

サムエル・テイロル・コオルリッヂ（一七七二―一八三四）は湖畔詩人の一人として普く知らる。ケムブリッヂ大學に學び、又オクスフォルドに在りしことあり。青年の頃ユニテリアンに屬し或時は其の講壇に立てり。二十六歳の頃ウォルヅウォルスと相識り、僧に居をカムバアランドの湖畔にトして親密なる交を結べり。一七九八年相携へて獨逸に遊びぬ。老詩人クロップシュトックを訪ひ、ウォルヅウォルスと別れ九ケ月ばかりラッチェブルク及びゲッチンゲンに留りて心理學物理學等の講義を聽けり。コオルリッヂは非凡の天才なり。其の鋭敏なる感覺と鮮明なる想像と、奇警なる觀察に加へて博き教養を以てす。ただ意志の力薄弱にして、其の思想は創始力に富めども斷片的にして系

統をなさざる憾あり。三十歳の頃病の爲め鴉片劑を服せしより用ひ慣れて復た自ら制すること能はず、心身ともに萎衰して殆んど十年間は爲す所なく空しく放浪の生活を送れり。然れども終に猛然として覺醒し、倫敦のハイゲエト丘上に住める友人醫師ギルマンの家に寓して健康の回復を圖り、宗教的眞理の研鑽講明に殘生の力を獻じたり。カアライルの云へる如く『研究心の盛なる青年の間には文學者よりも一段高き豫言者若しくは「マジ」の如き人として崇められたり。英國に於て獨逸の超越的哲學(トランセンデンタル、フィロソフィー)の鑰を有し、悟性を以て信じ得ざる事を理性を以て信じ得るてふ幽玄なる教義を識れる唯一の人と仰がれぬ』(ハタアリングン傳)。『省察の栞』[2]『研究的精神の告白』[3]の著其の間に成りぬ。

思想の本源

2 Aids to Reflection
3 Confessions of an Inquiring Spirit

コオルリッヂは英國の哲學者ロック、ヒウーム、ケムフリッヂのプラトオン學者の思想に通じ、又カント、シエリング、ヘルデルの著書は大抵之を精讀し、アレクサンドリヤの學者の註解によりてプラトオンを讀み、スピノザを崇拜し、『此の書は我が爲に福音なり、然れども其の哲學は誤れり』と云ひしと云ふ。カントの悟性(ザアハタンデング)と理性(ヴイヤン)との區別は彼の思想の基礎を供したり。悟性は感覺に原きて判識する力にして其の判斷は相對的なり、之を用ひ得べき處は自然界に止まる。理性は一層根本的必然的なる眞理を直覺する能力にして、其の判斷は絶對的なり、感覺觀念の總合を經ずして直に其の物に到達す。斯の如く自然界に到る道と超自然界に到る道とは全く相異れり。故に第十八世紀の神學者の唱ふるが如く自然宗教なるものあるべき筈なく總ての宗教は皆靈的なるべきものなり。これコオルリッヂの宗教論の根底なり。彼は宗教を知識理論の問題と見ず、人の生命の中より發したるもの、其の高き處と契合し得べきものと說く。マルチノオの云ひし如く『コオルリッヂはカントとシェリングとの啓發とによりて心理學と神學との境界線上の領土を占有することを得たり』と。彼の天才は基督教の教理と人の性情と相繫る妙境を解釋する點に於て最も多く發揮せられたり。

罪及び贖罪

コオルリッヂの罪を論ずるや略ぼカントに近し。曰く原罪と云ふは贅語なり、罪は盡く原罪なり。原罪にあらざる罪は病なり、災なり、罪にあらず。罪は意志の理より生る。總ての人の意志は罪に趨く傾向あり。アダムも亦罪の意志を有したり。然らば其源何處にありや、始祖の罪と我等の罪と如何に關係せるか、これ知るべからざる領分に屬すと云へり。贖罪を論じて曰くパ

ウロは四種の類喩(メタフォル)を用ふ。(一)罪の爲に捧ぐる供物、(二)和合、(三)奴隷の境界より贖ひ出す、(四)負債を償ふことこれなり。これ等は贖罪なる教理の一面を表現するものにして具體的實際的の意義を以て之を包めるものなり。基督の死如何にして我等の罪を贖ふか、これ我等の經驗の到達する能はざる秘義なりと云へり。

聖書論

『研究的精神の告白』は聖書に關する意見を述べたるものなり。聖書のうちに初めて我を發見す、これ神の啓示の書たる證據にして外部の證據は之に比すべくもあらず。又聖書の各部誤謬なしとの說を難じ、聖書全体の精神に照して各部の價値を定むべしと云へり。大體ヘルデルの主張に同じ。今日に於ては何の奇無しと雖も當時に於ては人の未だ言ふ能はざる所にてありき。

コオルリッヂの感化

ニウマン曰く『英國教會の感情及び議論に哲學的の基礎を供給したる非凡なる思想家(コオルリッヂを指す)あり。彼が自由なる思想を縱にするや基督者として許すべからざる處に馳することあれども、研究的精神ある人に從來ありしよりも高等なる哲學を注入せり。是の如くして彼は一代を訓練し、時代精神をして正統なる眞理に興味を有せしめたり。』其の外マウリス、ミルブ

オリエル學校派

1 Oriel College
2 Thomas Arnold
3 Whately
4 Hampden
5 Hawkins
6 Laleham
7 Rugby

トマス・アルノルド

シネルの諸人孰れもコオルリッヂより受けし感化の大なることを證言したり。

コオルリッヂに次ぎて與りし勢力は一八一〇年より一八二〇年の間に於てオクスフォルドのオリエル學校に集りたる一派なり。ニウマン等も之よりやゝ晩くオリエルに在りし故區別するために前オリエル學校派とも稱す、トマス・アルノルド、ホエトリイ、ハムプデン、ホオキンス等の人々之に屬す。少壯の氣力を以て進歩的思想を皷吹し、自由なる研究を唱道せり。神祕の調子は乏しけれども道德的精神に充ちたり。

トマス・アルノルドは(一七九五―一八四二)はオクスフォルド大學に學び、詩人コオルリッヂの甥コオルリッヂ及びキイブルと交を結べり。一八一八年按手禮を受けて教職に就きサアレエ縣のレエルハムの教會の牧師となれり。其の傍ら教育に從事し、歷史を研究したり。彼はネルソン、ウエリントンの功名世界を動したる時代に生長し希臘羅馬の古史に大なる興味を有せり。一八二七年有名なるラグビイ學校の校長に擧げられ、爾後十四年間少年の教育に身を捧

げ、其の感化著しく、ラグビイの博士トマス・アルノルドの名を世界に高からしめたり。アルノルド傳をものせる「デイン」[8]・スタンレイ、『ラグビイに於けるトム・ブラウン』の著者トマス・ヒューズ[9]は其の門より出でたり。一八四二年オクスフォルド大學の近世史の教授に聘せられしが、同じ年病を得て死せり。子にマシウ・アルノルド、ハムフリイ・ワアド夫人（宗教小説『ロボルト・エルスミヤ』等の著者）あり。

アルノルドは其の友キイブルより感化を受けたれどもニウマンの如き方向に進まざりき。コオルリッヂより學びし所亦大なりき。之を評して『其の人は豊富にして且つ強く、包括力ありて且つ批評的なり、氣象は常に斯くも純粹にして潑剌たり』と云へり。彼は羅馬に於て獨逸の史家ブンセン[10]と交を結び、此の人によりて歴史及び聖書解釋の文學と接觸を保ちたり。ブライデラアは彼を以て英國の自由神學者の翹楚となせり。彼は聖書の批評的研究を是認し、しかも其の靈的方面に對して敬虔の態度を持したり　アルノルドは又國家と教會との關係につきて一個の見識を有し、國教會の門戸を開きて今日の非國教會徒も包容し得べきものとなし、國家と教會と一の目的の爲に力を盡し得べきことを主張せり。

8 Dean Stanley
9 Thomas Hughes
10 Bunsen

ハンプデン問題

此の派の一人なるハンプデンは一八三五年バムプトン講演に於て『スコラ哲學と基督教との關係』を講じ、教父時代と中世の哲學が教義神學の基礎となれること多きことを論じたり。此の講演は教會に物議を惹起し、論戰長きに亘りたり。反對の地に立ちしはニウマン等の率ゆる一派にして、メルボルン郷が一八三六年ハムプデンを神學教授に任せしに反對せしも納れられず。是に於て大學の爲め説教者を撰定するに當りハムプデンの投票權を奪はんとの議を提出し、大學の會議に於て大多數を以て可決したり。

第四十章　オクスフォルド運動

「オクスフォルド運動」[1]は一に「小冊子派運動」[2]と稱せられ、又後重き關係を有するに至りたるピュゼエ[3]の名に因みて「ピュセイズム」と稱せらる。オクスフォルド大學を中心として起りたる宗教的運動にして、實に第十九世紀の英國宗教界に於ける最大の事件たり。前世紀のメソヂスト勃興に比すれば、靜にして且つ範圍狹かりしも深きことは寧ろ優る所あり。一八三三年の夏に始まり活動の盛なりしは一八四〇年頃までなりしも、今日に至りても其の餘力猶ほ竭きたりと云ふべからず。爵然として勢力の源をなせり。

原因

「オクスフォルド運動」の原因は獨り之を英國内の事情にのみ求むべからず。一時歐洲大陸に漲ぎりし潮流の一波動とも見るを得べし。佛國革命の個人的破壞的なる運動の後に反動起りぬ。團體、秩序、傳說權威を重ずる思想は文學界に於ては「ロオマンチシズム」となり、政治界に於ては國家主義となり、宗教界に於ては極端に法皇の權威を重ぜる佛國の「アルトラモンタニズム」[4](第四十五章參照)となり、英國「に於てはオクスフォルド運動」となれり。孰れも近世的精神に反抗して中世の生活及び宗教に現れたる精神を讃美したり。英國に於てはウオータア・スコットの小說盛に行はれて回顧の趣味喚び起されしも一原因となりぬ。中世の思想の林より流れ出でし勢力は近世的革命の海より寄せ來る潮流と相觸れて波瀾を捲き起し英國教會の田園に溢れしめぬ。其の動機には保守的反動的の分子もあれども此の運動の窮極の精神は之と區別して見ざるべからず。「ヂイン」チャアチの云へる如く「教會を沈滯の中より呼び醒して其の宗教を一層深く且つ堅實なるものとなし、之を純粹、有力なるものとする」にありき。加ふるに中心となりし人物の高潔無私なる精神品性は此の運動を意味深きものとなしぬ。キイブル、プルウド、ニウマンは其の主動者なり。

1 Oxford Movement
2 Tractarian Movement
3 Puseyism
4 Ultramontanism

精神

ヂョン・キイブル(一七九二―一八六六)はグロスタア縣の牧師の子なり。オクスフォルドのコルパス・クリスチ學校にて教育を受けぬ。人と爲り高潔にして聖者の風あり。學識亦傑出、一八一〇年頃「フェロオ」に擧げらる。數年の後父老ひたるを以て歸省し、父を輔けて牧師の務を爲せり。神秘的の情念に富み、詩才

あり。古文學に通じ、ウォルヅウォス、コオルリッヂの新詩想を愛し作る所の宗教詩積んで卷を爲せるを、一八二七年『クリスチャン、イヤア』と題し、匿名にて出版せり。此は一年中の教會の祝節祭日及び毎日曜日に配せる歌より成り、英國人には久しく忘れられたる種類の宗教的情調を鼓したるものなりければ、忽ち非常なる歡迎を受け、二十五年間に十萬部を發行し、多くの家庭に於て祈禱書と雙び用ゐらるゝ書となれり。一八三一年詩の教授に聘せられてオクスフォルド大學に來れり。彼は英國々教會の風を好みて、權威を尙び、禮典の莊嚴を愛し福音派の調子のやゝ輕き所あるを喜ばざりき、然れども彼は温和謙讓の人なり。彼を推して戰列に立たしめし人はフルウドなり。

[6]リチャアド・ハアレル・フルウド（一八〇三―一八三六）は史家アンソニイ・フルウドの兄なり。一八二一年オリエル學校に入り、キイブルの教を受く。一八二六年「フエロオ」となり、翌年助教となる。一八三一年健康を損し、ニウマンと相携へて南歐に遊び、後西印度に病を養ひしが、一八三六年歸國し、其年病死す。彼は健康を損せざる前は身体健剛、氣象熱烈にして闊志盛に、一種の煽動的才能あり。キイブルに推服し其の思想趣味に同化せられ、又キイブルを動したり。彼はキイブルより一歩を進めて第十八世紀のプロテスタント改革者を攻撃し、修道院生活の復興を唱ふるに至れり。キイブルをニウマンに紹介したるは此の人なり。

[7]ヂョン・ヘンリイ・ニウマン（一八〇一―一八九〇）の前半生は彼が著したる『アポロギア』[8]に於て之を見るを得べし。ケムブリッヂの小地主の子にして母は佛蘭西の「ユウゲノオ」の後裔なり。一八一六年オクスフォルドのトリニチイ學校に學び、一八二二年オリエル學校の「フエロオ」となり、一八二六年同大學の聖メリイ會堂の牧師となる。彼は少年の時より宗教心篤かりき。オリエルに於てはホエトリイ、アルノルド等所謂オリエル學校派の人々の立場に化せられて自由なる神學思想に傾き、其の說教も大抵倫理的の者なりき。然るに一八二七年キイブルの『クリスチャン・イヤア』出で深き感動を受け、翌年自ら病にかかり、又姉妹の死に逢ひて悲哀の經驗の間に其思想に大なる變化を來し、オリエル派の主知的傾向に滿足せずコオルリッヂの遺したる思想に近けり。一八二九年より翌年にかけて教會歷史を研究したる事は益々新しき道に進ましめぬ。之より先きフルウドの紹介によりてキイブルと交を結びぬ。

5 John Keble
6 Richard Hurrell Froude
7 John Henry Newman
8 Apologia pro Vita Sua

政治上の自由主義

政治上の自由主義はオクスフォルド運動の原因にあらざるも其の機緣となれり。一八三〇年佛蘭西に『七月革命』起り延て歐洲全體に於て民主主義の氣焰大に揚り、英國に於ては「撰擧法改正案」の運動となり、一たび下院を解散し一たび上院にて否決せられし末一八三二年兩院を通過したり。其の結果として愛蘭に於て十個の監督區は廢せられたり。キイブル、プルウドは之を以て英國人民が教會の尊嚴を忘れ政權の蹂躙に委ぬるものとなして憤慨せり。一八三三年七月十日キイブルは大學の講壇に立ちて「國民の變節」と題する說教を試みたり。これより先きフルウドとニウマンとは南歐の漫遊を終へ、翻

旗擧げの日

勃たる精神を抱きて歸國したる際なりければ彼等はキイブルの說教したる日を以て運動の旗擧げの日となしぬ。七月二十二日サッフォルクのハレエと云へる邑の牧師ロオズの家に集會を催され運動の方法協議せられたり。七千人の教師二十三萬人の常信徒の署名したる建白書をカンタアベリイの大監督に呈したる如きこの集會の結果にして老成の人々は倫敦を中心として運動せんとしたり。然れどもキイブル、プルウド、ニウマン等の少壯派は大學を中心として個人的の活動をなすを以て利ありと信じ別個の方法に依る

ことなれり。其の一として同年九月「トラクト、フォア、タイムス」と題する小冊子は發行せらる。ニウマン專ら筆を執りぬ。「小冊子派運動」の名之より生せり。然してニウマンが聖メリイ會堂に於て毎日曜日午後に試みし說教に於て彼の偉大なる品性と崇高なる宗教的情緒は人を動して大なる波動を起しつつありき、一八三五年にはオクスフォルドの希伯來語の教授にしてクライスト會堂の「カノン」たるピウゼエこの運動に加はるあり。[1]エドワアド・ブウヴェリイ・ピウゼエ（一八八〇〇二）は獨逸に學びてシライエルマッヘル、タラック等の神學者と相識れり。其の人物學識はこの運動に重きを加へ「ピユーゼイズム」の名は獨佛以太利にも聞えぬ。此の運動に一八三五年より翌年にかけて著しく發展して大勢力となりオクスフォルドの學生の三分の二は其の味方となりぬ。此の時ゥムブデン問題（前章を觀よ）起りて此の一派の勢力の大なるを示しぬ。

彼等が據て立てる主義亦次第に明に了解せらるるに至りぬ。第一は教會の教義を確守することなり、第二この教義に原きて立ちたる目に見ゆる教會と其の禮典を守ること、第三は英國の國教會はこの系統を傳へたることこれ

なり。ニウマンは曰く『十五歳の頃より教義は我が宗教の根本主義にてありき。一個の感情に止る宗教は余に取りては夢なり、虚僞なり。父なる事實あらずば親子の愛あり得ざる如く至高の存在者なくして敬虔あるを得ず』と彼は時代の精神と戰ひつつある間にも時代の空氣を呼吸せる人なり。唯理說に反動せる時代に生れ理知以外に宗教の立つべき處を求めたるはカント、シユライエルマツヘルに異ならず。ただニウマンは之を長き傳說と蓄積を有せる教會に求めたり。彼は曰く『神存在すてふ信仰は余に取りては最も大なる困難を以て包まれながら最も大なる力を以て我等の精神に入り來る信仰なり』。世界に此の神を求めて見る能はず、宛も鏡に對して我が顏の映らざる如く感じたり、獨り教會に於て神を見るを得べし。『教會無謬てふことは此の世界に宗教を維持すべく造物主の慈愛によりて採用せられたる手段なり。加特力教會以外總ての事は無神論に傾けり』。ニウマンの思想は羅馬教會に近かざるを得ざりき。

此の運動の先輩に非ずしてニウマンの周圍に集り來りし青年の人々ありて其の數と勢力と次第に加はりぬ。彼等の同情は多く羅馬教會に傾きたり。

ワオード　2 William George Ward　3 Littlemore　4 The Ideal of a Christian Church

ニウマン羅馬教會に入る

就中有力なる人物はウイリヤム・デヨルヂ・ワオードなり。此の一派の勢力は次第にニウマンを動かしぬ。一八四一年の春小冊子第九十發行せられぬ。此の小冊子もニウマンの筆に成れり。其の目的は英國々教會を脫して羅馬教會に行かんとするものを止むるにありて、英國教會の三十九箇信條を承認したるものにして羅馬教の教理を信じ得る餘地あることを論じたるものなり、此の一篇出でゝ忽ち大學内の物議を沸騰せしめぬ。ニウマンは一八四一年去つてリツトルモオアに退き、一八四一年聖メリイ會堂の牧師たる地位を辭して、著述に從事せり。一八四四年ワアドは『基督教會の理想』なる一書を著したるが、明に羅馬教會の理想を辯護し、英國々教會の徒は羅馬の前に跪き謙りて赦しと復歸とを請ふべしと云ふに至れり。此の書はニウマンの小冊子以上の議論を惹起しぬ。一八四五年オクスフオルドに大學は大會議を開きて其の立場を否認せり。

ワアドは一八四五年九月先づ羅馬教會に入り、翌月ニウマンも羅馬教會の人となりぬ。一八四九年バルミンガムの「オラトリイ」の長となりて四十年間此の職に留りぬ。其の間著す所『基督教教理發達論』(一八四五年)、『アポロギア』

1 James Bowling Mozley
2 Richard William Church
3 Samuel Wilberforce

（一八六五年）『グラムマア・オブ・アッセント』（一八七〇年）あり。第一の書に於ては基督教は教理風俗ともに初より完成せる者にあらず、發達あるべきを論じてプロテスタントの立場の不充分なるを示し、第二の書は瑰麗の文章を以て自己の思想の取り來れる道を辨じ、第三の書に於ては宗教上の信仰はたゞ知と情を基礎とせず、意志を以て之を受くることにより確實となることを論じたるものなり。

ニウマンとワオード去りて後運動の首領たる地位を占めし者はピウゼエなり。其の信仰は深く精力絶倫にして博學なり、ただニウマンの如き想像の力と透明なる解釋の力を有せざりき。一八四三年聖晩餐につきてなしたる説教は化體説を主張せざるも羅馬教の立場に近きものなりとしていたく反對を受け、二年間大學内にて説教することを止められたり。マンニングをはじめ羅馬教會に入るもの多かりき。

オクスフォルド運動の開始者よりも後輩にして之と志を同ふしニウマンの如く羅馬教に傾かざりし人々には「カノン」モズレエ（一八一三―一八七八）[1]、「チャイン」チョルチ（一八一五―一九〇〇）[2]、サムエル・ウイルバアフォース（一八〇五―一八七三）[3]、グラッドストオンの如き人々あり。

此の運動の結果は英國の社會に於て敬虔恭敬の風を盛にし、宗教的情調を高め、禮典を重んずる風を興し、建築音樂に注意を惹起する等良き感化少からざりき。然れどもニウマンが戰はんとしたる自由思想の潮流は堰き止むべきにあらず、教會は自由思想の價値を認めて同時に堅固なる信仰に立つ思想を重せざるべからず、ここに於て廣教會派は興れり。

第四十一章　モウリス及び同時代の思想家

[1]フレデリッキデニソン・モウリスはニウマンと同じく一八〇五年に生れ、ヂョン・スチュアート・ミルは一八〇六年に生る。カアライルはモウリスよりも十年先に生れ、ロボルトソンは十年晩く生れぬ。キングスレエやマシウ・アルノルドは之よりも更に少し。

モウリスの父はユニテリアン教會の牧師なり。ケムブリッヂ大學に學び、進歩的なる思想に養はれしが、非國教徒たるが爲めに學位を受けずして倫敦に行き、專ら文筆に從事して雜誌に寄稿し小說を著せしことあり。其の頃スタアリングとともにミル、マコオレエ等の結びたる討論會に加はり儕輩の間に推尊せられたり。倫敦に在る間彼の宗教思想は漸く變じ來りぬ。親しくコオルリッヂに接せざりしも其の書を讀みしことが主なる原因を爲せり。一八一九年オクスフォルド大學に入り學位を得、一八二八年按手禮を受けて國教會の教職に就けり。「オクスフォルド運動」の盛時は彼がオクスフォルド

1 Frederick Denison Maurice

を去りし後にあり。忠實なる國教會の徒となりしモウリスはニウマン等の精神に動かされしことは少からざりしも、小冊子(トラクト)に現れたる議論には危險なるものありとなし、之に加はらざりき。彼は蘇格蘭の神學者アルスキン及びマクロウド・カムベル(次章に詳なり)の思想に感化せられし所多し。就職後暫く田舍牧師たりしが二年後ガイス・ホスピタル[2](十七世紀以來の大なる病院)の牧師に聘せられて倫敦に歸り十年間在職せり。其の傍一八四〇年以來キングス・カレッヂの文學歷史の教授に聘せられ、四六年神學の教授となる。此の間彼は博く書を讀んで知識を蓄へたり。一八四六年彼は又リンコルンス・イン[3]の會堂の牧師となる。リンコルンス・インは有名なる法學院にして法律の學生の集る處なり。モウリスは十五年間此處にて說教せり。會衆は多からざりしも精撰せられたる人々にして其感化深く人に入る者ありき。當時ニウマンは羅馬教會に入り、ギイブルは田舍に隱れ、マシウ・アルノルドは悲哀の歌をうたへり。獨りモウリスと其の一派此の間に在りて識者の理性と良心を導きて基督教の信仰に結べり。然れども一八五四年に『神學論集』を公にするや其中に永遠の刑罰は時間の問題にあらざることを論じたるより、物議を釀し、遂にキングス・カ

2 Guyis Hospital
3 Lincoln's Inn

レッヂの神學教授を免ぜらるゝに至りぬ。詩人テニソン一詩を作りてモウリスを慰めしは此の時なり。其の後も彼は說教せしが一八六六年ケムブリッヂ大學の倫理哲學の教授に任ぜられ一八七二年死するに至れり。

モウリスの著書頗る多し。『神學論集』『リンコルンス・イン說教集』『基督の王國』『心理倫理哲學史』『ヨハネ福音及び書翰の講解等は其の主なるものなり。

彼は又社會問題の解決に心を用ひ『基督教社會主義』の旗幟を翻してマンチエスタア派の經濟論と戰ひ勞働者の爲に學校を設立する等多くの犧牲を拂ひて畫策する所ありたり。キングスレエ亦之に與れり。此の事は基督教と社會事業を叙する章に於て更に記する所あるべし。

[1]チャアルズ・キングスレエ（一八一九—一八七五）デヴォンシャヤに生れケムブリッヂ大學に學び、二十五歳の時風景明媚なるハムブシャヤのエヴァースレエ教會の「レクトル」となる。之より先き彼は懷疑の爲に苦しみしがモウリスの『基督の王國』及びコオルリッヂ、カアライルの書を讀んで光を得たり。其の後親しくモウリスに接して教を乞へり。彼はモウリスの如く深き思想家にあらず。神學に於ては始終モウリスの後に隨へり。キングスレエはモウリスに異なれる詩人の天才あり、又史的想像あり、人生と自然の美を樂む力に富めり。社會改良に熱心してモウリスとともに力を盡したり。其の著作のうちには歴史小說なる『ハイペシヤ』[3]『ウエストワアド・ホオ』[4]傑作なり。社會的思想を現したる『アルトン・ロック』[5]『イースト』[6]亦有名なり。其の外說教集及び史論あり。

1 Charles Kingsley（キングスレエ）
2 Eversley
3 Hypatia
4 Westward Ho!
5 Alton Locke
6 Yeast

晩年ウエストミンストルの「カノン」となり、又宮中牧師たり。

フレデリック・ロボルトソン（一八一六—一八五三）倫敦に生れ、オクスフォルドに學び、二十四歳教職に就き、ウインチエスタアの教會にて說教せり。身を持すること太だ嚴格、遂に健康を損して大陸に遊びたり。歸りてチェルテナムの「キウレート」の職に就きしが、疑惑と失望に陷り、再び大陸に遊びチロル及びハイデルベルヒに留れり。時は一八四六年の秋にして、自然の美其の傷める靈魂を醫し、新しき光に浴して歸れり。その年ブライトンの三一會堂の牧師となる。在職七年說教者としての天才こゝに發揮せらる。三十七歳にして死せりと雖も其の說教集は永く說教の典型なり。

7 Frederick Robertson（ロボルトソン）

モウリス、キングスレエ、ロボルトソンの人々は所謂「廣教會」[8]派の首領なり。此の名はスタンレエが、英國教會の眞の性質は高教會にあらず低教會にあら

8 廣教會

ずして廣教會なりと云へるに由來せり。別に黨を結び教派を立てしにあらず。此の一派は「オリエル學校派」の思想の系統を引ける所あり。[9]スタンレエ（一八一五―一八八一）はトマス・アルノルドの門下生にして、オクスフォルドに學び、後カンタアベリイの「カノン」、ウエストミンストルの「ヂイン」たり。文學の人にしてアルノルド傳、猶太教會史は其の傑作なり。オクスフォルドのバリオル學校の校長[10]ベンヂャミン・ヂョウエット（一八一七―一八九三）亦此の派の一人なり。プラトオン全集の譯最も顯る。

以上の人々と略ぼ時代を同じくして出で、英國の思想界を支配し、宗教思想にも少からざる刺戟を與へたる文學者につきて略述せざるべからず。

[1]トマス・カアライル（一七九五―一八八一）初め獨逸の文學及び思想の紹介者として文壇に立てり。獨逸の唯心論の流を汲み、唯物主義、功利主義と戰ひ、神秘、崇敬、誠實の精神を說教せり。彼はプロテスタントの英雄を崇拜すれども、教義を以て象徴となせり。其の議論汎神的の分子多し。

[2]ヂョン・スチュアート・ミル（一八〇六―一八七三）コムトの流を汲み、其の議論は實證主義の上に立てり。然れども彼は自傳に記したる內的經驗を經て人生に對する見解頗る變じたり。『宗教三論』は其の宗教觀を見るべし。彼は神の存在を否定せず又仁愛は神の性質の一なるを認むれども、其の力と知に限あるが如しと云へり。

[3]マシウ・アルノルド（一八二二―一八八八）トマス・アルノルドの子なり。彼は宇宙に『我等の外なる正義に向ふ力』ありとなす。『文學と教義』に於て聖書は文學の書として觀るべく教義の書として見るべからざるを主張す。耶蘇の宗教を論ずるや其の言ひ表し方に特異なる所あり。『パウロとプロテスタント教』も今猶ほ價値を失はず。此人の詩には哀調多し。

ミル　1 Thomas Carlyle　カアライル
2 John Stuart Mill

ヂョウエット　8 Broad Church
9 Arthur Penrhyn Stanley
10 Benjamin Jowett

3 Matthew Arnold　マシウ・アルノルド

第四十二章　蘇格蘭の教會

我等は蘇格蘭の宗教改革の事業の成りし以後此の國の歴史を記述する機會なかりき。されば先づ初に溯りて其の時以來の沿革を略述せざるべからず。

監督政治復興

チャアルス第二世王位に復するに及び蘇格蘭に於ても長老政治に利ある制度は之を廢して再び監督政治を行へり。然して一六四九年以後任命せられたる牧師は其の地位を維持する爲めには新に任命せられたる監督の承認を經ざるべからず。之に屈從して時節を待ちし人も少からざりしが、四百人の牧師は其の地位を擲てり。蘇國の貴族中最も有力なる[1]アアガイル公爵は一六六一年斷頭臺に上せられぬ。民心の激昂日に甚しく、節を變じてセント・アンドリウスの大監督の地位を得たる[2]シャアプは一六七九年暗殺せらる。反對黨のうち最も强硬なりしは[3]リチャアド・カメロンの率ゆる團體なり。彼は迫害せられたる長老教會派の人にして其の權利を防衛せんがために六十人

1 Duke of Argyle
2 James Sharp
3 Richard Cameron

カメロン及び其徒

の同志と劍を執つて起てり。一一八〇年カメロンは奮鬪して斃れたるが其の後一團と爲り强硬に讓歩に反對し、一七四三年には一團體を組織せり。彼等は自から改革主義長老教會と稱したれども人は多く之を[4]カメロン黨と呼べり。一六六一年より一六八九年に至る間に於て此の派の人々にして流竄せられ或は死刑に處せらるゝもの一萬人以上に上りたり。

長老政治復興

チャアルズ第二世は一六八五年死して、ヂエームス第二世位を嗣ぎ、羅馬教の復興を圖りて國民の怨を買ひ、一六八八年の大革命となり、ヂエームスは國外に遁れウイリヤムとメリイとを迎へて國王となせり。蘇格蘭の長老政治は爾來舊に復して國家之を支へ、又種々なる點に於て國家の管轄を受けたり。カメロン黨の人は斯かる關係を喜ばず依然として別個の團體をなせり。

英蘇兩國合併

一七〇七年蘇格蘭と英蘭との合併は實行せられたり。今までは一人の國王を戴きたる二國なりしが、大ブリテンの國名の下に一國となり、一の國會に於て代表せらるゝことゝなりぬ。但し蘇格蘭の教會と法律は合併によりて獨立の存在を害せらるゝことなかりき。これ女皇アーンの朝にありし事件なるが、同じ朝に於て問題となりしは一七一二年に於て復舊せられし「レイ・パ[5]

4 Cameronian

5 Lay Patronage

トロネーヂ」(非敎職者の保護)の制度なり。此は其の敎區の鄕紳其他の有力者が牧師選任及び其他の特權を有する風習を云ふ。當時蘇格蘭にて勢力ありし溫和黨と稱せらるゝ人々はこの制度に贊成したり。此の黨に屬する人は知識的敎養は低からざりしも、宗敎的熱情に乏しく、神學よりも文學に趣味を有したり。彼等は長き間蘇格蘭の敎會に於て勢力を揮へり。英國の超越神敎及びソッィニイの思想の感化亦此處に及びて牧師の大部分は宗敎的經驗なく、靈的の生命枯凋したり。斯かる中にも時代の風氣に反抗して立ちしものも亦これなきにあらざりき。其錚々たるものはエベンザル・アルスキン(一六八〇—一七五四)なり。彼は當時最も勢力ある首領にして又力ある說敎者なりき。一代の敗頽に對して警醒の叫びを擧げ、敎會の總會を攻擊したるが爲に牧師の職を奪はれしが、彼は一七四〇年四人の同志と國敎會を脫して別に團體を造りたり。十年ならずして此の團體に屬する牧師の數四十餘人に上り、牧師敎育の機關を設くるに至れり。之れを稱して「セッセッション・チャアチ」(分離敎會の意)と云ふ。之に次いで一七五二年トマス・ジレスピイと云へる人「非敎職者の保護」により牧師となりし人の任職に參するとを拒絕したるにより敎職を免せらる。

信仰冷却の時代

6 Moderates
7 Ebenzer Erskine
8 Secession Church
9 Thomas Gillespie

彼はダムファーラインと云へる地に住みて敎會を立て六年間の傳道により同志の徒を得、一七八四年總會を組織して之を「リリイフ・チャアチ」と名く、壓迫の大いなる敎會を助くる意なり。信仰はカルヴィン主義にして溫和なりき。一八四七年「セッセッション敎會」と「リリイフ敎會」は合併して一致長老敎會と稱す。更に一九〇〇年に至り「自由敎會」と合併せり。

第十八世紀の末蘇國の國敎會は不振の極に達し、敎職者力なく、人民は不信仰冷淡に陷れり　然るに第十九世紀に入り英國をはじめ基督敎國に漲りし信仰復興の流れ此の國にも波動を及ぼし、沈潛せし蘇國の精神喚起され、力ある人物講壇に立つに至りぬ。就中偉大なるものをトマス・チャルメルスとす。

トマス・チャルメルスは一七八〇年蘇格蘭のファイフシャヤのアンストルウサアに生る。品位ある商家に生れ、カルヴィン主義の空氣のなかに育ちたり。十六歲にしてエデンバラ大學に入り、牧師となる志望を以て神學生となりしも、好んで學びしものは數學、物理學、經濟學等なりき。卒業の後聖アンドリウスを距ること九哩の地にあるキルマニイに聘せられて牧師となれり。其の頃彼も亦一般宗敎界の習氣を脫せず、時間の多分を數學の敎授に用ひ、經

一致長老敎會

1 Thomas Chalmers
2 Anstruther
3 Kilmany
10 Dumfermline

4 Auchterarder
5 Welch

濟學に關する書は最初の著述なりき。其の說敎多くは倫理を說きて宗敎の眞髓に觸るゝこと少かりき、然るに自から長く病床にあり、又近親の不幸に遭ひ、當時又バスカル及びウィルバアフォースの書を讀んで、深き思想の變化を經驗せり。是に於て其の說敎一變して講壇の勢力大に振ひ、ノックス以來此の國の宗敎界になかりし偉大なる力となりぬ。其の後グラスゴオの敎會に聘せられて牧師となり、傍ら敎授し、著述を爲し、慈善博愛の事業を經營せり。一八三四年彼は總會に否認法案を提出して之を成立せしめたり。こは弊害多き「非敎職者保護」の制に對する抗戰にして、此の法によれば「非敎職者保護」によりて任命せられたる牧師と雖も敎會之に不同意を表すれば牧師となるを得ざることに定めたり。數年の後此の法案の効力を試むべき事件生じたり。其はキンノウル侯はアウヒテラアダアと云へる地の牧師としてロボルト・ヤング[4]を擧げしに敎會員擧つて之に反對し、其爭は法廷の問題となれり。裁判所は、敎會、候補者を試驗して資格充分なりと認むれば敎會之を拒むを得ずとの判決を下せり。一八四二年の總會は此判決に抗議し、之を政府及び國會に上告したれども採用せられず。翌一八四三年の總會に於て博士[5]ウェルシは

自由敎會の分立

6 United Free Church of Scotland

一個の抗議を提出して不平を訴へ、且つ國敎會より分離して「自由敎會」を設立する趣意を陳べたり。議員のうち二百三人は此の議に贊成し、四百七十人の牧師は國敎會を退けり。一朝國家の補助を離れて獨立せる「自由敎會」の前途には多くの困難ありき。然れどもチャルメルス及び其同志は良く戰ひ、且つ其の志を助くるもの少からず。先づエヂンバラに神學校を設立してチャルメルス其の校長となり、後アボルヂイン、グラスゴオ兩市にも神學校を立てぬ。今日自由敎會の神學校は此の三市にあり。チャルメルスは會堂建築基金を募りて微力なる敎會の爲めに會堂を建て、又牧師補助基金を作り、牧師の俸給の最低額を百五十磅と定め之に達せざる敎會を助け、牧師の寡婦孤兒救助の道を講じ、外國傳道にも力を用ゐたり。是の如く盛に喚起せられたる犧牲公共の精神は國敎會の人々をも動し、『非敎職者保護』の制も廢せられぬ。分裂當時の反感情も今は和ぎ、敎會の實狀に於ても兩者の間大なる差違を見ず。

一九〇三年「自由敎會」と「一致敎會」との合同成りて、[6]「蘇格蘭一致自由敎會」と稱す。「自由敎會」のうち少數のもの合同に與せざりき。

一八二〇年より一八五〇年までは蘇格蘭の宗敎思想の最も活潑なる時代

なりき。チャルメルスと前後して現れし傑出せる人物を左に擧ぐ。

[1]エドワアド・アルヴィング（一七八四―一八三四）ダムフリシャヤのアンナンに生る。[2]神學を學び、一八一九年グラスゴオに於てチャルメルスの助手となりしが、一八三二年倫敦のカレドニャン教會の牧師となる。其熱烈奇拔なる説教は周圍の諸教會の平板なる調子と反照して人の注意を牽き、多數の會衆を引着せり。其の中には學識地位ある人亦少からざりき。彼は聖書の預言と、聖靈の感化を重じ、主の再臨の近きを説けり。使徒時代にありし如き「方言を語る」現象アルヴィングの教會及び蘇格蘭の或る地方に現れたり。彼は基督の人格を説くや其の人間の全性を取ることを重んじ、基督も亦罪を犯し得べし、ただ限りなく神の靈を受けし爲め罪に陷らざるを得ざりしと説けり。この意見は異端と見做され、一八三二年其の職を罷め、翌年牧師の職を奪はれたり。一年の後健康衰へてグラスゴオに死せり。彼の主義を贊成せるもの『[3]加特力使徒教會』を立てたり。其の會員の中には學識信仰ある人少からず。教會は預言者使徒、傳道者、牧師の四教職を設け、日曜日毎に聖餐式を行ふ。

[3]トマス・アルスキン（一七八八―一八七〇）法律家なれども神學思想に興味を有せり。カ

1 Edward Irving アルヴィング
2 Annan
3 Catholic Apostolic Church
アルスキン

アライルの親友なり。カアライルは之を評して『人のうち最も柔和なる最も親切なる又最も良く育ちたる人』なりと云へり。彼は又モウリス、スタンレエの友たり。モウリスはアルスキンの思想に負ふ所あるを明言したり。其の著述のうち一八二〇年に出でたる『天啓宗教の眞理を證する內部的證明』最も有名なり。彼はシュライエルマッヘル、コオルリッヂと交渉なしと雖も思想の傾向を同じくし、人の理性と良心との要求に滿足を與ふる事實を以て宗教的眞理の證明をなせり。救拯の教理につきて彼は説て曰く基督に於て萬人既に赦されたり。信仰によりて救はるとは信仰を條件として赦すにあらず、ただ赦されたることを意識し經驗するこれ信仰なりと。

[4]マクレオド・カムベル（一八〇一―一八七二）父は牧師なり。グラスゴオ及びエデンボロオに學び、[5]ロオの教會の牧師となる。品性清高にして篤學の人なり。アルスキンと親しく神學上の意見亦相近し。アルスキンは來りてロオに住ひ其の他進歩的の意見を有するものロオの教會を中心として一團となれり。一八三一年の長老教會の總會はカムベルの説く所教會の信條に合はずとの理由を以て牧師の職を奪へり。彼が基督は萬民の爲に贖をなせりと説きしは理

3 Thomas Erskine
4 Macleod Campbell
5 Row カムベル

カムベルの贖罪論

由の一なり、又救はるとの確信(アフシュランス)なかるべからずと說けりと云ふことは他の理由とせられしもカムベル自身はこれ彼の意見にあらずと解したり。職を罷められて後彼は靜なる處にて靜に敎會の務を爲し、又著述に從事せり。一八五四年其の大著『贖罪の性質』を公にす。贖罪論に關する近世の著述の中最も重要なるものの一なり。

カムベルは基督の贖を以て人に代りて刑罰を受けしにあらず、人類が神の前に當然爲すべくして爲す能はざる悔改をなせしなりと解釋す。彼はエドワアヅが『罪には之に相當する刑罰か或は之に相當する悲哀と悔改なかるべからず』と云へる言より考を起し、基督が罪に對する神の怒に反應するや完全にして、人類の一切の罪に對する完全なる悔改に存すべき一切の要素を具備す。ただ罪の意識を有せざるのみ。即ち基督は人類の罪の爲に完全なる懺悔をなし、罪に對する神の審判に對して完全なるアーメンたり。これ神に對する側面なるが人に對しては罪を責むる意味を有す。カムベルの贖罪觀は法律的解釋より倫理的解釋に移らしむるに與て力あり、以後の贖罪論の見落すべからざる思想を供したり。

ホプキンス學派

1 Samuel Hopkins
2 Nathaniel Emmons

第四十三章　米國敎會の神學

北米神學界が產み出だしたる大思想家の一人なるヂョナサン・エドワアヅの事は前時代の史中に記したり。エドワアヅの流を汲みて之に多少の改造を加へたる『新英州神學(ニウ、イングランド、セオロヂイ)』は數十年間此の間の神學界を支配したり。此の學派は根本の立場はカルヴィン主義の神學にして神の主權と撰びを說くと雖も、人類の罪せらるゝは始祖の罪の責を負へるが爲なりと云ふ說を取らず。此の學派に屬する神學者のうちにも流派を分てり。サムエル・ホプキンス[1](一七一一―一八〇三)を祖とせるホプキンス學派の如き其の一なり。ホプキンスはエドワアヅの門に出づ。彼は一切の罪は私欲私心にあるが故に回心して神の意志に絕對的の服從をなすは一切の善の源なり、回心する前の道德的行爲は盡く罪なりと說けり。第十八世紀より十九世紀に移る間の傳道に於てはホプキンスの主義は高調せられ多くの悔改者を出す力ありき。ナタニエル・エムモンス[2](一七四五―一八四〇)及び神學者エドワアヅの子少ヂョナサン・エドワアヅ(一七四五―一八〇一)は

ホプキンス學派のうちに數へらるゝ神學者なり。エドワアヅの贖罪說は大體グロチウスの贖罪說を祖述せるものにして基督の死を以て神の公義を示す必要に歸したり。之より後グロチウス等の贖罪說は新英州神學の贖罪說を支配したり。

ドワイト及びテイロルの議論

同じく老エドワアヅの流を汲めるものなれどもホプキンス一派と傾向を異にせる一派はエール大學校長[3]テモシイ・ドワイト（一七五二―一八一七）によりて代表せられ、ホプキンス一派の勢力漸く衰ふる頃より勢力を現し來れり。ドワイトはホプキンスの如く回心前の救はれんとする努力は無用なりと云はず、斯の如く自ら助くる義務ありと說けり。エール大學の系統神學の敎授[4]ナタニエル・テイロル（一七八六―一八五八）も亦ホプキンスの主張に反對して自愛亦悔改の良き動機となるとを說けり。ホプキンス一流は個々の意志に重きを置き罪を以て專ら我意に歸したるが、テイロルはこの點に於てはカルヴィン主義に近き立場を守り、始祖の罪の結果として罪は必然ならずとも猶之を犯すに至ることを確實ならしむる根底の存するを說き、しかも個々の責任を認むるとと調和せんと試みたり。テイロルの神學說も亦少からざる論戰を惹き起せり。

3 Timothy Dwight
4 Nathaniel Taylor

ユニテリヤン

ドワイト、テイロルの人々エール大學に據りてカルヴィン主義を維持しつつありし時、ボストン、ケムブリッヂ地方に於ては一層根本的なる戰は戰はれつつありき。これ即ちユニテリヤン主義の運動なりき。ユニテリヤン主義の思想は第十八世紀の半よりボストン近傍に於て勢力を得つつありしが一八〇五年ユニテリヤンなる[5]ヘンリイ・ウエヤアがハアバアド大學の神學敎授に擧げられし事件は激しき論爭を惹起すの機會となり、更に一八一九年チャンニングがボルチモオアに於て試みたる說敎に於て大膽にカルヴィン主義の主張を難じたるより論戰益々酣になりぬ。

チャンニング

[6]ウイリヤム・エレリイ・チャンニング（一七八〇―一八四二）は敎養あるピウリタンの社會に生長し、ボストンに在るカルヴィン派敎會の牧師たりしが其の思想一變してユニテリヤン主義の人となれり。彼は品藻高く趣味深く純潔の精神おのづから人の尊敬を得るに足るものあり、鋭犀なる論理の力を有するにあらず、直に民衆の心に接觸する力に富まざりしも、人の長として推尊せらるべき氣格を具へたり。性の向ふ所より基督の純潔なる品性と眞理を顯彰する側面とを說くこと多し。耶蘇の宣べたる眞理の中心となれるは神の父たること

5 Henry Ware
6 William Ellery Channing

なり、永遠の生命なり。基督の人格に關してチャンニングは近代のユニテリヤンの如く之を宗教上の天才と見ず、神より造られたるものなれども此の世に生るる前より存在したる天使もしくは靈の如きものなりと說く、昔のアリウス說に近し。彼は又耶蘇の奇跡と復活を信じたり。然れどもチャンニングの基督教は徹底せず長く留り得べき立場にはあらざりき。[7]セオドル・パアカア（一八一〇―一八六〇）出でて早くも思想の變化を示せり。彼は基督教の超自然的起原を否定し新約聖書に載せられたる奇跡の記事を以て神話なりとせり。此の議論はユニテリヤン派の內にさへ多くの反對を以て迎へられたれども、勢はここに趨かざるを得ざりき。彼は歷史的の事實は世界の基礎とならず、思想こそ宗教の眞髓にして事實を超越するものなりと說く。故に此の一派の思想を超越主義（トランセンデンタリズム）と名く。文豪エモルソン（一八〇三―一八八二）は此の一派の首領なり。彼はもとユニテリヤン教會の牧師たりしも之を罷めて自由に其の思想を發表したり。エモルソン等はカント、スピノザ、シュライエルマッヘルの思想の感化を受くる所多く其の議論汎神論の氣味を帶ぶ。

7 Theodore Parker セオドル・パアカア

斯かる動搖を經る中神學思想の中心問題は最早カルヴィン主義の神學者と其の反對論者との間に戰はれたる種類のものにあらずして、基督の人格、贖罪の性質、自然主義と超自然主義等の諸點に移り來れり。且つコオルリッヂの思想は大西洋の此方にまで波動を及ぼし、獨逸の新時代の神學亦間接に影響を及ぼし來れり。新しき時代の要求に應ずべき神學は生れ出でざるべからず。此任を果たせしものを[8]ホオレエス・ブシネルとなす。ブシネルは米國の神學史上に於て英國に於けるコオルリッヂ獨逸に於けるシュライエルマッヘルと相似たる地位を占むる人なり。彼は一八〇二年コンネチカット州の田舍に生れ、二十一歲にしてエール大學に入り二十五歲にして卒業して大學を出で、其後再び大學に移りて法學を研究し又助教授たりしが、一八三一年に起りし信仰復興の際回心し、同年エール大學の神學科に入り二年の勉學の後ハアトフォルドの北教會の招聘を受けて說教者となり、後牧師の職に就き健康の衰へたる故を以て辭するに至るまで二十七年間在職したり。此の間に於て彼は深き內的經驗を經、其思想は數個の時期を爲して發展したり。彼が六十歲の時妻に與へたる書翰の中に云へり『最初に余は社交的に又我が本性に潛める無明の宗教的本能の力に因りて神に關する經驗の第一歩に導か

8 Horace Bushnell ブシネル

れたり。第二に余は正義の原則に聯關して基督と神とに就きて透明なる道德上の光明に進みたり。第三に基督と基督に於て表れたる神につきて內的個人的に發見の途に就けり。而して今や第四に善なる神の代贖的性格てふ絕對の事實を捉へ又之を自得するに至れり』と。コオルリッヂの書はブシヲルが精讀したる所にして、シュライエルマッヘルの著よりも多少の感化を受けたり。斯の如くして開拓し得たる新思想の路程はブシヲルの著述となりて表れたり。彼は『基督敎の保育』(クリスチキヤニナチユアテー)(一八四六年)に於て自然の順序なる開發による宗敎的敎育の必要を主張し、宗敎の傳播はリバイバル及び罪人の悔改のみに賴るべからざることを說き、『基督に於ける神』(ゴッド、イン、クライスト)(一八四九年に於て基督論を發表したり。彼は我等の思索を超越せる無限絕對の存在者が父となり子となり聖靈となりて現るることによりて我等とともに住み我等の要するものを與ふる神となる、三のペルソナは相對的にして無限にあらざれども各々無限者を代表す。この三を總べたる間に立ちて我等は初めて近づき難く現し難き神と交通することを得。即ち三ペルソナの敎理は神の內容を探らしむる爲に與へられず之を表現する爲に與へらるると。斯の如くブシネルはペルソナの差別を以て天啓の上に存するものとなし、其の區別の永久なることに關しては然かあり得べく或は然らざるやも知れずと考へたり。次に成りたる書は『自然及び超自然』(一八五九年)にして基督敎の起原を自然的に解釋せんとするに對して辨證せるものにして、基督の人格の超自然なるを論ずる一章の如き最も有名なり。ブシヲル一代の大著なる『代贖的犧牲』(ヴアイケリヤス、サクリフアイス)は一八六六年彼がハアトフォルドの敎會を辭して後著したるものにして贖罪に關する見解を發表したるものなり。彼の贖罪論は道德感化說の部類に屬するものにして、神人和合の目的を果たすために要する所は人の心にある不信不從順を證明するにありと爲す。然れども基督の死は單に倣ふべき模範にあらず、我等の要する所は模範にあらず、心に神を傳へ得る或る器なり。耶蘇は其死によりて偉大なる道德的勢力となれり。彼の死は罪人の義とせらるゝ基礎にあらずして其の力なり。神との正當なる連結彼の犧牲によりて開かれ、神の義の永久に流れ入るを許す、これ即ち義とせらるゝ狀態なり。此の點に於て彼の見解は律法的にあらずして倫理的なり。ブシネルは其の後更に新しき光に接したりとて其の贖罪論に多少の訂正を加へ一八七四年『赦しと律法』(フオギッチス、アンド、ロオ)の一書

に於て正直に其の意見を發表したり。從來の見解によれば神人和合の障害は人にのみ存すと考へたるが、犧牲をなす事は神に於ても必要なり。心の平和を回復して眞に人を赦す心を持つ爲にこれなかるべからずと說く、他より害を蒙りたる人は害を加へたる人の爲め進んで苦を忍び犧牲をなすことによりて初めて報復の衝動に克ち得るてふ人間普通の事實に類比してこの思想を說明したり。

ブシネルの如き人が近代的の神學を開拓せんと試みつゝある一方には依然としてカルヴィン主義の城壁を守りたるプリンストン派學者あり。チャアルズ・ホッヂ（一七九七―一八七八）の如きは其の代表者にして一八七二年三卷の組織神學を著せり。彼はアダムの罪が直接子孫に負はせらるゝことを主張し其の基礎を契約の思想に求めたり。

ホッヂ

說敎者として有名なりし人々を左に記す。

フィリップス・ブルックス（一八三五―一八九三）ボストンに生れ一八五五年ハアバアド大學を卒業して後ヴォルヂニヤ州にあるアレキサンドリヤの神學校に學ぶ。

フィリップス・ブルックス

一八六二年フィラデルフィヤの聖三一會堂の「レクトル」となり七年の後ボストンの三一會堂に轉じ一八九一年マサチュセット州の監督となれり。彼は身体魁偉、品性單純偉大にして同情廣く文學の趣味深し。其の思想は英國の廣敎會派と同系に屬し、モウリス、カムベルの書に感化せらるゝ所多し。說敎者として大なる感化を及ぼし、思想上にも貢獻する所少からず。ボストンに在りては大學生に感化を及ぼせり。

ヘンリイ・ビイチャア（一八一三―一八八七）コンネチカットのリッチフイルトに生る。清敎徒的の家庭に生長し會衆派敎會に屬せり。オハヨオのレエン神學校に學び、始め一寒村の牧師たり、一八四七年ブルクリンのプリマス敎會の創立に際し招かれて牧師となり終生此の敎會を牧せり。彼は愛國者にして奴隷廢止の運動の爲に心血を注ぎ、之が爲め英國に航して說く所ありき。ビイチャアは文壇の雄將にして「獨立雜誌」の記者たり、後今の「アウトルク」の前身「クリスチャン・ユニオン」を創刊せり。彼の說敎は神の愛を高調し、新英州神學に新生命を注入せり。

ムウデエ（一八三七―一八九九）ノオスフキルドに生れ貧しく靴屋を業とせり。一八五

1 Phillips Brooks
2 Henry Ward Beecher　ビイチャア
3 D. L. Moody　ムウデエ

五年回心して傳道に熱心し翌年シカゴに移り一八六〇年より全く傳道に從事し、一八六五年シカゴの基督教青年會々長となる。一八七三年サンキイを伴ふて英國に航して大なる活動をなし、其の後三度英國に行けり。ノオスフイルドに男女の學校を興し且つ毎年こゝに夏期學校を開きたり。

北米合衆國の憲法

政教分離

追加憲法

第四十四章　米國基督教の諸教派

北米合衆國の獨立戰爭は一七七五年に始まり、一七八三年に講和條約は結ばれ、一七八九年に憲法は制定せられたり。殖民時代に於ける各州の宗教制度は一樣ならず、或る教會を以て州の宗教と定めたる處少からざりき。新英州の諸州は概して會衆政治を採り、ヴォルヂニヤ州及び南方の諸州には基督教會を州定の教會とせるもの多かりき。然れども合衆の國制成るに及び自然の勢は政教分離の方針に向ひて進ましめたり。ゼフォルソンの如き熱心なる主張者にして彼の立案に係る法令は一七八五年に制定せられ、各州ともに宗教禮拜の事に關與するを禁じ、又宗教の爲に人民に課稅せざることに定めたり。こは憲法制定前の事なるが、憲法の末條には『合衆國の官職に就き或は公の委托を受くる資格として宗教上の檢證(テスト)を要求すべからず』とあり。憲法制定の年提議せられ三年の後採用せられたる追加憲法の第一條には『元老院は宗教の設定(Establishment)に係はり、或はその自由なる信奉を禁ずる法律

を設くべからず』と云ふ項あり。政教分離の方針は是の如くして定まりぬ。

然れども國會は、教派に關せずして其の牧師を撰定し祈禱を以て毎年の會議を開き、大統領は海陸軍附の牧師を任命し、年々の感謝祭日は大統領の布告によりて開かれ、國家危急の時に際して政府は斷食の日を定めたることもあり。大體に於てプロテスタントの基督教が北米合衆國の宗教たる國是は政教分離と相戻らずして行はる。ただ各教派同一の待遇を受くる爲に教派の數多きことは此の國に於て最も著しき現象なり。左に主なる教派の成立及び沿革の大體を記さんとす。

會衆派教會

新英州（ニウ・イングランド）地方に於て先づ勢力を据えし教會は會衆教會（コングレゲーショナル・チヨルチ）なること既に記せし如し。獨立戰爭の終る頃にはこの教會の勢力は稍此の地方に限られたり。第十九世紀の初に於て此の教會に信仰上の復興あり。之れを指導したる中心人物はエール大學の校長テモセイ・ドワイト及び同大學の神學教授たりしナタナエル・テイロルなり。ドワイトは神學者にして又説教者なり。講壇及び神學界の有力者多くこの人の教育を受けたり。ドワイト一派の神學思想

長老教會

は前章に記したり。此の復興の結果の一は內外傳道に對する熱心の起りしことにして此の教會の外國傳道の機關たる『アメリカン・ボオルド』[1]は一八一〇年に設立せられたり。然れどもユニテリヤン派の勢力漸く盛にして此の教會は最も其の影響を蒙り、ハアバアド大學はユニテリヤンの勢力に支配せらるるに至れり。是に於て三一神の教理を持せる人々は一八〇八年別にアンドオバ神學校を設立せり。一八三四年にコンネチカット州にハアトフオルド神學校設立せられ、又この教會の勢力漸く西部に展びし結果として同じ年オハヨオ州にオベリン大學設立せらる。十九世紀の半に至り會衆派教會統一の勢漸く成り一八五二年アルバニイに大會を開き、一八六五年にボストンに全國の會衆派教會總會は開かれたり。此の大會は信仰告白を公にし、ウエストミンスタア、及びサボア信條は大體に於て之を受くる價値あるを認むるとともに別に簡約なる告白を作れり。一八八三年の總會は之に比して頗る詳にして且明白なる新告白を發表したり。

長老教會の中堅は蘇格蘭及び愛蘭より移住せる人々より成れり。米國長老教會の總會フィラデルフィヤに開かれ、憲法を制定し信條としてウエスト

1 The American Board of Commissioners for Foreign Missions

ミンストル信條を採用したり。然るに神學思想の相違、會衆派教會に對する態度、傳道機關の監督等の實際問題より意見の衝突を生じ一八三八年二派に分裂して各大會を組織せり。之を舊派（オールド、スクール）新派（ニウ、スクール）と稱す。舊派の中心はプリンストン神學校（一八一二年設立）にしてカルヴィン主義を固守し、之に對して進歩的の主義を執る一派は一八三六年ニウヨオク市にユニオン神學校を設立したり。之より先き一八二〇年に設立せられたるアウボルン神學校は新派に同情を有したり。一八六二年南北戰爭の始まるや舊派の教會は分れて北長老教會と南長老教會となれり。然して北部の舊新兩派の調和漸く歩を進め、一八六九年再び合同を見るに至れり。南北兩派は未だ合同するに至らざれども親和の關係を維持せり。

分裂

合同

カムバアランド長老教會

別にカムバアランド長老教會ありき。之は一七九七年ケンタッキイ地方に信仰復興あり。說教者の需要多き爲めカムバアランドに於て牧師任職の資格を寬くするを欲したるため、又長老教會の極端なるカルヴィン主義に一致し得ざるため分離してカムバアランド長老教會を組織したり（此の教會は大阪伊勢の地方に宣教師を送れり）。この教派は二千八百餘の教會と十四萬五千餘人の信徒を有するに至りしが一九〇六年長老教會と合同したり。

レフォーム教會

長老教會と同一系統に屬するカルヴィン主義の教會即ちレフォーム教會は二派に分れ、和蘭より來りしものはダッチ・レフォーム教會と云ひ、獨逸より來りし者をゼルマン・レフォーム教會と云ふ。ダッチ・レフォーム教會は蘭人が初めてニウ・アムステルダム（今のニウヨオク）に立てし所、長き間牧師は和蘭より派遣せられ、禮拜に蘭語を用ゐたり。信仰の標準はハイデルベルグ略問答にして教育の機關はニウ・ヂャアシイ州のニウ・ブランスウィクに在るラトガルス大學（十八世紀末創立）なり。一八六七年『ダッチ』の一字を省きて『レフォームド・チョルチ・イン・アメリカ』と稱す。（日本にフルベッキ・ブラウン等を送りしはこの教會なり）。

ゼルマン・レフォーム教會は初めパルツにて迫害を受けしカルヴィン派教會の人々がペンシルバニヤ州に移住せるより起り、今もペンシルバニヤ地方を中心となす。神學校は同州ランカスタアにあり。（仙臺に傳道して東北學院を設立せるは此の教會なり）。

監督教會

監督教會は英國の國教會に屬する移住民によつて立てられたり。一七八五年英國國會の承認を得て獨立の教會となり、フィラデルフィヤ、ニウヨオク

兩處の監督任命せられたり。獨立戰爭起るや此の敎會は最も困難なる地位に立ちたれどもフィラデルフィヤの監督ウィリヤム・ホワイト（一七四八―一八三六）の指導宜しきを得て安全に危機を經過するを得たり。彼は四十年間此の敎會の首腦たりき、米國監督敎會の祈禱書及び信條ともに英國敎會のそれに少しく修正を加へたるものなり。

改革監督敎會

一八七三年にジョルヂ・カムミンス[1]と云へる人の率ゐたる一派分離して改革監督敎會（オールド、エピスコパル、チヨルチ）を建つ。これ此年ニウヨオクに福音同盟會の開かれたる時監督カムミンス其會合に於て聖晩餐を司りたるに對して攻擊起りしよりカムミンスは分離して別に敎會を建てしなり。此の派の主張は監督を一の階級（オーダー）と見ずして職と見る即ち上席の長老と見、洗禮晩餐の二禮典の了解に於ても普通の監督敎會よりも頑固ならず。この派は米國の各大都府に敎會を有す。

メソヂスト敎會

メソヂスト敎會は一七八四年に敎會の組織成り、メソヂスト・エピスコパル敎會と稱す。信條は英國の三十九箇信條を簡單にせるものを採用したり。トマス・コオク[2]最初の監督たり。獨立戰爭及び其の後に於て此の敎會を統率指導したるものはフランシス・アスベリイ[3]なり。彼は一七八四年に按手禮を受け一八一六年に至るまで半世紀の間メソヂスト敎會の精神となり、一萬六千回の說敎をなし、四千人以上の傳道者に按手禮を授けたり。一八四五年奴隸廢止の議論より南北に分裂せり。（南北メソヂスト敎會ともに日本に傳道す）

プロテスタント・メソヂスト敎會

プロテスタント・メソヂスト敎會はメソヂスト敎會の總會に常信徒の代員を加へんことを主張して容れられざりしより一八三〇年別に一派を立てたるものなり（今日はメソヂスト敎會も常信徒の代員を加ふるに至れり）。信條はメソヂスト敎會と異なる所なし。（日本に於ては美普敎會と稱す）

メソヂスト敎會に近き小敎派にして日本にも傳道せる故に記すべきもの下の如し。

同胞敎會

（イ）ゼ・ユナイテッド・ブリズレン・イン・クライスト（日本に於て同胞敎會と稱す。此敎會はオタアバイン[4]は敎育あり才能ある人にして獨逸のレフォームド敎會より宣敎使として一七五二年米國に遣されしが、彼とメンノナイトの敎師ヘンリイ・ベエム[5]はメソヂストと合し一時メソヂスト敎會と相合して傳道せしが、自由なる活動を許されざる爲に復た分るるに至れり。組織はメソヂスト敎會と相同じ。初期の信者は多く獨逸の移住民より出で禮拜にも獨逸語を用ゐたり。（ロ）「エ

1 George Cummins
2 Thomas Coke
3 Francis Asbury
4 Otherbein
5 Henry Boehm

福音教會

バンゼリカル・アソシエーシオン」日本に於て福音教會と稱す。ペンシルバニヤに移住せる獨逸人ヤコブ・アルブライトの立つる所なり。彼はルウテル教會に屬せしがメソヂストの傳道により回心し、一七九三年より米國に移住せる獨逸人の間に傳道したり。一八〇七年一の教會を結ぶ。政治は略ぼメソヂスト教會と同じくアルブライト最初の監督に擧げられたり。

浸禮教會

浸禮教會は初めプロヴィデンス及びニウポオトに設立せられ爾來各地に弘まれり。浸禮教會の政治は會衆派教會と相近く各教會自治の權を有す。彼等は牧師(時に長老と稱し又監督と稱す)執事傳道者以外の教職を認めず。最初に設けられたる教育機關はブラウン大學(一七六三年設立)にしてロオドアイランドに在り。[6]フランシス・ウエイランドは一八二七年より一八五五年まで此の大學の校長たり。此の教派の有力者にして且つ學者なり、明治初年日本に於て逼く讀まれたる倫理學の著者なり。今日は其の外ニウトン・ロチエスタ等五個の神學校を有す。ビルマの大傳道者アドニラム・ヂャドソンが洗禮に關する意見を變じて浸禮教會に加はりしに刺戟せられ外國傳道の事業は盛に經營せらる。

6 Francis Wayland

自由意志浸禮教會

正統の浸禮教會の外に浸禮主義を執れる教會數個あり。(一)自由意志浸禮教會(フリイ、ウイル、バプテスト)は其の一なり。一七七九年ニウ・ハンプシャアのベンヂャミン・ランダルなるものアルミニウスの神學説を持したる爲め非難を受け分離して別れ教會を立て一八二七年初めて總會を開けり。現在の會員數約十萬人なり。(ロ)クリスチャン教會(クリスチャン教會)或はヂサイブルと稱す。ペンシルバニヤに移住したる愛蘭人アレキサンダア・カムベルの立つる所、一時浸禮教會に合せしが一八二七年意見の相違より排斥せられて別に一派を爲す。西部及び西南部諸州に於て多く其の徒を得たり。此の教會は人の造りたる一切の信條を取らず、又各教會獨立して傳道及び其他の活動の爲に合同す。

ルウテル教會

ルウテル教會　米國のルウテル教會を組織したる人は一七四二年ハルレより來りたるヘンリイ・メルキョル・ミウレンベルグにして其の後教會の職に當る人は多くハルレより來れり。一八二〇年獨立したる米國ルウテル教會の大會を組織したり。

ユニバアサリスト

ユニバアサリストは元來ウエールスに興りたれども教會として存在を維持せるは米國に於けるのみなり。[7]ヂョン・モオレエ(一七四一—一八一五)は英人にしてメ

ソヂスト教會の說教者たりしことあり。一七七〇年米國に來り大西洋岸に於て自說を宣傳せり。彼は萬人の救はるるを說き三一神の教理を信じたり、モオレエの後此の教會に勢力ありし人はホセア・バルロウ[8]（一七七一―八五二）なり。彼は聖書の天啓なるを認むれども三一神の教理基督の神たるを信ぜざりき。（日本に於ては「同仁教會」と稱す）

クリスチャン・サイエンス　一八六七年ボストンの婦人メリイ・ベエカア・エディ[9]と云ふ人耶蘇の行ひたる醫療の法を發見したりと稱し、すべての醫藥を用ゐずとも、神を知り祈を以て神と交通し其の指導に賴るときは基督により て病を療され得べしと主張せり。一八七九年ボストンに於て集會を開き特別なる禮拜を行へり。

7 John Murray
8 Hosea Ballou
クリスチャン・サイエンス
9 Mary Baker Eddy

第四十五章　羅馬教會

耶蘇教社の再興

第十九世紀に入りて羅馬加特力教會は多事なりと云ふべし。其の重大なる事件は、耶蘇教社の復興、以太利統一より生せし變化、聖母無垢懷胎の教義の宣布、ヴアチカン會議、現代主義の勃興等なり。孰れも概略を記すに止めざるを得ず。

ナポレオン第一世はセント・ヘレナ島に流され、一八一五年有名なるウィンナ會議は開かれ。此の會議の決議により羅馬教會は失ひし領地を回復し、だアヴィニオン及びボオ河北の狹小なる土地を失ひしのみ、時の法皇はピウス第七世（一八二〇―三）なりき。

之より先き一八一四年八月七日法皇は威儀を整へて耶蘇教社の會堂に到り、多數の「カアヂナル」と監督との參列せる席に於て、耶蘇教社の復興せらるべきこと、及び從來有したる總ての憲法と特權とを回復する旨を發表せり。法皇は是れ加特力教國の一齊に求むる所なりと言へり。此の報傳はるや墺太

利、獨逸、佛蘭西其の他の諸國に於て物論沸騰し抗議は提出せられたれども、既に晩かりき。ゼズイットは曾て羅馬に於て受けたる三個の宮殿を附與せられ、主なる都府に於て學校を建つべき資金は供與せられ、教育の權復た次第に其の手に歸せり。曾てはドミニック派とは相容れざりしが、今や相和して却て之をゼズイットの勢力の下に置くに至れり。「聖心會」の如きは素より其の羽翼たり。再興後耶蘇教社の勢力は年と丶もに加はりぬ

ピウス第九世

一八二三年ピウス第七世の長き世は終り、レオ第十二世之に續きて立つ。一八二九年死してピウス第八世位に登りしが翌年死して一八三一年グレゴリウス第六世法皇となる。頑固にして言論思想の自由を阻害せり。一八四六年ピウス第九世（一八四六—一八七八）選擧せらる。進歩主義の人なりしかば其の即位は盛に歡迎せられたり。法皇は又實に改革の爲に盡す所ありたれども、當時

以太利統一

以太利全國に於ける民主主義の勢力、旺盛を極め、以太利統一の氣運亦次第に熟しつ丶ありき。愛國者の望はサアヂニヤ王國に懸り、此の王國に合することによりて此の目的を達せんとせり。之が爲には以太利國内に土地を擁せる埧太利の軛を脱せざるべからず、法皇の領地も一問題たらずんばあらず。

法皇領地の問題

サアヂニヤ王チヤアルス・アルバアトは一八四九年墺太利軍と戰ふて敗れ位を退きたれども其子ヴイクトル・エムマヌエル父の志を繼ぎ、カヴウル、マッジニイ、ガリバルヂイの諸英傑之を助けて建國の大業歩を進めつ丶ありき。カヴウルは一八五八年ナポレオン第三世と秘密の會見を遂げ、ナポレオンの兵力を借りて墺太利の勢力を擊破することを約したり。翌年五月佛兵ゼノアに上陸し、サルヂニヤ軍と合して、墺太利の兵とマゼンタ及びソルフェリノに戰ひて之を破りたり。

ナポレオン三世とカヴウルと伊太利の國事を協定するに當り、法皇の領土は之を維持するに決せしが、其中ロマグナ、ウムブリヤ、マルシの土地は之を收めたり。法皇の領地は三分の二を減じたるなり。法皇は從來の所領の一片も削らるべきに非ずと論じ、斯る行爲をなせる盜賊輩とは何等交渉を爲さゞるべしと揚言したり。一八六四年九月佛王と以太利王との協約は締結せられしが、その中に以太利王は法皇の殘れる領地を保存すべきこと、佛兵は漸次以太利より撤退すべきことを定めたり。以太利政府は都をフィレンチェに定めぬ。一八六六年に至り佛兵は盡く以太利を去れり。然るに翌年ガリバル

羅馬王國の首都となる

ヴアチカン宮

1 Gondolfo

ヂイは忽然としてカプレラ島を出で一隊の義勇兵を率ゐて羅馬の城外二十哩の處に達せり。ナポレオン第三世は此の報に接するや復た直に兵を遣し、法皇の兵と合して防戰し、ガリバルヂイの軍潰えて退く。ナポレオンは嚮の協約は既に破れたることを宣言し、兵を羅馬の一城に留めて法皇を護せしむ。然るに一八七〇年普佛戰爭起り、佛兵は羅馬を引揚げざるを得ざりき。既にして佛兵セダンに破れたりとの報到るや、ヴイクトル・エムマヌエルの兵は羅馬をさして進軍す。援けなき法皇の兵は容易に敗れ、一八七〇年九月二十日短時間の砲擊の後、聖彼得會堂の屋上白旗は揭げられぬ。羅馬市民は以太利軍を歡迎し、法皇領は今後以太利王國に合する事を決議したり。羅馬は王國の首都となりぬ。翌年定められたる法律により法皇には三百萬リラ（百二十萬圓に當る）の收入を保證し、ヴアチカン、ラテランの兩宮及びゴンドルフオ[1]の城塞を法皇の有とすることに定めたり。ペピン、シャアレマン帝以來千有餘年繼續したる法皇俗權の歷史は此の年を以て終りぬ。ピウス第九世は其の後復たヴアチカン宮外に出でず、一八七八年其の一生を畢れり。

ラテラン宮の事は既に記したり（第二卷第八章註）。爰にはヴアチカン宮の事を略記すべし。此の宮殿は羅馬のチベル河の右岸ヴアチカン丘上にあり。昔しネロ帝の遊園の在りし處なり。法皇シムマカス（四九八—五一四）初めて此處に法皇宮を建て後荒廢に歸せし時代もあり、ニコラス第三世（一二七七—一二八七）之を增築して大賓の客館に用ゐたり。アヴイニオンより羅馬に歸りし以來歷代の法皇ここに住ひぬ。今日の宮殿は其の後數代の法皇の建てしものより成る。その中最も著名なるはシスタイン會堂[2]にして十五世紀末シクスチウス第四世の建てる所、壁畫はミケル・アンゼロの作なり。ヴアチカン宮には古來の名畫文籍の蓄藏甚だ多し。

聖母無垢懷胎の敎義

2 Sistine Chapel
3 Codex Vaticanus

聖書の古寫本の一なる「ヴアチカン原本」[3]は其の一なり。

ヴアチカン會議の前に記すべきは聖母無垢懷胎[4]の敎義の宣布なり。此の信仰の由來する所は中世にありてアクイナスとスコオタスの神學の一爭點なりき（第二卷第二十二章參照）トレント會議は明なる解決を與へざりしも、ゼズイットは此の敎理を辯護したり。ピウスは亦熱心なる主張者なりしかば、ゼズイットの慫慂を納れ、之を確定する步趨を執ることに決せり。一八四九年各國の監督に廻章を送りて其の意見を尋ねしに、之に答へしもの六百人、其の中四人の外は法皇の示したる定義を正しとせり。是に於て法皇は一八五四年十二月八日聖母無垢懷胎祭の日聖彼得會堂に臨み、五十四人の「カアヂナル」と百四十

4 Immaculate Conception

人の敎職との參列せる席上に於て聖母無垢懷胎を敎會の敎義と定むる旨を宣言したり、即ちマリヤは『母胎に宿りたる瞬間より全能なる神の特別の恩寵と特權とにより、又人類の救主耶蘇基督の功德の豫見せられし故を以て一切原罪の汚れに染まざるやうに保全せられたり』と云へり。此は何等會議の議を經ずして定められしものなれば、この中隱然法皇無謬を認定せしこととなれり。其の後十四年ヴァチカン會議は此の敎義を確定したり。

5ヴァチカン會議

5 Vatican Council

ヴァチカン會議はピウス第九世在位の間、佛兵再び來りて羅馬を衞りし頃開かれたり。一八六八年六月召集令は發せられ、同年十二月八日開會、一八七〇年十月二十日普佛戰爭の爲に中止せられ、今も猶ほ休會中にして、閉會せしにあらず。戰爭の始まらざる間出席議員七百六十四人に上りたり。以太利人の議員最も多く二百七十六人ありき。佛蘭西人八十四人、獨逸人十九人にして南北米諸國より參加せしもの百人以上ありき。議事は全議員の出席する本會議と委員會とより成れり。委員會は二十四人を以て組織せられ「カアヂナル」これが委員長たり。會議はすべて秘密會にして筆記を禁じ、又議事錄の閲覽さへも禁せられたり。議場の用語は羅甸語を以てせり。

會議の開かれたる目的に遵ひ「加特力敎會信仰の定則」は三月を費して起草せられ、一八七〇年四月二十六日の會議に於て全會一致を以て通過したり。

6 Constitutio dogmatica de Fide Catholica

此は現代の唯理論、汎神論、唯物論、無神論に對して神と創造と信仰と道理との關係につきて正統的敎理を明にしたるものにして、「カアヂナル」マンニングは之を稱讃して『曾て世界の面にてなされたる、超自然的靈的秩序に關する最も廣く最も大膽なる肯定なり』と云へり。

法皇無謬の敎義

7 Karl Joseph v. Hefele

此の會議を歷史上重大ならしむべき法皇無謬の敎義を議することは次に來れり。此れは召集狀のうちには明記せられず。開會の翌年二月ゼスイットの機關誌上にて初めて漏らされたる所なり。此の事歐洲各國に知らるるや至る處論議の中心となりぬ。議員の多數は贊成の意を表したれども有力なる大監督のうち反對せるもの少からず。ロッテンブルグの大監督にしてニカヤ以來の大會議史の著者ヘフェーレ[7]の如き其の一人にて、昔敎會の大會議に於て異端の宣告を受けたるホノリウス第一世の如き法皇ある事實を引きて法皇無謬說に反對したり。之を維持する人々は又之に答へて曰く神の啓示の權威の前には歷史的事實も屈伏せざるべからず。法皇既に地上に於

ては基督の輔佐たりとせば、基督の無謬に參せざるべからざる理なり。懷疑異說紛々たる今日の時代に於て此の淵より我等を救ひ出し得べきものは此の敎義を受くるあるのみなりと。論戰決せずして夏を迎へ、人は倦み且つ病むもの生じて、早く結着を見んことを望めり。是に於て豫備の採決を爲せしに、可とする者四百五十一人否とするもの八十八人、幾分の修正を加へて承認せんとするもの六十二人ありき。反對者は少數ながら豫期せるよりも多かりき。七月十三日にマインツの監督ケッテレル[8]以下五人の監督は少數黨を代表して法皇に謁し、敎會の平和の爲め此の提議の撤回を懇願したり。然れども多數黨の首領英國のマンニング[9]、獨逸のラチスボンのセネストレエ[10]は法皇を動して拒絕の態度を固執せしめぬ。終に七月十八日正式の採決行はれぬ。四十六人の監督は法皇に一書を呈し、反對の意を明にし、しかも法皇を尊敬する爲に採決の議場に列せずして歸任すべきことを明にしたり。故に反對の投票をなせしものは二人に上れり。雷霆の轟ける最中に法皇は會議の決議を報告し之に批准を與へたり。其の結末に曰く。

使徒の職務の救拯的活用を要すること切なる現今の時代に於て其の權威を蔑視するもの少からざる故に、我等は神の唯一子が保證して此の至高の敎義に結びたる特權を嚴格に確言することは必要なりと思惟す。故に基督敎信仰の始めより承認せられたる傳說を忠實に遵奉し、神我等の救主の榮光と公敎の威力と基督敎人民の救の爲め、我等は、神聖なる會議の同意を經て、以下の敎義は神より啓示せられたるものなることを敎へ、且つ明示す、羅馬法皇は法皇として ex cathedra 語るとき、即ち全基督者の牧師及び敎師の職を行ひ、至高なる使徒の權威の敎により、全世界の持すべき信仰或は道德に係はる敎理を明にするとき、祝福せられたるペテロに於て約束せられたる神の佑助によりて、彼は無謬なり、信仰と道德に關する敎理の定義を明にする際其の敎會が此の無謬を有することは神聖なる救主の好み給ふ所なり。故に羅馬法皇の定義する所は、敎會の同意なくとも、其れ自から改變すべからざるものなり。

此の後會議は他の事を議して後十月三十四日散じたり。

法皇無謬の敎義が歐洲各國に宣布せらるるや反對の意見各國に起りたれども、此の敎義を誤謬なりとして戰ふものはこれなく、其の定義を不穩當とす

8 Ketteler
9 Manning
10 Senestray

るに過ぎざりしを以て、旗幟の鮮明を缺けり。且つ羅馬教會之を宣明したる上は、之に背くものは教會を離れざるべからず。次第に之に服從したり。

其の中一の形をなせしものは[1]古加特力教會と稱へられし獨逸の神學者の一團なり。彼等はヴァチカン會議の決議は充分の權威を有する途によらざりしこと、又會議の爲し得ることは昔より教會に行はれたる教理を證明するにありて、別に新しき教義を發明し宣言する權威なしと主張せり。就中有力なる人物は[2]イグナッツ・フォン・デエリンガア（一七九九―一八九〇）なり。彼は人格高く學識博き教授なり。斷然として新教義に反對し、基督者として、神學者として、教授として、市民として之を承くること能はずと明言せり。羅馬教會は彼を放逐せり。一八七一年九月ヴァチカン會議の決議に反對せる加特力教徒はミュンヘンに會合して第一の總會を開き、翌年ケルンに第二回の會議を開けり。一八七二年監督を擧げ、普魯亞政府は此の教會を承認し、翌年新監督の下に大會を開きて憲法を議定したり。斯くて組織せられし教會は古加特力教會と稱へられぬ。一八七六年の大會の開かれし頃教師六十人、教會百、信徒五萬人を算したり。

1 Old Catholics　古加特力教會
2 Ignat. von Döllinger

一八七八年ピウス第九世死してペルウギヤの大監督「カアヂナル」ペチイ法皇となり、レオ第十三世と號す。レオは一九〇三年死してピウス第十世法皇の位に上る。

羅馬教會最近の歴史に於て記すべきは所謂『現代主義』の運動なり。此の運動は頗る複雜せる現象にして、英獨、佛、伊の諸國に於て現るる所多少其の形象を異にせり。英國の[3]ジョルヂ・チレル佛國の[4]アベ・ロアジイ、ブロンデルは思想上に於ける代表者なり。以太利の現代主義は社會改良に力を用ふること多し。[6]ムリ及び小説『聖者』の著者として有名なる[7]フォガッァロ（一八四二―一九一一）は之を代表す。現代主義は現代思潮が加特力教會に入りて生じたる現象にして、多くの點に於てプロテスタント教會に於ける自由神學と相似たる所あり。彼等は聖書及び基督教の歴史の批評を是認す。福音書に加へたる批評の如き頗る極端なる所あり。彼等はたゞ外部より與へられたる啓示にあらずして實驗的方面を重んじ、教義は活ける宗教的實驗の事實を現す限に於て眞實なりと主張す、故に彼等は宗教上の專制主義に反對す。又宗教の社會的要素を重ずる所近代的傾向を見るべし。然れども彼等は依然として忠義にして熱

7 Antonio Fogazzaro　現代主義
3 George Tyrrell
4 Abbe Loisy
5 Blondel
6 Romolo Murri

心なる加特力教會の徒なるを以て自ら任じ、加特力基督教は其の眞髓に於て現代思想と一致せることを主張す。現代主義者がプロテスタントの立場に一致する能はざるはプロテスタントの個人的なるに對して彼等は教會の統一と連續を重じ、プロテスタントが聖書に無二の權威を置くを固定的なりとして發達の觀念に重きを置けり。

一九〇七年九月ピウス第十世の發したる回章は初めて此等の革新運動に「現代主義」の名を附して之を否認し、爾來此の派の人の著書は禁讀書目に加へられ撲滅の方針を執れり。

第四十六章　佛蘭西の宗教界

第十九世紀の佛蘭西の宗教界に於て種々なる事件を惹起したる問題は主として佛蘭西の加特力教會と羅馬教會との關係、及び國家對教會の關係に懸れり。

此の國の加特力教會を法皇の權威以外に立たしめんと欲する『ガリカニズム』[1]に對して、羅馬法皇の權威を重からしめ之に依らんと欲する主義を『アルトラモンタニズム』[2]（『山の彼』の義）と名く。第十七世紀の偉人ボッシュエは『ガリカニズム』の戰士たりしが、第十九世紀に入りては『アルトラモンタニズム』の勢力ひとり盛なりき。此は「ロオマンチニズム」の勃興或は英國に於るオクスフォルド運動等と同一傾向に支配せられたる現象なり。最も有名なる代表者はラムネエ[3]（一七八二―一八五四）なり。其の理想は法皇政治と民主主義、自由思想と相結ばしむるにあり。曰く教會は國家と結ぶことによりて失ふ所あるも得る所なし。寧ろ教會の元首たる法皇に合體して國家の專制に抵抗し人民の爲に盡すべ

1 Gallicanism　ガリカニズム
2 Ultramontanism　アルトラモンタニズム
3 La Mennais　ラムネエ

4 Lacordaire
5 Montalembert
6 L' Avenir

しと。ラメネエの同志にラコルデエル[4](一八〇二—一八六一)及び伯爵モンタロンベヤア[5](一八一〇—一八七〇)等あり。ともに一八三〇年十月雜誌『ラヴニイル』[6]を發刊して其の主義を唱ふ。然るに佛蘭西の教家にして之を非難するものありければ三人相携へて一八三二年羅馬に上り法皇に謁して陳ずる所あらんとせり。然るに法皇は之を厚遇せざりしのみならず回章のうちに之を非とせり。他の二人は法皇の意に順ひたれどもラムネエは頑として爭を續けたり。ラコルデエルは其の後ノオトルダムの大會堂の説教者として盛名あり、モンタロンベヤア伯は政治家文士として活動せり。彼等は近世學術の進歩を歡迎することを力めとともに、中世の學問藝術を嘆美し中世的の宗教情念を皷吹することを力めぬ。教養あり信仰ある階級彼等の麾下に集りぬ。然れども一般人民を動かす勢力とはならざりき。

ナポレオン第三世の時代

一八五二年第三世ナポレオン皇帝となり、一八七〇年の沒落に至りぬ。此の時代に於ては唯物主義人心を支配し、卑猥なる小説演劇流行せり。ルナン[7]の『耶蘇傳』の出でしは此時にあり。エルネスト・ルナン(一八二三—一八九二)は加特力教會の學校にて教育を受け、一八六〇年東洋に遊び歸後カレッヂ・ド・フランスにて

ルナン

7 Ernest Renan

希伯來語の教授たりしも基督の神性を否定せるが爲に一八六四年罷めらる。『耶蘇傳』は一八六三年の出版にかかれり。今まで世に出でし耶蘇傳が抽象的の論議に拘るもの多きに反して此は直に人を描き、宗教的天才を描き、背景なる自然を描くことを力めたり。加ふるに彩麗の文章を以てす。此の書出づるや學者のみならず社交の室にも喧傳せられたり。ルナンは耶蘇を描くに全く超自然的の分子を去り、自由に聖書の記事を取捨したり。耶蘇は始め純潔なるガリラヤの農夫にして其の心に感悟せる神の父たる教理と神の子として生くる道を説きしが、後にはメシヤ的希望の潮に乘せられて素志に違ふ道を執るに至れりと云へり。宗教上學術上の價値は乏しと雖も文學上の一古典として傳はるべし。『耶蘇傳』は基督教起原史の一部分にして、其外イスラエル民族史等の著あり。

信仰復興

一八七〇年普魯亞との戰敗れてナポレオン第三世は降を軍門に乞ひ、佛國人民は大なる屈辱を經驗したり。此の時一般に宗教の信仰復興して聖母の庇護に頼る心盛なりき。迷信的の信仰も流行せり。耶蘇の聖心臟に獻じたる壯麗なる會堂建築せられ、聖塲の順禮者多きを加へぬ。別けてもルウルド[8]

ルウルド

は貴賤の參詣人を以て充たされぬ。

ルウルドは佛蘭西の南部ピレニイス山間にあり。一八五八年二月ベネデットと云へる少女ルウルドの巖窟にて聖母の示現に接し爾後五ヶ月間に十八回同じ處にて同じ示現を受けたりと云ふ。それより此の地は有名なる靈場となり、ここに順禮し其の水に浴するものは病を癒やさるること俗間に信ぜられて、今日に至るまで參詣の人群集す。我が國の加特力の教會にもルウルドの洞を設くるに至れり。

8 Lourd

宗教と教育との分離

9 Paul Bert

教會内には『アルトラモンタニズム』益々勢力を得、加特力的信仰は益々色彩を濃厚にする一方には、政治家は國家と宗教、教育と宗教の關係につき解決を與へんとしつゝありて一八七〇年以來内閣の主義に伴ふて幾多の消長を見たり。加特力教會の設立したる大學、加特力教會の教職が高等教育會議の議員たる事、普通學校の教師となれる教職者等の問題は屢々上下兩院の議に上れり。されども茲に一々記する必要なからん。其の最も重大なる二の事件を記すに止むべし。

一は一八八二年に斷行せられたる宗教と教育との分離なり。此の年十月ガムベッタ内閣の文部大臣ポウル・ベエルは一個の教育法を制定したるが、其の法律は總ての兒童に小學教育を受くる義務を負はしめ、宗教は教會及び家庭に委ねて一切國民教育との關係を絶ち、國家の維持する學校に於て宗教家の教員たるを禁じ、學校の教室にありし宗教的の繪畫や象徴はすべて之を撤去せしめたり。是の如くして佛蘭西の教育は全く宗教と分離せるものとなりぬ。一八八四年加特力の大學に與へたる補助を廢し、同年民事裁判所の判決によりて離婚再婚を許す案は兩院を通過せり。

政教分離

1 Loubet
2 Louvier

其の後十年を經て一九〇四年大統領ルウベエ[1]以太利に行きて以太利皇室を訪問したり。法皇は己の領地を收めたる怨ある以太利皇室に敬意を表する訪問を喜ばず、大統領を歡迎せざりしのみならず、之に對して抗議を提出したり。之より法皇と佛國政治家の間の感情の衝突益々加はり、一九〇四年七月三十日羅馬との外交關係は斷絶したり。翌一九〇五年二月九日ルヴィエ[2]エの内閣は政教分離法案を代議院に提出し、同年十二月兩院を通過して法律となれり。政教分離は急進黨が多年政綱として標榜し來りし所なるが此の機會に乘じて實行するを得たり。

該法案は國家が宗教上の禮拜及び良心の自由を保證すれども、特に或る宗

教を承認し保護することなきことを宣言す。當時六十歳の牧師にして過去三十年間國家より俸給を受けたるものは今後終身其の額の四分の三を給せらるべく、四十五歳にして二十年間俸給を受けたる者は半額を給せらるべし、但し年金は六百圓以上に出づるを得ず。教會財産は各教區の人民より七人乃至二十五人を擧げて『宗教社團』[3]を組織し、法案制定後一年以内に教會の動産不動産を擧げて此の社團に移すべく、國家或は公共團體に屬したる財産は之を所有者に還附すべし、會堂は此の社團の處理に委ねらるれど、監督の住宅教師館は初一年間借料を免除せられ、其の後毎年遞加して七年の後には借家料全額を拂ふべきことを規定したり。

3 Association Cultuelles

プロテスタント教會

政教分離法は佛蘭西のプロテスタント教會にも多大の關係あり。長き年月の間迫害の下にあり、しプロテスタントが初めて信仰の自由を與へられしは一八三〇年の革命の時にあり、しかも大會を組織するを許されしは一八四八年にあり。一八五八年ナポレオン第三世は其の演説の中に全き禮拜の自由を總てのプロテスタントに與ふる旨を公言したり。翌年プロテスタント教會も國家の保護に浴し、其の牧師は國家より俸給を受くることとなれり。但しこの恩澤に浴するはルウテル派教會とレフオームド教會とに止れり。

4 Bois

政教分離とプロテスタント教會

プロテスタント教會は一八七二年巴理に大會を開きしに教授[4]ボアの提出したる信仰の標準につきて議論を生じ、正統派と自由派との間に分裂を生じたり。其れより大會は二の部分に分たれしも、一八七二年政府は巴理に總會を召集し、正統派と自由派と二個の會議を設け各會議より代表者を出してプロテスタント教會の總會を組織することとなり一八八一年に總會は開かれぬ。

一九〇五年の政教分離はプロテスタント教會のうち國家の保護を受けたる教會には少なからざる打擊なりしも獨立犧牲の精神を發揮し得る機會を與へ、力ある教會は中央資金地方資金を募集して微力なる教會を助けつつあり。

五六年前の統計によれば佛國プロテスタント教會のうちルウテル派に屬するもの五十三、改革派に屬するもの五百八十一、改革派のうち正統派四百三、

自由派百四、中央派七十四あり。其の外少數のメソヂスト教會、浸禮教會あり。第十九世紀の初にはプロテスタントの全數五十二萬餘人なりしが現在數七八十萬人を超ゆること多からず。

ヴイネエ

佛蘭西のプロテスタント教會の神學思想の源をなすものをアレキサンダア・ヴイネエ[5](一七九七―一八四七)となす。瑞西の人、バアゼル及びルウゼエンに於て神學を教授せり。人格高く趣味博くして靈眼透徹せる神學者なりき。彼は宗教と道德の契合點を見出すに力を用ゐたり。固定せる形式より神學を解放し、神學思想に活潑なる生命を附與したる力あり。ヴイネエの思想は今も佛蘭西の思想を鼓吹する力なり。

神學校

今日プロテスタント教會は三個の神學校を有す。一はゼネバにあり、一は巴里にあり、一は南部モントウバにあり。巴里の神學校はアウギユスト、サバチエー[6]、リヒテンベルガア[7]等の神學者の指導する所にして自由神學に傾く。モンタウバ神學校は正統派神學者ボア[8]其の指導者たり。

5 Alexander Vinet
6 Auguste Sabatier
7 Lichtenberger
8 Henri Bois

土耳其帝國

第四十七章　東歐の諸教會

第十九世紀に入りてより東歐の風雲屢々急にして、宗教上の問題は政治上の事件と糾紛せり。土耳其帝國内に於ける基督教徒の地位は問題の一にてありき。露西亞の加へたる壓迫はサルタンをして基督教徒の臣民に讓歩を爲すを已むを得ざらしめ、一八三九年基督教徒をムハメッド教徒と政治上平等の地位に置く令を發したれども一片の空文たるに止りき。エルサレムの聖墳の保管に關して土耳其人と基督教徒の間に爭議あり、一八五三年露國は土耳其帝國にある基督教徒を保護する權利を要求するに及び土耳其之に應せず、英佛兩國土耳其を援けてクリミヤ戰爭となりぬ。巴里條約は此の戰局を收むべく締結せられたるが、土耳其政府をして宗教の信仰の如何を問はず其の臣民を平等なる政治の權を與へしめぬ。この事は一八五六年二月土耳其政府の勅令によりて發布せられたれども十分に實行せられず、然れども土耳其人民はムハメッド教の信仰を棄つるも罰を受くることなし。

クリミヤ戰爭の前一八二八年より一八二九年まで露土戰爭あり。此の戰爭の結果としてセッサリイ、エピラス以南の希臘は自由を得、英佛露三强の保護を得て王國を建てたり。一八三三年希臘の敎會はコンスタンチノオプルの大主敎の管下を離るるを得たり。今日希臘の敎會は國王の任命したる敎務院により支配せらる。

希臘

ブルガリヤ敎會も一八七〇年コンスタンチノオプルの大主敎の管轄を離れて「エキザアク」[1]により治めらるることゝなれり。

ブルガリヤ

アルメニヤに於ては一八九五年に基督敎徒の大虐殺起れり、こはカルド人の所爲なれども土耳其の官憲之を奬勵したりと信ぜられたり。殺されしもの婦人小兒の外に十萬人に上れり。

アルメニヤ

露西亞

露西亞に於てはアレキサンダア第二世(一八五五―一八八一)進歩的の君主にして時代の精神と適合すべき改革に着手し、トルストイ伯文部大臣及び敎務院の長として敎職が實際世襲階級の如くなれる弊を打破し、如何なる階級の人も之に就き得べきものとせり。一八六〇年コオカサス地方の人民を敎化する爲に傳道會社を設立し、一八六六年帝國内のムハメッド敎徒を敎化する爲に更に別の會社を創めたり。彼は又國敎會に屬せざる徒にも寛大なる方針を執りしが此の帝の治世の晩年虛無黨の暴行は保守的反動の勢を激成し、宗敎政策も保守的となり、敎院長ポビイドノスウエッフ[1]は此の方針を代表して一切自由なる運動を壓迫せり。

1 Exarch

ポオランド及びバルチック海岸

露國領のうちポオランドには羅馬敎會に屬する信徒多く、バルチック海岸にはルウテル敎會に屬するもの亦多し。これ等を希臘敎會に改宗せしむる爲に種々の手段用ゐられたることあり。然れども近來政府の方針は良心の自由を保障する方に向へり。

1 Pofiedonostzeff

第四十八章　リッチル及び其の學派

我等はさきに獨逸の神學の歴史を叙して未だ、現代に至らざる處に止めたり。今再び獨逸に復るに當り。最も注意すべきはリッチル及び其の學派の神學なり　現代神學の特質を造り成せる要素につきては次章に記する所あるべし。今直にリッチルの生涯と其の思想を略述せんとす、

リッチル

アルブレヒト・リッチル[1]は一八二二年伯林に生る。ルウテル教會の監督の子なり。一八三九年ボン大學に入る。ニッチ教授として盛名あり。二年の後去てハルレ大學に行く。トオルック、ミュラア、ゲセニウス、エルドマンの諸家教授たり。リッチルはエルドマンのヘエゲル哲學の講義に參して之に感動し、おのづからチウビンゲン派の神學に贊成せり。然れども數年の後此の學派の立場を脱し、一八四九年『古加特力教會起原史』を著して獨立せる史觀を發揮せり。一八五二年ボン大學の員外教授に任せられ、一八五九年正教授に進む。一八六四年ゲッチンゲン大學の正教授となる。一八七〇年其の大著『義

1 Albrecht Ritschl

リッチルの受けし感化

待と和合』の第一卷を著し、四年の後第二卷を、五年の後第三卷を著す。一八八〇年より一八八六年に亘りて『敬虔主義の歴史』を著せり。一八八八年死す。

リッチルは鋭敏なる感受性を有したる人なり。其の思想の發達に貢獻したる大なる要素の一はカントの哲學なり。其の實驗を基礎とせる點に於て實在に對する不可識論的の態度に於て、道德的觀念を重ずる點に於て、カント哲學の基礎に立てり。カントの外にはロッエに負ふ所多し。彼が晩年ゲッチンゲン大學に教授たるやロッエ亦同處にあり。リッチルより長ずること五歳相交りて感化を受けたり。リッチルの價値判斷の說はロッエの哲學より出でたり。神學の範圍内に於てはシュライエルマッヘルより承けし所最も大なり。宗教と哲學との關係、基督教の中心を基督に置くこと、社會的要素を重ずること、此等の諸點に於てリッチルとシュライエルマッヘルと共通の點多し。

神學を形而上學より獨立せしめ、自然宗教より獨立せしめ、ひとり基督によりて與へられたる啓示を基礎として神學を建設するこれリッチルの試みたる所なり。神祕主義も亦リッチルの取らざる所なり。神祕主義は如何なる

宗教にある者も大同小異にして特に基督教的なる者にあらずと云へり。形而上學の判斷は存在の判斷なり、神學のそれは價値判斷なり。價値とは我が感情の或る要求を滿たし得る力なり。價値判斷に宗教的道德的の區別あり。高等なる程度の宗教に於ては兩者結合すれども元來獨立せる領分あり。(價値判斷の分類につきてはリッチル學派の人々の間に細密なる議論を惹き起したり)。

價値判斷

基督觀

リッチルの基督を論ずるや亦價値判斷の見地よりす。三一神、神人兩性、先在等の教理は形而上學に屬する觀念を用ゐたるものにして我等の經驗の達せざる領分に屬せり。基督は我等に取りて如何なるものなるや、如何なる價値あるや、基督觀の出立點をここに求めざるべからず。今までの神學のなせし如く、基督の人格に原きて其の事業を論ずるにあらずして基督我等の爲になせし事業より人格に溯らざるべからず。經驗を基礎とする近代科學の精神ここに現れたり。基督の事業は神の國を建つるにあり、彼は神との完全なる交通を保ち之を貫く爲には苦難と死とを辭せざりき。是の如くにして神人の新しき關係を立て之を體現し、又其の實現せらるる王國を建てたり。人は此の王國の一員となり、此の社會に存せる基督の感化により神の子たる關係に入ることによりて罪の赦を受くることを得べし、是に於て神の國てふ團體は我等の救に於て重大なる要素となる。基督は今活きて働きつゝあるか、これリッチルの立場としては斷定し得ざる領分に屬す。たゞ言ひ得る所は基督教會のうちに彼の精神の活けることなり。これ基督の事業なり。我等は形而上學に於て得たる神の觀念を取り來りて基督は神なりと云ふべきにあらず、基督に表れたる所につきてのみ神を思ふことを得。基督は我等に取りて神たる價値ありと、是れリッチル神學の大意なり。

リッチル神學はヘエゲルの哲學に飽きたる思想界に清新なる物を與へ科學的、社會的實驗的なる調子は現代人の要求に投ずる所ありしを以て忽ち獨逸の神學界を風靡する勢力となり、英米諸國の神學界にも其の流れを汲むもの多し。獨逸に於ける有力なる代表者左の如し。

カフタン[2](一八四八年生)伯林大學の教授なり。『基督教の眞理』(一八八九年)『教義學』(一八九八年)の著あり。

ヘルマン[3](一八四六年生)マルブルグ大學の教授なり。『基督者の神との交通』の一

2 Kaftan
3 Hermann

1 Seeberg
2 Kähler
3 Pfleiderer
4 Adolf Harnack

獨逸宗教界の色別

書最も有名なり。

ハルナック[4]（一八五一年生）伯林大學の教授にして近頃貴族に任せられたり。一八八六年より一八八八年に亘りて『教義史』を著し一九一〇年第四版を出だせり。其の他『ユウセビウス以前の古基督教文學歴史』（一八九三年）『ユウセビウス以前の古基督教文學年代表』（一八九七年）『基督教の眞髄』（一八九九年）等著述甚だ多し。基督教の教義は思想の希臘化より生じ其の制度の生命の羅馬化せるより起れりとは彼の史觀なり。

爰にリッチル學派に一章を與へしは其が現代に特異なる思潮たるが爲にして、實際獨逸の宗教界には種々なる色別あり、リッチル派は一部分の勢力たるに止まる事を知るを要す。ルウテル教會の信條を固守せる者少からず。又『現代的積極學派』と稱する者あり[1]ゼエベルヒ（一八五一生）之を代表す。[2]ケエレル（一八三五一九一二）の如く敬虔派の精神に據りて立てる學者あり。[3]プライデラア（一八三九一九〇八）の如くチウビンゲン學派の系統に屬せる者あり。一々記すること能はず。『宗教史學派』の事は次章に記する所あるべし。

1 Tischendorf
2 Codex Sinaiticus

史料の探檢

第四十九章　神學の進歩

第十九世紀以來現れたる神學者と神學思潮の主要なるものは各章に於て既に記す所ありたり。此章に於ては神學諸科の進歩を概説せんとす。現代の神學の部門多く問題複雜なり、ただ一斑を記すに止めざるを得ず。

一般知識界の進歩につれ種々なる勢力は基督教の思想を刺戟して新なる問題を與へ其の進歩を促せり。其の一は歴史的研究の進歩なり。

現代の歴史的研究は原史料との觸接を重ず。是に於て聖地は云ふも更なり、アッスリヤ、バビロニヤ、埃及等聖書に關係ある土地の發掘探檢は盛に行はれぬ。然して埋沒せる文書古碑の發見せられし者少からず。[1]チッシエンドルフ教授が一八五九年シナイ山の修道院に於て[2]シナイ原本と稱せらるる新約聖書の古寫本を發見せし如き、或は一八九七年にハムラビ法典の碑が發見せられし如き最も重大なる史料發見なり。

史料研究は古言語學の進歩とともに舊新約書本文批評及び高等批評を盛

舊約聖書の高等批評

3 DeWette
4 Friedrich Bleek
5 Heinrich Ewald
6 Edward Reuss
7 Graf
8 Wellhausen
9 Robertson Smith

ならしめぬ。創世記が二個以上の文書を綴り合せて成れる、ことは第十八世紀より學者の注意する所なりしが十九世紀の初三十年に於てデ・ウェッテ(一七八〇―一八四九)ブレエキ(一七九三―一八五九)エワルド(一八〇三―一八七五)等舊約學者の研究によりて舊約五書の分析略成りぬ。中にもエワルドは舊約聖書批評の泰斗なり。彼が一八四三年より一八五二年に亘りて著したる『イスラエル民族史』は一八三四年に至るまでの批評の結果を集成したるものなり。然るに一八三四年エドワルド・ロイス(一八〇四―一八九一)初めて、律法先にして預言者後に來りしにあらず律法の定りしは預言者時代の後に在りとの說を唱へ一八六六年グラッブ之を完成して舊約批評の新時期を開けり。ウエルハウゼン(一八四四―一九一八)は一八七五年『イスラエル史序論』を著してグラッブ說を證明し、學界に承認せらるるに至りぬ。英國に於ては高等批評の認識せられしは獨逸よりも晩かりしが、蘇格蘭アボルデインの自由教會神學校の教授ロボルトソン・スミス初めて高等批評の結果を採用したる爲め物議を釀し、其の職を退きたり。彼は『猶太教會に於ける舊約聖書』(一八八一年)『イスラエルの預言者及び猶太史に於ける其の地位』(一八八二年)の二書を著したり。然して高等批評の結果は英國の學界にも承

新約聖書の高等批評

5 Geikie
6 Edersheim
7 Farrar
8 Sanday

認せらるるに至れり。

ストラウスやバウルによりて新約聖書に加へられし批評は既に記せり。リッチル其後に出で主觀的なるチウビングン派の史的批評の誤を正す所ありたり(第一卷第一章參照)。所謂共觀書問題、第四福音書問題亦盛に討究せられぬ。バウロの書翰に關する批評は、バウルの時代に比して頗る穩健に向ひ、バウルの否定せし或る書翰さへも今日は多くの學者其の眞作なるを認むるに至りぬ。

基督傳

1 Keim
2 Beyschlag
3 Bernard Weiss
4 Pressensee

ストラウスとルナンの耶蘇傳の事は既に記せり。數年の後カイム[1]の大著『ナザレの耶蘇の歷史』(一八六二―七二)出づ。彼は史料としてヨハネ傳の價値を否定し、マコ傳を以てマタイ、ルカ二福音書の抄略なりとせり。史料に對する研究未だ進まざるを見るべし。此等否定的の分子多き基督傳に對して四福音書を以て大體信ずべしとなす穩健なる立場より基督傳を著すもの多く出でたり。獨逸に於てはネアンデル、バイシュラグ[2]、ワイス[3]、佛蘭に於てはプレサンセエ[4]、英國に於てはゲイキイ[5]、エデルシャイム[6]、ファーラア[7]、サンデエ[8]等の諸人これなり。之と同時に新約聖書總論及び新約聖書の時代に關する研究聖書の批評釋義相伴ふて進歩したり。

聖書改譯

聖書の批評釋義の學進歩するとともに從來の翻譯の缺點多きを感じ改譯の必要を認むるに至れり。英國に於ては一六一一年ヂェームス朝の欽定譯成りて以來改譯の擧無かりしが一八七〇年英米の聖書學者聯合して之に着手し一八八一年今日の所謂『リヴァイズドヴォルシオン改正譯』聖書を成せり。獨逸に於ては此種の計畫無しと雖も、[9]ワイッゼッカァ譯の新約、[10]カウチの主幹せる舊約は一卷となりて學者の間に重せらる。其外新約書の私譯は頗る多し。之とともに典外書(アポクリファ)及び擬聖書の研究近來著しく進歩し、獨逸に於ては一九〇〇年カウチの主幹によりて其譯を出版し、英國に於てはチャアルズ主幹一九一三年之を成せり。

聖書神學

舊新約書の宗教思想を歴史的發展の順序に隨ひて研究叙述するを以て目的とせる舊新約聖書神學は聖書に關する各方面の研究の結果の上に建てらるべきものなり。初めて聖書神學の占むべき地位を明にしたるものは[1]アルトルフ・ガブラアにして、第十八世紀より第十九世紀の初年には[2]ロオレンツ・バウル初めて舊新約聖書神學を著せり。舊約聖書神學の進歩に貢獻したる學者はエワルド、グラッブ以後[3]キウネン、[4]カイゼル、[5]シュルツ、[6]スメンド、[7]カウチ、[8]デヴィドソン等あり。新約聖書神學の領分にはバイス、ワイシュラグ、ホルツマン、

1 Altorf Gabler
2 Lorenz Baur
3 Kuenen
4 Kayser
5 Schultz
6 Smend
7 Davidson
8 Holtzman
9 Weizsacker
10 Kautsch

宗教史

[9]プライデラア・[10]ブリグス等の人々あり。

基督教史の研究の進歩は此の書の緒論に詳なればここに之を省けり。

ひとり基督教の起原及び歴史のみならず、他の宗教殊にイスラエル國民を包みたる隣國民　宗教歴史の研究亦益々盛なり。其の中にも、舊約の宗教がバビロンの宗教より感化を受けしことは十九世紀半の學者も之を認めたるが、極端に之を重く見る一派あり。[1]デリッチが獨逸帝の前にて試みたる『バベルビイベル講演』[2]はこの傾向を代表す。

宗教史學派

近頃獨逸の新進神學者の一群をなして少からざる勢力ある『[1]宗教史學派』は宗教史研究の光に照して基督教を研究する必要を主張す。此必要はリッチル學派の人々の認めざる所なり。即ちリッチル學派は神の啓示は專ら基督に由れりと說くに反して、宗教史學派は耶蘇の啓示の無二なることを認めず、隨つて基督教の絶對性を認めず。世界の宗教史上に置きて公平に基督教の地位を定むべしと論ず。故に耶蘇を絶對のものとせるパウロ、ヨハネ等の宗教を以て、耶蘇の宗教の本意を得たるものとなさざるは自然の事にして耶蘇とパウロなる問題は此の學派の人により提出せられたり。[2]トレルチ、[3]グン

1 Delitsch
2 Babel-Bibel Lecture
1 Religion-geschichte Schule
2 Troeltsch
3 Gunkel

4 Bousset
5 Weinel
6 Wernle
7 Wrede

進化論

ケル、[4]ブウセット、[5]ヴイネル、[6]ウエルンレ、[7]ウレエデ等の學者此の派に屬す。

現代の神學の特質を產み出したる他の勢力は自然科學なり。就中有力なる要素は進化論なり。ダルウィンが『種の起原』を著せしは一八五八年にして、未だ一個の臆說たるに止るにせよ、思想の各方面一として、影響を被らざるはなく、カントの哲學と共に新神學をして舊神學と異ならしむる要素なり。基督敎の學者も一時は進化論は聖書と兩立せざるものとなして之と戰ひ、進化論は又唯物論及び不可識論と抱合してヘッケル、スペンサア、ハクスレエの如き思想となれり。然れども基督敎思想の進步により啓示の性質明にせられて必要なき點まで固守するを要せざること明にせられ、進化論も五十年間に幾多の訂正を經てダルウィンの見及ばざりし要素亦注意せられぬ。それにしてもベエレの時代の意匠論は今日用ふべからざるものとなりぬ。

汎く言へば科學も自ら占むべき地位の制限を知ること漸く明になり獨斷的の態度を脫せり。然して精神科學の方面に於ける新しき事實は最近の科學をして神祕的性質を帶びしめぬ。

宗敎心理の研究

社會的方面

新哲學文藝思潮

8 Starbuck
9 James

心理的研究の進步に伴ひて宗敎的の事實及び經驗を心理學的に研究する宗敎心理學は米國の學者スタアバック[8]及びヂエームス[9]によりて開拓せられ、基督敎の事實にも少からざる光を投じたり。

第十九世紀に起りたる他の新しき思潮は社會主義にして基督敎及び基督敎思想にも多大の影響を及せり。耶蘇の社會的敎訓、社會問題の解決に與りて基督敎の果すべき職分、此等は基督敎思想の新しき方面なり。

若し夫れロッエ、マルチノオをはじめ最近の思想界を動しつゝあるオイケン及びベルグソンの哲學及び現代の文藝が神學思想に影響し、新しき刺戟を與へつゝあることは云ふまでもなし。

第五十章　基督教の社會事業

耶蘇基督の福音を全世界の全民族に宣傳せんとする運動は現代基督教の一大光榮なるが、同じ精神は亦基督教の惠澤を社會のあらゆる階級に及ぼし社會生活の各方面を改造せずんば已まざらしむ。プロテスタント改革の先輩は其の思想の向ふ所個人的にして社會的にあらざる點ありし故に、此の方面に多くの注意を拂ふに至らず、中世の加特力教會の力を盡せし所にも及ばざりしものなきにあらざりき。然るに第十八世紀の終に於て一面には平民の勢力勃興し來り、他の一面には福音的の信仰教會内に復興し來りしより、博愛慈善の精神沛然として多くの志士仁人を動かすに至れり。

奴隷廢止の運動

如上の運動の中範圍最も廣きものを奴隷廢止の運動となす。教會が奴隷賣買の風に反對の意志を表白したるは近世に始まりしにあらず。中世に於ても英王ウイリャム第一世は法律を以て之を禁じ、アンゼルムスが倫敦に召集したる教會の會議は人身賣買を禁じたり。然るに近世に至り新大陸の發

1 Granville Sharp
2 Wilberforce
3 Clarkson
4 Buxton

見が一動機となり、阿弗利加の黑奴の賣買は非常なる勢を以て增進せり。其の始は一四四四年葡萄牙のヘンリイ公がギニヤの海岸より奴隷を積み來りしにありて、此が米大陸に送られしは西班牙の監督が土人が白人に虐使せらるゝことを防ぐ爲に黑人をして之に代らしめたるに始まれり。英國に於て奴隷賣買はエリサベス女王の朝に始まり、一六八〇年より百年間に英人の手によりて英國の殖民地に輸送せられし黑人の數二百萬人以上にのぼり、其中の十分の一以上は大西洋の航海中に死せりと云ふ。此の殘忍なる風俗に對し教會として最初に反對の態度を明にせしは友會徒(フレンド)教會にして、一七六一年に奴隷賣買に關係する者は教會より除名することを決議し、一七八三年奴隷を救ひ又此害毒を除くを目的とせる一個の協會は友會徒によりて組織せられぬ。實に此の目的を以て結ばれたる最初の結社なり。此の時に於てウエスレエ、ホイットフイルドの人々講壇より反對の聲を擧ぐるあり、グランウィル[1]、シャアプ、ウイルバアフォース[2]、クラアクソン[3]、バックストン[4]等の志士熱心に力を盡せるあり。二十年に亘る苦戰の結果として一八〇七年英國の領土の港より奴隷賣買の用に供する船舶の出港を禁じ、又奴隷の上陸を禁ずる法令は可

決せられたり。之より先き一八〇二年丁抹は既に奴隷賣買を禁じ、一八〇八年北米合衆國も亦之に倣へり。是の如くして奴隷賣買は次第に廢止せられたれども、奴隷制度を全廢するまでには更に二十年余の年月を要し、一八三三年に至りて英國の殖民地全部に於て之を斷行したり。米國に於て最も早く、奴隷解放の爲に盡力してる戰士はウイリヤム・ロイド・ガリソン[5](一八〇五—一八七九)にしてヘンリイ・ワアド・ビイチャルも亦講壇に於て之が爲に戰ひたり。終に一八六一年より一八六五年に亘る內亂となり、一八六三年大統領リンコルンは全國の奴隷を解放する宣言書に署名したり。

囚徒の狀態を改善し獄吏の弊風を改むる運動はヂョン・ハワアド[6](一七二六—一七九〇)の首唱に依て起れり。彼は一七五五年リスボンの地震の跡を觀んとして南遊せしが途中佛國の捕獲船に捕虜となり具に苦楚を嘗む。この際捕虜の慘狀を經驗して監獄改良に志すに至りしが、一七七三年ベドフォルドの市長となるや素志を行ふの機會を得たり。彼は英國の各地を巡回して調査を遂げ、一七七四年國會に報告をなし、其の結果として監獄改良に關する法律制定せらる。ハワアドは其後四回歐洲各國を巡視し、晩年は傳染病豫防法の研究に

監獄改良

5 William Lloyd Garrison　6 John Howard

從事せり。旅中露西亞に於て或る婦人の病めるを看護し感染して死せり。

ハワアドの後同じ事業に盡瘁せる人のうちエリサベス・フライ[7](一七八四—一八四五)あり。彼女は先づ親しく女囚の間に入りて道を傳へ、其の小兒の敎育の方法を立て、且つ汎く囚徒の待遇につき種々の改善を唱へ其の實行を促せり。フライは英國のみならず佛蘭西、白耳義、和蘭諸國に旅行して至る處慈善の業を成せり。

日曜學校

日曜學校も亦第十八世紀末の英國に於て創立せられたり。グロウスタア市にロボルト・レイクス[8](一七三五—一八一一)と云ふ人あり。印刷を業とし新聞を發行せり。或る日曜日園丁を雇はんために市の一隅に行けり。其の附近に留針の製造場ありて小兒を使用せり。此の日は休日なれば弊衣の小兒街上に滿ちて不潔喧囂を極む。レイクスの心に端なく此等の小兒を集めて敎育を試みんとの一念生じ數人の敎師を雇ひ日曜學校を開始せり。これ一七八一年なり。其の事業好評を得て忽ち各地に傳播し、初めは貧兒に普通の敎育を授くるために設けしもの漸く各種の階級に及び專ら宗敎的敎育を授くる處となれり。歐洲各國之に倣ひ、傳道の擴張に伴ひて全世界に行はれ今日の盛大を見るに至れり。

8 Robert Raikes　7 Elizabeth Fry

禁酒運動

1 Francis Willard　9 Lyman Beecher　10 Theobald Matthew

禁酒運動は第十九世紀に入りて始まれり。從前飲酒は敎會に於て非とせられず、例へば一四六七年デョルヂ・ネヴィルと云ふ人英國ヨオクの大監督に擧げられし時の祝宴に費したる麥酒三百トン葡萄酒百トンに上りたりと云ふ。其の後飲酒の風益々盛にしてピウリタンも飲酒は之を否とせず、米國初代の殖民の交際には盛に酒杯を傾けたり。然るに第十九世紀の始に至り英米に於て酒の害を說くもの多く禁酒會の設立せらるゝもの多くなれり。一八二九年米國コンネチカット州のリッチフィルドの牧師ライマン・ビイチャ[9]ルが禁酒の趣意につきて六回の說敎を試みし如き大なる影響を及ぼせり。禁酒主義と云ふも初めは多く火酒の類の飲用を禁ずるの意にして麥酒、葡萄酒等は其の中に加へざりしが一八三〇年頃より一切酒類の飲用を禁ずる主義を說く者多くなれり。愛蘭に於ける羅馬敎の敎師セオバルド・マシウ[10]は禁酒主義の使徒と稱へらる。彼は各地を巡りて禁酒の主義を皷吹し、米國に渡り、至る處多數の同主義者を起せり。一八七三年米國に『婦人基督敎禁酒同盟』起りフランシス・ウイラアド[1]は一八七八年以來此の同盟の會長として活動せり。禁酒主義は次第に勢力を得、米國に於てはメイン、北ダコタ、カンサス、オクラハマ、ミスシッピイ、アラバマ、デョルヂヤ、北カロライナの諸州は酒類の販賣を禁じたり。英國に於ては日曜日に酒店を閉すの法令次第に實行せられ、蘇格蘭は一八五三年以來、愛蘭は五大都府の外一八七八年以來、ウェールスは一八八一年以來之を法律となせり。英蘭に於ては一八三九年まで日曜日朝夕の禮拜時間の外酒店を開くを許せしが、其の年倫敦に於て土曜日の夜半より日曜日の午後一時まで之を閉鎖するとなり、他の都府之に倣ひしが、一八五四年に閉店時刻に午後二時三十分乃至六時及び夜十時より翌朝四時までを加へたり。

基督敎社會主義

『基督敎社會主義』(クリスチャン、ソシヤリズム)は汎く云へば基督敎の主義に原きて社會問題を解釋せんとする主張を指す者と見るを得べしと雖も最初に此の名を冠らされたるは第十九世紀の半頃英國の神學者フレデリッキ・デニソン・モウリスを中心とし[2]て集りたる一團を基督敎社會主義者と稱す。其の起原は一八四八年にあり。此の年英國は穀物の不作及び重稅のために人心安からず處々騷擾あり。其の頃モウリス、キングスレエ[3]、ラドロウ[4]の三人相會して社會問題を研究し、勞働者の要求に同情を表するとともに彼等をして無謀の擧に出でざらしめんた

2 Maurice
3 Kingsley
4 Ludlow

5 Alton Locke

めに或は開書を公にし、或は週刊雜誌を公にし、貧民學校を開き、キングスレエは『アルトン・ロック』[5]等の小說を著して其の主義を皷吹したり。『基督敎社會主義』とは翌年彼等の採用せし名にして機關雜誌にも同じ名を附せり。彼等の主張する所は社會主義は基督敎の主義より發したるものにして今日の社會主義を基督敎化せざるべからずと說く。マンチェスタア派の經濟論は彼等の極力反對する所にして、人間社會の據りて立つべき基礎は利己心にあらずして犧牲の精神にあり、競爭によらず協力によりて社會問題を解決すべき時來れりと主張す。モウリス等の運動は一八五二年頃まで繼續したり。其の後同樣の目的を有せる數多の團體は英國に起れり。一八七七年に設立せられたる『聖馬太組合』は高敎會派の人々の組織する所にして其の社會主義は急進に傾けり。一八八〇年に設けられたる『オクスフォルド社會同盟』は之よりも溫和なり。非國敎會派の人々の社會主義同盟は一九〇五年に設立せられたり。

基督敎の主義を以て社會問題を解決せんとする試みは英國のみならず獨逸の加特力敎會に於けるマインツの監督ウイルヘルム・フォン・ケテラア、プロテスタント敎會の牧師トット、ステッカアの運動はそれ〳〵効果を擧げ數多の支部を設け多數の勞働者を團結して之が爲に圖る所あり。佛蘭西、白耳義、合衆國にも同樣の運動あり。

大學殖民事業　大學に關係せる人々が下層人民の間に住みて彼等の爲に精神的物質的の利益を圖り改良の爲に盡す事業を云ふ。モウリス、キングスレエ諸人の唱道與りて力あり。其の他トマス・ヒル・グリイン及びラスキンも亦敎育ある人士の注意を喚起するを勉めたり。然も此の事業の開拓者として擧ぐべき名はアルノルド・トインビイ[1]なり。彼は一八五二年に生れ、二年間ほど兵學校に在り後オクスフォルドに學び敎師となりて專ら經濟學を修む。勞働者の階級に興味を有し、東倫敦のホワイト・チャペルに住ひ貧民の爲に力を盡したり。その辛苦經營は蒲柳の體質を銷磨し一八八三年に死せり。彼の遺志を成さんが爲に記念として一八八五年トインビイ館はホワイト、チャペルに設立せられたり。大學の學生及び卒業生之に住ふべく、且つ講堂、圖書室、勞働者の爲の學校の設けあり。同じ年オクスフォルド館は開設せらる。其の目的はトインビイ館よりも一層宗敎的なり。一八八七年には倫敦のネ

1 Arnold Toynbee

ルソン・スクエヤアに婦人大學殖民館開かれたり。之より後之に倣ふもの多く、又宗教の目的を主とせる傳道館も處々に開かれたり。蘇格蘭に及び、歐洲諸國にも多少同樣の事業起れり。米國の大都市に於ては最も盛なりとす。

救世軍　[2]ウイリヤム・ブウスの創立する所なり。ブウスは一八二九年ノッチンガムに生れ、十五歳の時悔改めて基督を信ぜしより傳道に熱心し、殊に貧民の傳道に盡瘁したり。一八五〇年メソヂスト教會の傳道者となる。後メソヂスト教會の關係を離れ東倫敦の貧民窟に入り傳道す。一八六五年『基督教傳道會』を設立す。一八七七年之を『救世軍』と改稱し軍隊的の組織となす。爾來著々發展して全世界に普及するに至れり。一八九〇年ブウスは『最暗黑の英國及び其の救濟策』と題する一書を著し、英國の下層社會の悲慘なる狀態を叙して世に訴へて之に對する救濟の方法を計畫し、創業費として十萬磅、維持費として年々三萬磅を汎く英國の社會に要求せり。此の創業費は與へられてブウスは今日救世軍の經營せる如き諸種の社會事業に着手し、組織經營の才能は益々發揮せられたり。彼は親ら印度、合衆國、濠洲に出征し、一九〇七年明治四十年)我が國に來朝せり。一九一二年死す。其の子ブラムウエル・ブ

2 William Booth

ウス遺業を繼ぎて世界の救世軍を統率す。

基督教青年會　基督教青年會の創立者ジョルジ・ウイリヤムスは一八二一年英國ソマアセット州に生れ、少時より商業に從事す。十六歳の時宗教的覺醒を經驗して篤き信仰の人となれり。十九歳の時倫敦に入り、ヒチコック吳服店の店員となり、忠實にして信用を得たり。一八四四年六月同志の友十二人と商館内の一室に會して『吳服商及び其の他の商業に從事せる青年の心靈狀態を改善するための會』を興す。彼等は祈禱及び聖書研究、個人的傳道を勉めたり。其の後更に名稱を定めて『基督教青年會』(Y. M. C. A.)と稱す數年のうちに同樣の集會は英國の各地に興れり、一八五一年には米國最初の基督教青年會は設立せられ、續て他の各國に擴張せられ、一八五五年巴里に大會を開きて萬國同盟を結ぶ。一九〇五年に萬國基督教青年會同盟の五十年祝會の開かれし年ウイリヤムスはヴイクトリヤ女皇より勳爵士(ナイト)の爵を授けられ同じ年死せり。基督教青年會は始めは實業に從事せる青年の爲に設立せられたるものにして學生青年を目的とせる者にあらざりしが、一八七七年學生青年會は創立せらる。當時二十六の團體より成りしもの今は北米に於て七百

3 George Williams
4 John R. Mott

に近き青年會あり。[4]ヂョン・アール・モット其の指導者として之を世界各國に擴張し、一八九五年瑞典のバアドステナに於て初めて萬國基督教學生青年會大會開かる。一八六六年には基督教女子青年會ニウヨオク及びボストンに設立せられ世界的の運動となれり。

其の外赤十字社、白十字會(純潔の風を興すを目的とす)孤兒院、癩病院、平和運動など直接間接に基督教の精神に原き開創せられて興りたる社會的事業枚擧すべからず。

第五十一章　世界的傳道

基督教の歴史は初より傳道の歴史なり。然れども其の傳道が全世界全人類に擴張せられしことは現代基督教の獨り有する光榮なり。プロテスタント教會が世界的傳道の活動を始めしも亦主として最近時代に在り。ルウテル、カルヴインの如き宗教改革の先輩は未だ外國傳道に着眼するに及ばざりき。獨りエラスムスは此の使命に對して人の注意を促し最も高尚尊貴なる事業なりと説きたれども未だ反響を聞かざりき。フランシスコ・ザウィエの東洋に於ける偉績すらプロテスタントの先覺者を刺戟したりと見えず。第十七世紀に於ては北米に移住せる英人の間に北米土人の傳道に力を盡せし人あり。ヂョン・エリオット(一六〇四—一六九〇)は土人の語を學びて聖書を翻譯し學校を立てゝ『インヂアン人の使徒』と呼ばれたり。エリオット等の事業を助くる爲に英國の長期國會は令を發して一六四九年新英州(ニウイングランド)に福音を傳ふる目的を以て一の會を組織したり。これ蓋しプロテスタント教會最初の傳道會社な

エラスムスの識見

1 John Eliot

プロテスタント教會最初の傳道會社

敬虔派及びモラヴィヤ派と外國傳道

2 Ziegenbalg
3 William Carey

ウイリヤム・ケリイ

り。クロムウエルは規模大なる傳道及び宣教使養成の方針を立てたれども之を實行するに及ばずして死せり。プロテスタント教會の生命が發して傳道の活動となりし源は之を獨逸に於ける敬虔派の間に求めざるを得ず。フランケが丁抹王フレデリッキ第四世の委托によりツイーゲンバルグを印度に遣したること、又敬虔派の系統を引きたるモラヴイヤ派が力を外國傳道に盡せしことは既に記したり（第三十九章參照）。現今に於てもモラヴイヤ派は信徒六十人につき一人の宣教使を維持しつつありと云ふ。

近世の英國に於て外國傳道の氣運を作り出したる人傑はウイリヤム・ケリイ（一七六一―一八三四）なり。彼は原と貧しき靴工なり。幼時より動植物を觀察するを好み、又古今の言語を學べり。靴店の壁上に世界の地圖を掲げ附するに政治宗教の統計表を以てせり。後浸禮教會の牧師となり、教會の會議に出席して萬國に傳道する責任を説きしも顧られざりき。六年の後ノッチンガムに開かれたる牧師の集會に出席して宿論を唱へ、神の爲に大事を計畫せよ、神より大なる事を期待せよと云ふ趣意を説教せり。此の説教は大なる感動を與へ、席に在りし十二人の牧師十三磅餘の資を投じてバプチスト傳道會社を創立

英國の傳道會社

4 London Missionary Society
5 Church Missionary Society for Africa and the East
6 Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts

することと決し、翌年ケリイ親ら印度に渡れり。東印度會社はケリイを歡ばず、彼は去て和蘭國旗の下に在るセラムポオルに留りて宣教す。宣教使は自ら維持すべしとはケレイの主義なりしかば彼は藍の製造者となり、ベンガル語梵語を學びぬ。初の七年間一人の信者も興らざりしが、一印度人の全家洗禮を受けしを初めとして次の十年には三百の回心者起り、百二十六の小學を立てぬ。ケリイはベンガルに留ること四十一年、一度も歸國せず、妻は發狂して苦難を經たり。終に七十三歲にして印度に死せり。

ケリイの精神に刺戟せられて英國教會に於ける外國傳道の熱心は燃やされ、一七九五年に[4]倫敦傳道會社は組織せられぬ。こは國教會、メソヂスト、長老教會、獨立教會各派の人の立つる所なりき。この會社は傳道地を南洋諸島に撰びたり。その後國教會に屬する人はウイルバアフォース等の首唱により一七九九年傳道の機關を設け一八一二年『亞非利加及び東洋傳道會社』（CMS）[5]と稱せり。之が爲め『倫敦傳道會社』はいつしか獨立教會派の人の經營する所となれり。又一七〇一年以來存在したる『海外福音傳道會社』（SPG）[6]も一八二一年以後外國傳道の機關として活動を始め、高教會派の人々によりて經營

せらる。メソヂスト教會に於ても從前よりありしウエスレエ傳道會社外國傳道の事業に當ることとなれり。蘇格蘭に於てはチャルメルスの熱心なる主張によりて反對に克ち一八二九年有名なる宣教使[7]アレキサンダア・ダッフを印度に派遣せり。一八四三年自由教會の獨立後ダッフは此の教會に屬し、自由教會亦活潑に外國傳道に從事せり。合衆國の教會にも同じ精神は喚起せられ、一八〇八年ウィリヤム大學に學べる數人の青年異教徒に傳道する目的を以て『兄弟』(ブレズレン)と稱する團體を結べり。サミユエル・ミルス[1]、ゼエムス・リチャード[2]、ルウサア・ライス[3]、ゴルドン・ホオル[4]は其の人にて彼等は夜は校庭に近き枯草堆の下に會して外國傳道の爲に獻身せんことを祈りたり。此の四人アンドオバア神學校に入るや、同じ精神を抱きて神學校に來りしアドナイラム・ヂャドソン[5]、サムエル・ノットあり[6]。一八一〇年ブラドフォルドにマサチュセット會衆教會の總會あるやヂャドソンの起草せる一書を呈して外國傳道に從事せんと欲する志を陳ぶ。是に於て『アメリカン・ボオールド』[7]なる傳道會社は組織せられ、一八一二年最初の宣教使の一行カルカタに向ひて出發したり。然るに其の一人なるヂャドソン及びライスは洗禮に關して浸禮教會派の主張

5 Adoniram Judson
6 Samuel Nott
7 American Board of Commissioners for Foreign Missions

1 Samuel Mills
2 James Richards
3 Luther Rice
4 Gordon Hall

合衆國の傳道會社

7 Alexander Duff

の正しきを認むるものとなり、アメリカン・ボオルドと關係を斷ち、カルカタに於て浸禮を受けたり。此の一事はアメリカン・ボオルドには一打擊たりしも米國に於ける浸禮教會の傳道的精神を喚發せしめ、一八一四年亞米利加浸禮教會傳道同盟を起さしめたり。ヂャドソンは一八一三年より緬甸(ビルマ)に移りて、兼て又緬甸語の聖書飜譯、字書編纂に盡瘁し、二十四歳にして來りしより病妻を携へて歸國の途に上り途中妻を葬りし外五十七歳まで本國に歸らざりき。

緬甸に於ける傳道會社

英米以外の國に於ける外國傳道の機關と其の實力とは二國に及ばずと雖もそれ〳〵力を盡しつつあり。外國傳道の歴史に於て獨逸のモラヴィヤ派教會が重要なる地位を占むることは既に觀たる所なり。獨逸に於て一の教會が傳道事業を經營せるは此の教會のあるのみにて、其他は獨逸の國教會に屬せる人々が組織せる傳道會社なり。第十九世紀の半以前より存する會社の數八にしてベルリン、ライプチッヒ等の地名を取りて名に冠せり。佛蘭西には一八二二年に設立せられたるプロテスタント教會の外國傳道會社一あり。

其の外婦人によりて經營せらるる傳道會社少からず。又或は猶太人の爲め、或は水夫の爲め、或は醫療を兼ぬるものなど特殊なる目的を有する會社亦

多し。其の統計は下に記すべし。

近世に於ける世界的傳道運動の起原、傳道會社の興隆は略ぼ上に記したり。今傳道の主なる原野につきて其の發展の狀態を略述する所あらんとす。

南阿弗利加

先づ阿弗利加大陸の傳道より始むべし。阿弗利加洲のうち傳道の普及したる所は南阿弗利加となす。此の地方に宣教したるプロテスタントの最初の宣教使は一七三六年に來りたるモラヴィヤ派に屬せるゲオルグ・シミッド[1]なり。其の後半世紀間此の地方の傳道は荒頽に委せしが一七九二年モラヴィヤ派再び此處に宣教使を遣し、一八〇一年倫敦傳道會社之に次ぎて傳道に着手し、其他の傳道會社の宣教使相踵ぎて來れり。南阿開拓の歴史に於て最も偉大なる名を留むる者は倫敦傳道會社の宣教使ロボルト・モフアット[2](一七九五―一八三)及びデヴィド・リヴィングストン[3](一八一三―一八七三)の二人なり。モフアットは蘇格蘭の園丁なり、父の田家にありてエスキモオ人間に於けるモラヴィヤ派傳道の物語を讀み宣教使たらんとする志を立てしが一八一六年南阿地方に派遣せられぬ。彼はオレンジ河を渡りて妻とゝもにベクアナス[4]地方に入り十

1 George Schmidt
2 Robert Moffat
3 David Livingstone
4 Bechuanas

リヴィングストン

一年の間此の蠻土に辛苦して効果の見るべきものなかりき。然るに其の後忽然として人心に變化を生じ來り聽くもの小き會堂に溢るゝばかりになりぬ。モフアット夫婦の生涯の勤勞の結果は全く此の土地の光景を一變せしむる事業の基礎となりぬ。彼の精神に感じて起ちし一人はリヴィングストンなり。彼は蘇格蘭の綿製造場の職工たりしが醫學校に入り宣教使たらんことを志せり。初め支那に傳道せんとせしが當時其の國に内亂ありて志を果し得ず、偶々モフアットの文章を讀んで之に感じ倫敦傳道會社に志願して一八四〇年阿弗利加に派遣せられたり。彼はモフアットの女と結婚し、北方に向つて探檢の旅行を起し、一八四九年ニガシ湖に達してより以來更にザムベジ河邊を探檢し、ニヤサ湖を發見したり。彼の志は暗黑大陸の中心に宗教と文化の入るべき道を開き、人民の蒙昧と奴隷賣買の慘害を除かんとするにありき。之が爲三十餘年の間あらゆる險難を冒して一八七三年五月一日バングエロ湖畔に死するに至りぬ。リヴィングストンの精神に動かされてオクスフオルド、ダラム、ダブリンの諸大學を代表したる大學傳道は一八六一年に建てられぬ。リヴィングストンと略ぼ時を同じくして阿弗利加の宣教開

クラップ　5 Johann Ludwig Krapf

發に盡瘁したる偉人はヨハン・クラップ[3](一八一〇—一八八一)なり。獨逸に生れ、英國國教會の傳道會社の宣教師として阿弗利加に派遣せらる。一八三七年アビシニヤに於て事業を始めしが數年の後東海岸のモムバサに移り妻子此地に斃れしも屈せず、阿弗利加洲の教化につきて大計畫を立て、大陸を横斷して傳道地の連絡を通ずることを講じ、幾度か險難を冒して未知の地に入れり。其の事業はリヴィングストンと同じく開拓者の事業にして、土語辭典の編纂、聖書翻譯にも功績あり。

北部阿弗利加

南阿地方には宣教使の數多く今や信徒の數二十餘萬人に上れり。眼を轉じて大陸の北部を見るに、此の地方にはムハメッド教盛にして其の勢力增進しつゝあり。カイロにはムハメッド教會の大學ありて亞細亞の各地より來り學ぶもの一萬人以上に上り、同教の教育傳道の中心なり。埃及には昔し一性論を唱へて分離したるコプト教會の殘徒今猶ほ存すれども勢力微々たり。米國の長老教會は一八五四年以來埃及のムハメッド教徒間に傳道しつゝあれども未だ見るべき勢力となるに至らず。大陸の西北岸は昔テルトリヤヌスやアウグスチヌスを出したる土地なるがこゝも亦ムハメッド教徒の根據地となり、基督教は傳道開始以來四十年に滿たず、宣教使の數も寡くして結果の見るべきものなし。西海岸も亦然り。

南洋諸島　6 John Coleridge Patteson　7 Selwyn

基督教が蒙昧の土地を開き蠻野の風を易へたる歷史は阿弗利加洲以外には太平洋上の諸島に見るを得べし。五十年前までは人肉を喰ひし蠻人が宣教使の感化教育により一變して平和勤勉の民となりしは驚くべき歷史なり。然れども之に至るまで大なる犧牲は拂はれたり。ヂョン・コオルリッヂ・パテソン[6](一八二七—一八七一)の如き其の一人なり。彼の母は詩人コオルリッヂの姪なり。オクスフォルドのメルトン學校の「フェロオ」たり。一八五五年監督セルウイン[7]とともにメラネシヤ群島に行き、一八六一年該群島の監督に任ぜらる。モタ島を根據地となし傳道船に乘じて島々に說教し又病を療し、土人の信愛を得其の友となれり。然るに或る商人傳道船に摸したる船を浮べ土人を捕へ去りし後パテソン其の島に至りし爲め土人の殺す所となれり。

印度

印度は長き傳道史の痕跡を留むる地なり。ネストリヤンの餘孽今尙ほ此の國に存す(第一卷五章參照)。宗教改革時代に於てはザヴイエの傳道あり。プロテスタントの傳道は「丁抹ハルレ傳道」を以て嚆矢とす(第三十九章參照)。ツイーゲンバ

ルクが始めて丁抹より印度に派遣せられしは一七〇五年なりしが、一七七〇年クリスチャン・フリイドリッヒ・シュワルツの來着により新しき時期は開かれたり。シュワルツは十六年間トランクェバアル及び其の附近に傳道し其の後トリチノポリ及びタンヂョオルに移りたり。彼は組織の才あり人に長たる總ての材幹を有し、且つ無私廉潔の人にして萬人の尊信を受けたり。彼の傳道により信仰に入れるもの幾千人に及べり。ケリイの事は既に記せる如し。ケリイ以後の偉人はヘンリイ・マルチン（一七八一―一八一二）なり。彼はケムブリッヂ大學に在る間にケリイの事を聞き、又ブレイナルドの傳を讀みて宣教使たらんとする志を起し、一八〇六年印度に來りガンヂス河の上流に沿へるヂナプウルに駐在せる守備兵附の牧師となりぬ。彼は日々印度教徒及びムハメッド教徒と談論し、又新約聖書を印度語に飜譯し、一八〇八年之を完成せり。其の年更に上流にあるカウンプウルに轉じ、此處に留ること十八ヶ月の間だ說教に忙しき傍ら洗禮を受けたるアラビヤ人の助を得て新約聖書のアラビヤ語譯及びペルシャ語譯に着手したり。劇しき勤勞は其の健康を損し、且つペルシャ語譯の新約聖書も成りたれば、親しくペルシャ及びアラビヤに到り

1 Schwartz　シュワルツ
2 Tranquebar
3 Trichinopoli
4 Tanjore
5 Henry Martyn　ヘンリイ・マルチン
6 Dinapur
7 Cawnpur

文章につきて質す所あらんとし、一八一〇年印度を去りてペルシャに行けり。一年の後一旦コンスタンチノオブルを經て英國に歸らんとして馬上にて一千三百哩の旅行に出立せしが途中病を得て一八一二年十月トカットと云へる地にて死せり。

前に記したる蘇格蘭の自由教會より送られたるアレキサンダア・ダッフ（一八〇六―一八八七）亦偉大なる事業をなせり。彼は一八三〇年カルカタに着し、學校を立て英語を用ゐて教授し大なる成功を收めたり。彼は三十三年間の活動の後健康を損して故國に歸りたり。

印度には階級制度の弊牢として拔き難きものあり。又六百萬人のムハメッド教徒は基督教を輕ずるあり。傳道の困難多く、殊に上流の社會に傳道すること非常に困難なり。且つ傳道の事業はなほ大抵外國宣教使の手にありて印度人獨立の經營少し。然れども基督者の數は着々增加しつゝあり。印度人の基督者の總數約二百七十萬人、其の中に羅馬教徒百十二萬餘人あり。プロテスタント教徒のうちにては英國の監督教會最も多數にして、バプテスト、ルウテル教會、メソヂスト教會之に次ぐ。

サメジ運動

1 Brahma Samaj
2 Raja Rama Mohun Roe
3 Adi Brahma Samaj
4 Keshub Chunder Sen

印度に於て昔の印度教の哲學を復興せんと圖るものあり。或は基督教の或る眞理を採り之を古來の宗教と調和して新しき宗教を立てんとせるものあり。サメエジ(會の意)運動は是の如くして興れり。其一なる『ブラマ・サメエジ』はラジャ・ラマ・モハンロオエ(一七七二―一八三三)の建つる所なり。彼は章陀經及び佛教を研究して後希伯來語希臘語を學びて聖書を研究し、一の世界的宗教を開かんとし、一八三〇年最初の教會を建てたるが同年英國に死せり。彼の死後『ブラマ・サメエジ』は二つに分裂せり。保守主義のものは『アディ・ブラマ・サメエジ』(『アディ』は最初の意)と云ひ、進歩主義のものは『印度のブラマ、サメエジ』と稱す、ケシャブ・チャンダア・セン(一八三八―一八八四)之を率ゐたり。彼は世界の聖典より最善なるものを採りて信條とせんと云ひ、宇宙の大原因なる神、自然と人心に存する自然の觀念、神人となることの否定等を掲げて主義となせり。彼は一時盛なる勢力を得しが、幼女結婚に反對せし彼が己の娘の結婚に際し主義に反したる爲め頓に人望を墮せり。

支那

支那の傳道歴史は中世の末コルヴィノの傳道に始まり(第二卷第二十三章參照)ザヴィエの後マテオ・リキの傳道に始まりてゼズイットの傳道の盛なりし時代あり。明朝滅びて清朝となるに及びても宣教使は天文學の知識を有する等の理由により宮廷の保護を得、全國至る處會堂は建てられ、信徒の數十萬人を越ゆるに至れり。康熙帝の時代にゼスイットとドミニック派との爭ひ激しく、帝は之を信ずる心を失ひ、宣教使を逐ふことを令し、其の子世宗即位後一層其の禁を嚴しくせり。斯くて第十九世紀の半以後羅馬教は衰へ第十九世紀の半禁令を解かるるに及び羅馬教の宣教使は復た盛に傳道に着手せり。

支那

1 Robert Morrison
2 Milne
3 Bridgeman

支那に於けるプロテスタント傳道の歴史は一八〇七年ロボルト・モリソン[1](一七八二―一八三四)の來航を以つて始じまる。モリソンは英國の人、靴型製造者にして勞働し且つ學びたる人なり。倫敦傳道會社は其の志望を容れて支那に赴くことを命じ、數年間準備の勉學を爲し、鴉片戰爭の最中なりければ米國を經て其の紹介により支那に着せり。傳道七年の後漸く洗禮を受くる者起れり。二十七年間の盡瘁の結果信徒となりし者は數人に過ぎざりき。然れども彼は着任後早くも新約聖書の翻譯に着手し一八一四年之を完成し『新遺詔書』と題して出版し、其の後ミルン[2]と協力して舊新約書の翻譯を完成し、又支那語辭典及び文典を著し、將來の爲に貢獻したる所甚だ大なり。廣東に死せり。

之より先き「アメリカン・ボオルド」の宣教師ブリッヂマン[3]來着す(一八二九年)それより後一八五〇年までの間に種々なる傳道會社宣教使を送りしが、其の

中ウイリヤム・チャルメルス・バアンス(一八一五―一八六八)の如き有名なる一人なり。彼は英國長老教會より派遣せられ一八四七年支那に來り、各地を旅行して道を傳へ、質素なる一生を送り牛莊にて死せり。[5]ハドソン・テイロルは一八五三年『支那人傳道會社』の宣教使として支那に遣され、一八五五年より一五五六年にかけボルンスとともに傳道して大なる感化を受け、終に『支那內地傳道會』を興したり。此の會は教派に關係なく、又定りたる俸給を保證せず、本國にある社員によりて指揮せられずして傳道地に在る先進の宣教使により指揮せらるるを以て方針とせり。今日此の會社の宣教使九百五十人を越え、殆んど支那各省に遍し。

支那の宣教使中其人と其の書と顯る者の中左の名を記さざるべからず。[6]マルチン(丁韙良)は『天道溯原』の著者にして殆んど五十年間支那にあり。[7]ウイリヤムソン(韋廉臣)は『格物探原』『二約釋義』を著し、[8]ファーベル(花之安)は『馬可講義』『眞理衡平』を著し、エドキンス(艾約瑟)は佛教に關する書を著し、レッグは四書五經を英譯し、シェレスシウスキイは聖書の譯を成したり。

4 William Chalmers Burns
5 J. Hudson Taylor
6 W.A.P.Martin
7 Williamson
8 Faber
9 Edkins

一九一二年(大正元年)の發行にかゝる『支那宣教年鑑』(チャイナ・ミッション・イヤア・ブック)によれば支那全國に在る各派の教會二千九百五十五、信徒總數十六萬七千餘人、按手禮を受けたる牧師五百四十八人外國宣教使の數五千百四十四人なりと云ふ。未だ盡く精密にあらずとするも概數を知るに足れり。

世界的傳道の章を終るに當りて世界的宣教大會に就きて記すを適當とすべし。教派の別に關係なく外國傳道の問題を議する爲に會議の開かれしは一八五四年英米兩國にあり、其の後一八六〇年リヴアプウルに、一八七八年倫敦にあり。一八八〇年近世プロテスタント傳道開始百年を祝する爲に倫敦に開かれし第一回世界宣教大會[1]には英國の代表者千三百餘人、米國より百三十二人、大陸より十八人の參列者ありたり。第二回大會は一九〇〇年ニウヨオクに開かれ米國より千五百人、歐洲及び他の諸國より二百人の參列者あり、六百人の宣教使來會したり。一九一〇年六月蘇格蘭のエデンバラに開かれたる世界宣教大會は最も盛大なるものなりき。英米兩國各略ぼ同數にして合せて千人の代表者を出し歐洲東洋諸國其他より一百人を送り、代表者にあ

世界的宣教大會
1 World Missionary Conference
エデンバラ宣教大會

世界宣教統計

らざる參列者三千七八百人に達し、傳道に關するあらゆる問題は討議報告せられたり。

此の會議に報告せられたる統計によれば、一九〇七年に於ける外國傳道會社中宣教使を派遣せるもの三百三十八之と協同せるもの四百五十、合計七百八十八個の團體あり。派遣せる宣教使一萬千二百八十人（醫者及び按手禮を受けざるものを含む）あり、一年の寄附金四千九百八十四萬六千六百九十一圓に上りしと云ふ。

天主教隆盛時代

第五十二章　日本の基督教

日本の基督教の歴史は、我等に取りては別に一卷を用ふるに價する題目なり。こゝには僅に概要を記するに止むべし。殊に最近時代は、粗略ならざるを得ず。

日本の基督教の歴史は、耶蘇教社の創立者の一人フランシスコ・ザヴィエーが天文十八年（一五四七）我が國に來り教を宣べたるに始まれり。（第八章參照）其の後此の教社の宣教使相踵ぎて來りたり。織田、豊臣の時代となり英傑競ひ起り、外國との交通自由にして、興國の氣象爵勃たる時なりしかば天主教は非常なる勢を以て傳播せり。秀吉の諸將の中にても黒田如水、小西行長、高山右近の名將は皆洗禮を受け、基督教名（クリスチャンネーム）を戴きたり。種々なる基督教の書は飜譯せられ、邦語或は羅馬字を以て出版せられたり。當時日本に來りし宣教使は大抵ゼズイットにして、他にフランシスコ派の宣教使も來りたり。

是の如き時代は四十餘年間繼續したるが天正五年（一五八七）秀吉は基督教

基督教禁制

に對する政策を一變して禁制の令を布き、基督教の會堂なる南蠻寺を毀ち、信徒死刑に處せらるゝもの萬を以て數ふ。又フイリッピン島に逐はれしものもあり。此の間猶ほ新なる信徒興れり。慶長五年九月關原の役ありて、德川氏の世となる。慶長十六年(一五九三)家康切支丹宗を嚴禁し、京都及び他方にある會堂を毀ち、外國宣教使は之を海外に逐へり。寛永五年(一六二五)重ねて切支丹を嚴禁し、翌年踏繪の令を發し、銅版に刻したる耶蘇の繪像を踏ましめて信仰を檢す。幕府は切支丹宗禁制とともに鎖國の方針を一定し、同寛永十二年(一六三五)三本檣の大船を造ることを禁じたり。同十四年(一六三七)天草の亂あり。肥前の島原半島と肥後の天草とには天主教の信者多く、舊領主有馬晴信も其の一人なりき。德川家康之に自殺を命じ、後其の子の封を移せり。

天草の亂

慘酷なる刑を宣教使及び信者に加ふるに及び積怨爆發して大亂となる。寛永十四年十月に始まり、天下の大兵を邀へて善く戰ひ、征討軍の大將板倉重昌戰死す。終に長圍の計を定む。包圍長きに亘りて糧食竭き翌年二月末城陷る。一人も節を變ずる者なかりき。天主教の勢力頓に減せり。之より後迫害斷えず、殉教する者頗る多し。日本國民が信仰の爲に死し得る人民なることは歴史の上に於て證明せられたり。斯の如き迫害の後天主教は全く滅絶したるにあらず、長崎附近の浦上村の如き地方には陰に信仰を維持したるもの少からざりき。

開國

鎖國二百年の間和蘭人のみは長崎に來り貿易することを許されたれども、基督教の禁令嚴しく、和蘭人は敢て宣教を試みざりき。

嘉永六年(一八五三)六月北米合衆國の使節ペルリ軍艦を率ゐて浦賀に來る。安政元年(一八五四)正月ペルリ再び來朝、三月米國と和親條約を結び、次で英露二國との和親條約成る。同三年米國總領事タウンセンド・ハルリス來り、越えて五年六月井伊直弼米國と通商條約に調印す。ハルリスは信仰厚き基督者なり、誠意を以て我が國の爲めに圖れり。開教の實施は翌安政六年(一八五九)七月なりしが、之れに先つこと二ケ月、米國監督教會の宣教使として支那に在りしリッギンス及びウイリヤムス本國傳道會社の命令により日本に遣さる。

最初の宣教使

同年十月米國長老教會の宣教使ヘボン神奈川に着す。一月の後ダッチ・リフォームド教會の宣教使フルベッキ、ブラウン、シモンスの三人亦來りぬ。開國の年我が國に來りたる宣教師は此の六人なり。

1 John Liggins
2 Channing Williams
3 James Curtis Hepburn
4 Samuel Rollins Brown

ウイリヤムス　ヘボン　ブラウン

1リッギンスは一年の後辭して歸國せり。ウイリヤムス(一八二九—一九一〇)は其後永く日本に留りぬ。2チャンニング・ウイリヤムスは米國ヴオルジニヤ州に生れ大學及び神學校の業を卒へ一八五五年宣教使として支那に赴き日本に轉ず。慶應二年米國に歸り同年支那及び日本の監督に任せられ、明治七年專ら日本の教務を管することとなれり。人と爲り謙讓にして自ら奉する事極めて薄く、傳道慈善の爲に盡したること大なりき。古の聖者の風ありて人其の德を慕ふ。明治四十一年故國に歸り、明治四十三年十二月死す。

3ヂエームス・カルチス・ヘボン(一八一五—一九一一)は米國ペンシルヴァニヤに生れ、ペンシルヴァニヤ大學にて醫學を修め、醫學博士の學位を受く。東洋開拓の爲に盡さんとする志あり。廿五歲支那に行き厦門に病院を立て一八四〇年より四六年に至る。妻病める爲め歸國し、十三年の後日本の開國を聞き、志願して來朝せしなり。彼は温和慈仁なる君子なり。醫院を開き、醫術を敎へ施療をなし、又和英英和辭典及び日本語文典を著し文運に貢獻する所大なり。又聖書翻譯の事業に與れり。後明治學院總理たり。明治二十六年本國に歸り、靜に晩年を送り、明治四十四年九月死す。

4サムエル・ロリンス・ブラウン(一八一〇—一八八〇)は米國コンネチカット州東ウインゾルに生れ、一八三二年エール大學を卒業し一八三八年支那に行きモリソン教育會

5 Guido Fridorin Verbeck
6 D.C. Greene
7 M. C. Harris
8 J. C. Davison

フルベッキ

の教師たること七年、妻の病の爲に歸國し、一八五九年日本に來り二十年間日本にあり。聖書翻譯の事業に與り、又教育家として感化多し。又文學の才に富めり。明治十二年歸國し翌年故郷に死す。

5ギドオ・フリドリン・フルベッキ(一八三〇—一八九八)は和蘭の人、工學を修め職を求めて一八五二年米國に航す。後志を立ててアウボルン神學校に入り、一八五九年業を卒へて後日本に來れり。初め長崎に於て英語を教授し、明治二年東京に移り東京大學設立に參畫す。其の事終へて後は傳道及び神學教育に從事し、邦語の演說に長じたり。明治三十一年東京に死す。

開國より王政維新まで十年米國に南北戰爭ありて宣教使來るもの少く、切支丹の禁尙ほ存し、既に來れる宣教使の盡力によりても多くの信徒を與し得る氣運未だ到らざりき。

明治二年會衆教會の傳道會社「アメリカン・ボオルド」は最初の宣教使ジイ・シイ・グリイン(一八四三—一九一三)を送り、明治六年メソヂスト教會はエム・シイ・ハリス、ヂエー・シイ・テヴィソン等を送り、他教會も亦續々宣教使を派遣せり。

切支丹邪宗門禁制の制札は明治六年二月十九日に撤去せられたり。其の前明治五年横濱のブラウン、バラ等の周圍に集れる數人の青年信仰を與して

日本最初のプロテスタント教會

洗禮を受け、三月十三日教會を組織し、「日本基督教會」と稱す。これ日本最初の教會なり。本多庸一、井深梶之助、植村正久、押川方義等其の會員なり。

大尉ジェーンス

之より先き熊本藩主細川侯明治三年藩の子弟を教育する爲に英學校を開き米人大尉ジェーンスを聘して教師となす。ジェーンスの感化により數年の後門下生の中より基督教を信ずる者を出し、明治九年一月熊本花岡山上にて盟約を爲し此の道の爲め身命を獻ぐべき事を盟ふ。其の中に宮川經輝、海老名彈正、小崎弘道、金森通倫等の人々あり。明治九年英學校閉されジェーンス歸國するや、彼等は京都の同志社に入れり。同志社は新島襄の建つる所なり。

新島襄

新島襄(一八四三—一八九〇)は上州安中の士人、元治元年(一八六四)脫走して米國に渡航しアンドオバ及びアモスト大學に學び明治七年歸朝し、翌年京都に同志社を開く。宣教使デヴイス、ラアネッド之を助く。

クラアク

同じ年北海道開拓使長官の聘に應じて札幌農學校の設立に參畫せしマサチュセット農學校々長クラアクは留ること一年に過ぎざりしも宗教的の感化大にして多くの青年基督教を信じたり。內村鑑三、佐藤昌介、新渡戸稻造等これなり。

聖書翻譯

當時基督教を信じたる青年の多くは士族の子弟にして儒教の思想に養はれ、憂世愛國の精神に富める人々なりき。故に外國人の保護によらざる獨立の教會を建てんと欲する精神ありき。

聖書飜譯の事業は慶應年間よりブラウンの着手する所なりしが明治時代に入りて歩を進め、新約聖書の飜譯は明治十二年十二月之を完成し、舊約聖書は明治十九年飜譯を完成せり。主任者はヘボン、ブラウン、フルベッキ、グリイン等にして松山高吉、奥野昌綱、植村正久、井深梶之助等之を助けたり。

日本譯の聖書未だ成らず、基督教の著書未だ現れざる時代に於て漢譯聖書漢文の基督教書籍多く讀まれたり。マルチンの『天道溯源』(中村敬宇訓點)或はウイリヤムスの『格物探原』の如きこれなり。

以上記する所はプロテスタント教會の事に屬す。ここに希臘教會の傳道を記さゞるべからず。此の派の傳道はニコライ(一八三六—一九一二)を以て中心とす。

ニコライ　Nicolai

ニコライは露國スモレンスク縣の一寒村に生る。父は敬虔なる下級の教職なり。父の望に遵ひて身を宗教に獻ぐる志を立て、科程を履んでペテルスボルグの神學大學に學びたり。安政六年(一八五九年)函館の領事館附司祭たる

苦戰の時代

2 Sergie

べき人を要する布告を見、日本に來る志を決し、シベリヤを横斷して文久元年函館に到着せり。明治元年土佐の人澤邊琢磨外二人初めてニコライより洗禮を受く。明治五年ニコライ東京に出で傳道を開始す、明治十二年一旦歸國して大聖堂建築の志を露國の信徒に訴ふ、此の時主教に任ぜらる。翌年再び來朝し明治十七年工を起して二十四年落成せり。明治三十九年大主教に進む。明治四十四年、來朝五十年を祝するや全國の教職百五十五名、信徒三萬二千七百人に上れり。明治四十五年二月東京に死す。[2]セルギイ主教となる。

之より後明治二十年頃に至るまで基督教は時勢の順調に駕して進み、洗禮を受くるもの多く與り、宣教使の設立したる學校は盛を極めたり。明治二十一年憲法は發布せられ、信教の自由は保障せらる。然れども淺薄なる歐化主義失敗に歸して保守的反動の潮流再び勢力を得んとし、宗教と國體及び教育との關係につきて基督教は多くの謬見誤解と戰はざるを得ざりき。

明治二十二年日本プロテスタントの二大教派なる組合教會と今の日本基督教會の前身なる一致教會と合同の計畫將に成らんとして破れぬ。明治二十三年一月新島襄は大磯に死せり。之より先き明治廿年ユニテリアン教會

苦戰の時代

傳道の進歩

社會事業

加特力教會

1 Rey

は米國より、普及福音教會は獨逸より來り、各雜誌を發行して泰西の高等批評自由神學を紹介し、幾多信仰上の動搖波瀾の端を開きぬ。

是の如き戰を經る中に信仰の生活蹉躓して傳道の職を退きたるものもあれども、又能く苦戰に堪え、信仰と思想ともに鍛錬を加へ教會を指導して今日に至りたるもの少からず。

國民の宗教的要求は長く抑止せらるべきにあらず。明治二十七八年の日清戰役以後國民の思想漸く進歩的となり、社會の基督教に對する見解漸く正當に復し、宗教を無視せる教育の弊次第に暴露せらるるに及びて傳道の効果復た見るべきものあり。神學に於ても新しき研究の結果を歡迎して然かも基督教の眞髓を執り得べき穩健なる立場亦おのづから了解せられ來りぬ。

基督教社會事業の機關なる基督教青年會、(明治十三年創立)救世軍(明治二十八年渡來)禁酒事業、矯風會等各活動せり。明治四十年基督教青年會の世界大會は東京に開かれ、同年救世軍のブウス來朝せり。

加特力教會(公教會)は全國を東京大阪函館長崎四國新潟の六教區に分ちて傳道す。東京に大主教(現任者レイ)[1]あり、大阪及ひ函館に一人の主教を置く。

宣教使は多く巴里宣教會の派遣する所なれども、四國はドミニック派　屬し、北海道にはフランシスコ派の傳道地及びトラピスト（明治二十九年渡來）の修道院あり。ゼズイットの宣教使は明治四十一年再び我が國に來り東京に上智大學を建つ、其の他マリヤ會、聖マウル會等の團體教育事業に當り、効果を擧げつつあり。慈善事業亦其の經營に成るもの少からず。一九一二年八月の統計によれば內地に於ける信徒の數六萬九千九百人餘に上る。其內五萬人餘は長崎教區に屬せり。

プロテスタント諸教派

プロテスタント教會に於ては英米獨の諸國各々宣教使を我が國に送り、教派の數二十を超ゆ。是の如くしてプロテスタント各教派の協同一致は困難なる中に徐に實現せられつゝあり。メソヂスト教會三派は明治四十年合同して日本メソヂスト教會を組織し、本多庸一監督に擧げられ、明治四十五年本多庸一死して平岩愃保後任となる。教會同盟は明治四十五年二月組織せらる。エデンバラに開かれたる萬國宣教大會の繼續委員との協議によりて成立せる各教派協同の傳道は大正三年より開始せられたり。最近の統計によればプロテスタント教會に屬する大人信徒の數十萬九百八十一人、外に洗禮を受けたる小兒及び準會員を加ふれば十二萬四千九百二十一人に上る。臺灣人にしてプロテスタント教會に屬する大人信徒六千百九十人、外に洗禮を受けたる小兒四千九百七十六人、準會員三千人あり。朝鮮人にしてプロテスタント教會に屬する大人七萬二千二百三人、準會員三萬五千三百八十三人あり。（一九一四年六月出版『クリスチャンヤッパン』に據る）內地に於ては日本基督教會、日本組合教會、日本聖公會、日本メソヂスト教會最も優勢なり。

我等は基督教がパレステナの一隅より起りて威力四海を壓したる羅馬帝國に傳へられ、大なる艱苦を經て終に之を感化したる驚くべき歷史より始まりて、千九百年の長き行程を辿り、今や我國に於ける基督教の歷史に至り、ここに筆を擱かんとす。日本の基督教は今猶は昔の羅馬に於ける如く異教の生活と空氣に包まれ、外國より來れる異教思潮とも戰はざるを得ず。此處に基督の王國を建設し、東洋を導く光を揭げ、世界に於ける基督教思想の發展に貢獻せんとす。事は實に容易ならず。神の恩寵此國に渥く、最善の人最大の努力を獻ずるにより初めて之を成し得べきなり。

基督教史終

索引

ア

愛　七九、八〇、一九四　四〇〇、四〇一
アイルランド　二二〇
アイレネウス　六〇、六一、三五—一四二、一八〇
アウガスチン（宣教使）　三一五、三一六
アウグスチヌス　二六〇—二七八、五〇二、七一六
—教團　四一〇、五〇〇、五〇一
アウグスブルグ假信條　六三六、六三七
—國會　五一八
—宗教和議　六三八
—信條　五一八、五一九
埃太利　五〇七
アヴイニオン　四六四—四六六
アヴイセンナ　四一三
アヴエロエス　四一三
アクイナス　四一四、四一七、四四一、五七六
アグリコラ　四七六
アゴバルト　三五八、三五九
アセナゴラス　一三〇
アソス山修道院　四九二、四九三
アタナシウス　二二六—二二九、二四二、二五四、二五五
—信條　二五五
アナバプチスト　五六八—五七二
アフリカ　九二六—九二九
アベラルドス　三九五—三九七
アポリナリス　二三三—二三四
天草の亂　九三八
アミロウ　六五八
アムブロシウス　二六一—二六三、二八一
アメリカン・ボオルド　八六七、九二四
アラコオク　七八五
アリウス及びアリウス說　二二二—二二九
アリスチデス　一二八
アリストテレエス　三九二、四一二、四一三
アルヴイング　八五二
アルトラモンタニズム　八八七、八八八
アルスキン（エベンザア）　八〇八
アルスキン（トマス）　八五二、八五三
アルビセンセス　四五五—四五七
アルマダ　六三四
アルベルタス・マグヌス　四一三、四一四
アルミニウス及び其の神學　六五〇—六五七、七六二
アルメニヤ教會　八九六
アルノオル　七一七—七一九
アルノルド（トマス）　八二七、八二八

アルノルド（マシウ）　八二六、八四五
アルント　七四四
アレクサンダア第三世　三七四、三七五
アレクサンダア（ヘエルの）　四一三、四一四
アレクサンドリヤ教會　八九、一三八、一四三
—原本　六六六
—神學校　一四三、一四八、一四九
アロンプラドス　七二三
アーン（女皇）　七五四
暗黑時代　三三七
アンスガル　三四七、三四八
安息日　七二、二九〇、二九一
アンセルムス　三九二—三九五、九一〇
アントニウス　二四二
アンテオケ　三四八八
アンドリウス　六八〇—六八九
アンドレエ（ウアレンチン）　七四四
アンモニヤス・サッカス　一一〇
アンリイ第三世　六一〇
—第四世　六一〇
三アンリイの戰　六一〇

イ

耶蘇基督　二八—三二
耶蘇教社　五七七—五八八
—廢止　七三〇—七三三
—再興　八七五、八七六
イグナチウス　一一八、一二二
イシドオル（埃及）　二五五、二五六
イシドオル（セヴィルの）　三四〇
僞イシドオル集　三四〇
一意論　二三九
一性論　二三七、二三八
印刷術　四七六
印度傳道　八九、一四三、
インノケント第三世　二九六、九二九—九三二
三九九、四〇七、四五六　三七六—三七八、
インフラブサリヤン　五六六、六五五

ウ

ウイクリッフ　四五七—四五九
ウイッシヤルト　六一六、六一七
ウイッテンベルク　五〇一、五〇二、七四七
—協約　五二一
ウイクリッフ　四五七、四五八、四五九、六一五
ウイリヤムス（ザヨルザ）　九一九
ウイルバウフオース　七六六
ウイルヘルム（オロンズ公）　五九七—六〇一
ウールスタン　七〇〇、七〇一
ウエストファーレン條約　六四九、六五〇
ウエストミンスタア會議　六八三、八六四
ウエスレエ（チヤアルス）　七五六—七六三
ウエスレエ（ヂヨン）　七五六—七六四
ウエッセル　四二七、四七六
ウエゼル　四二七
ウエッテ　九〇四

ウエルハヴセン　九〇四
ウオルマアル　五三八
ウオルムス國會　五一〇—五一一
ウラヂミイル　三五三、三五四
ウルフイラ　八七九—八八四
ヴアチカン宮　八七八—八七九
—會議　八七九—八八四
—原本　八七九
ヴアレンチヌス　一六四
ヴイクトヲヌス　二六七
ヴイルギリウス　二九〇
ヴイレエ　五三五—五四一
ヴインチ　四七四
ヴエン　七六六

エ

英國傳道　九〇、三一五—五九
英國教會六　一八、六三〇、六三四、六三五
英譯聖書六二五、六七九—六八一、九〇六
エック　五〇四、五一九
エフクハルト　四一九—四二一
エコラムパヂウス　五三〇、五三三
エデッサ　八八、二九五、三八三
エデンバラ宣教大會　九三六
エドワルド第三世　六二七、六二八
エドワルド（老ヂヨナサン）　七三八、七八〇
エドワルド（少ヂヨナサン）　八五五、八五六
一七〇、一七一
エピオナイ　一九三
エピファニイ　二五八、二五九
エピファニウス　二五八
エフライム　二三六
エペソ教會　六〇—六六、八九
エペソ大會議　八五八
エモルソン　四七九、四八〇、五一五、
エラスムス　五一六、五一八、九二一
エリオット（ヂヨン）　七四六、九二一、九二二
エリザベス（女皇）　三三七、三九一、三九二
エリゲナ　
エリサベス（女皇）　
エルヴエシウス　六三二、六三六、六七六
エルカサイ　七三五
エルサレム　五二—五五、三八一、三八二
—教會　六七
エワルド　八〇四

オ

オーエン　六八八
オーランヌ　七一七
オツカム　四一八
オグスフオルド運動　八三〇—八三九
オクセンスチルン　六四五、六四六
オタアバイン　八七一
オトオ第一世　三三八
オトマン土耳其人　四八五—四八九
オプスキュラニスト　四七八
オラフ　三四八、三四九
オリゲネス　一四五—一五三
—に關する論戰　二七九、二八〇

オルバック　七三六
オルガ　三五三

カ

カアザナル　三六九、三七〇
カアトライト　六七六、六七七
カアル第五世　五〇七、五八六、五八八、六三六、六三七
カアルスタット　五一三
カイザル禮拜　九三、九四
會衆派教會　六七七、八六六、八六七、四四七、四四八
悔悛　九〇五
カイム　八二二
高教會派　二四六
カシオドラス　二四五
カスニリオ　五四七、五四八
カタコムバ（洞墳）四八、一九六—一九八
カタリ　四五五—四五七
カタリナ　六〇七—六一三
カトオ・カムブレジイ條約六〇七、六三三　一一八、一五九、
加特力教會　八五二
加特力使徒教會　七〇四七一四
カドウオルス　三四八
カニウト王　四三二—四三八
カノン法　五三二
カフベル條約　九〇一
カフタン　四二四
神の友　四二九
神の休戰　八六八
カムバアランド長老教會　六九一
カムバネラ
カムベル（マクレオド）　八五三、八五四
カメロン及びカメロン黨　八四六、八四七
カラフア　五七六、五七七、五八八、六〇五
カリフア　三一一—三一三
カルヴイン　五三五—五五二
—神學　五六一—五六五、六八一
—神學とアルミニウス神學　六五三、六五四
—神學の訂正　六五七、六五八
カルケドン會議及び信條　二三八
カルメル山教團　四一〇
カント　七九三、七九六—七九九
監督　六八—七一、一八一—一八三
監督教會　八六九、八七〇
蓋然の道　五八六
ガイド・ブレエ　五四九、五九六
ガリカニズム　八八七
合衆國　八六五—八七四
諸教派　八五五—八六五
神學　九一二
ガリソン　六九〇
ガリレオ

キ

キイブル　八三一
救世軍　九一八、九一九
誓約聖書（感化）　一二五
キプリヤヌス　一五五、一五六、一五八、一五九
基督教史（總論）　一—八
基督教社會主義　九一五、九一六

基督教青年會　九一九、九二〇
基督論　一二二、一四一、一四二、一七三—一七六、六六三八六〇、九〇〇
規律　一八五—一八七
キリル（アレクサンドリヤ）　二三六、二五五
キリル（エルサレム）　二五五
キリル（宣教使）　三五〇、三五一
キリル・ルカリス　四八九、六六五—六六七
近世哲學　六九〇—六九五
キングスレエ　八四二、八四三、九一五、九一六
禁酒運動　九一四、九一五
ギイスラア　六
ギボン　七八三
ギヨン夫人　七二四—七二九
希臘　八九、一三八、八九六
希臘教會四六九—四七一、四九〇—四九四　六六五—六六九、九四三
ギルダス　三〇一
欽定英譯聖書　六七九—六八一

ク

クウパア　七六五
クラウデウス　三五八
クラップ（ヨハン）　九二八
クラムマア　六二七—六三二
クララ　四〇四
—女教團　四〇八
クラレンドン法　三七五
クリスチヤン教會　八七三
クリスチヤン・サイエンス　八七四
クリスマス　二九三
クリソストム　二六一、二六二
クルウニイ修道院　四〇一
クレメンス（アレクサンドリヤ）　一四四
クレメンス（羅馬）　一一七、一一八
クレメンス集　四三三
クレメンスの「認識」「說教」　一七一
クロオヴイス　二一九
クロムウエル　六八四—六八八、九二二
クロイエチズム　七二三—七二九
會堂　二八六、二八七、四八一—四八三
化體說　四三〇、四四一
クスタフ・アドルフ　六四五、六四六
クスタフ・ウアサ　五九三、五九四
クノオシス宗　一六〇—一六八
クラチヤヌス法令集　四三三
クロオチウス　六五五—六五七
クレゴリウス第一世　三二〇—三二三
クレゴリウス第七世（ヒルデブランドを見よ）
クレコリウス（ナジヤンザス）　二五六—二五八
クレゴリウス（ニツサ）　二五六—二五八

ケ

景教　二九五—二九九
敬虔派　六七三、七四三—七五二
啓蒙思潮　六七一、七三三—七四二
刑法　四三五
ケシヤプ・チヤンダアセン　九三二
教父（概論）　一一四—一一六

ケドモン　三一八、三一九
ケブレル　六九〇
ケムピス　四二六、四二七
ケムブリッヂ・プラトオン學者　七一四
ケリイ　九二二、九二三
ケルサス　一〇八—一〇九
建築　二八六、四八一—四八三
現異邦日　一九三
原罪說　三五八、三九六
現代主義　八八五、八八六

コ

コオルリッヂ　八二三—八二七、八四〇、八六〇
コオレット　四八〇、四八一
古加特力教會　八八四
コクチエユス　六五七、六五八
コットン・マアサア　七六六
コペルニカス　六九〇
コムモヂウス　一〇〇
忽必烈　四五〇
コリニイ　六〇一、六〇六—六一〇
コリンス　七〇〇
コルヴイノ　四五〇、四五一
コルンハアト　六五一、六五二
コロンバ　二二〇
コンスタンチヌス大帝　二〇二—二〇六
—寄進狀　三四〇
コンスタンチン・パレオロゴス　四八七、四八八
コンスタンチノオプル　二〇五、二〇六
—奠都　二三四
—第一回大會議　二三九
—第二回大會議　四七四、四八〇—四八八
—陷落　四六五—四七八
コンスタンツ會議　五七六
コンタリニ　七三五
コンヂラ　二一三—二一九
コオト人　四八二
コオト式

サ

サシエヴエール　七五九
サダルニヌス　一六三
サポノロオラ　四六一—四六三
サベリウス　一七六
サラヂン　三八三、三八四
サルヂカ會議　二四九、二五〇
三十年戰爭　六四四—六五一
讃美歌　一八九、四四五—四四八、四九二
ザヴイエー　五七六、五八二—五八四
ザクセン選帝侯　五〇九、六三八
ザクセン公國　五〇九、六三八

シ

宗教改革　四九五—六七〇
宗教裁判　三七八、四五六—七
宗教史學派　九〇七、九〇八
修道院　二四一—二四七、二五八四九二
終油　四四三
三一神の教理　一二三、一五一、一五七
一七六、八六〇

シギスモンド　四六七、四六八
シヘタアシヤン　四〇一
使徒　六七—六九
—信經　一七九、一八〇
支那　四五〇、四五一、九三二—九三五
シナイ修道院　四九三
シミッド　九二六
シメオン（エルサレム教會監督）　五七—五九
シメオン（柱上聖者）　二四四
シヤアレマン帝　三三〇—三四〇
社會事業　九一〇—九二
シュマルカルデン同盟　五二一
—戰爭　六三七、六三八
シユライエルマッヘル　八〇四—八一〇
贖罪論　一二四、一五一、三九四、三九六、四一六、四一七、五六一、五六六、六五七、六六四
神聖羅馬帝國　三三八、三三九、三七四
神秘思想　四〇〇、四一九—四二七
新プラトオン學派　一〇九—一一三
新約聖書　一五七、一六六、一七七—一八〇、二八三—二八七、五一二
—原本二八三、四九三、五五四、六六六
十字軍　三八一—三八八
十二使徒教訓　七〇、七三、一二一
ジオットオ　四七四
殉教者　一〇三—一三五、一九六
純潔　八〇、八一、一九四、一九五
人文學者　四七七

ス

瑞西宗教改革　五二六—五五四
スウソオ　四二二、四二三
スウブラブサリアン　五六六
スエデンボルグ　七七一—七七四
スカンヂナヴイヤ　三四六—三四九
傳道　五九三—五九七
・宗教改革　七六五
スコット（トマス）
スコットランド　六一二—六二一、八四五—八五四
—一致自由教會　八五一
スコラ哲學（第一期）　三九〇—三九七
（第二三期）　四一二—四一八
スタウピッツ　五〇一、五〇二
スタンレエ　八四四
ステパノ　三三
スツデウム修道院　四九二
スパイエル會議　第一　五一四
第二　五一七
スピノザ　六九三、六九四
スラブ人傳道　三四九

セ

聖餐式　七五、七六、一九〇、一九二、二九二、二九三、四四一、四四二、四九一
プロテスタント改革者の意見　三五二、三五四、五六一
聖者號　四三四、四四三
聖者禮拜　四四三、四四四

聖書神學　九〇六、九〇七
聖心禮拜　七八五
聖母崇拜　四四四—四四六
聖母無垢懷胎　四四六、八七九、八八〇
セオフィランスロフィスト　七九〇、七九一
說教　一九〇　四三九、四四〇
セルヴェトオ　五四六、五四七、五六〇、五六七
洗禮　七三、七五、一九〇、一九一、四九〇
セネカ　五四〇—五五〇
—聖書　六八〇、六八一
セルソン　四六六

ソ

ソウマル神學校　六五八
ソクラテス　二五四
ソゾメン　二五四
ソツイニイ（フアウストオ）　六五九—六六四
ソツイニイ（レリオ）　六六一
ソルボンヌ神學院　五三三、五三四、六〇五
ソロモンの短歌　六四
續使徒教父　一一七—一二一
—神學　一二二—一二九

タ

タウセン（ハンス）　五九五
タウレル　四二一、四二二
托鉢教團　四〇三—四一一
タキタス　四四、四五
タメルラン（帖木兒）　四八六
タルック　八二一
大學　四〇五、四一二、四七五、四七六
大學殖民事業　九一七、九一八
ダッフ（アレキクサンダア）　九二四、九三一
ダルウイン　九〇八
斷食　一九六
ダンテ　四七二

チ

チウリッヒ　五二八
チエルヴイニ　五八九
チチヤノ　四七四
チッシエンドルフ　九〇三
超越神教　六九六—七〇三
チヤップ　七〇二
長老　六八、一八三
チヤルメルス　八四九—八五一、九二四
チヤンニング　八五七、七五八
チリイ　六四三
チルロトソン　六九九
チンダル　六二五、六二六
中庸派　八一八—八二一
ヂエームス第一世　六七八—六八二
ヂエームス第二世　七五四
ヂデロオ　七三五
ヂヤドソン　七〇二
ヂヤニサリイ　四八九
ヂヤンセン及びヂヤンセニズム　七一五—七二二

ヂヨウエット（ベンヂヤミン）　八四四
丁抹　三四六—三四八

ツ

ツイングリイ　五二〇、五二六—五三四、五六二、五七一

テ

テイロル（ハドソン）　九三四
テイロル（セレミイ）　六八九
テオドシウス大帝　二一一
テオドタス　一七四
テオロギア・ゲルマニカ　四二五
テトドオル　二五六
テルトリヤヌス　一五四、一五五
—神學　一五七—一五九
テレサ　五七七、五八七
デオクレチヤヌス　一〇二、一〇三
デオケネトスに與ふる書翰　一二一、一三三、一三六
デオヌシウス（僞）　三〇〇、三九一
デオヌシウス・エキシグス　三〇一
デカプト　六九二
デキウス　一〇一、一〇二
デサイブルス　八七三
デリンガア　八八四
ドルネル　八一八
奴隷　一九、九一〇、九一三
ドライト（テモシイ）　八五六

ト

トインビイ　九一七
トマス（ケラノの）　四四八
トラヒスト　七八五、九四五
トラヤヌス　九五—九九
土耳其人　三八一、三八二、
トレント會議　四八五—四八九、八九五
道德　五八八—五九一
同胞教會　七九—八二、一九四、一九五
道理　八七一
道德の女神禮拜　四一五、四一八、六六三、
ドナウエルト事件　六七一、六九七
ドナチスト　七九〇
ドミチヤヌス朝の迫害　四一、四二
ドミニコス　二七七、二七八
ドルト會議　四七、四八
　四〇六—四〇八
　六五四、六五五

ナ

ナポレオン第一世　七九二
ナポレオン第三世　八七七、八七八、八八八、八八九
ナント令　六一二、七一五
南洋諸島　九二九

ニ

新島襄　九四二、九四四
ニウトン（ヂヨン）　七六五
ニウマン　八三三—八三七
ニウレンベルヂ國會　五一四
ニカヤ會議　二二二—二三二
ニカヤ信條　二三〇

ニコライ　九四三
ニコラス（神の友）　四二二—四二三
ニコラス・カパシウス　三四一
ニコラス第一世　三四一
ニコン　六六九
日曜學校　九一三
ニッチ　八二〇
日本　五八二—五八四、九三七—九四七

ネ

ネアンデル　六、八二〇
ネストリウス　二三五、二三六
ネストリウス派傳道　二九五—二九七
ネエデルフンド　五九五—六〇一、六四八
ネロ朝迫害　四四—四七

ノ

ノックス　五四八、六一六—六二三

諾威傳道　三四八
宗教改革　五九一—五九四
ノルマン人　三四六

ハ

バアバアト（エドワアド）　六九七、六九八
ハアバアト（ヂョルヂ）　六八九
ハイデルベルヒ問答　五五二
ハインリッヒ第四世　三七〇、三七一
道害　九一—一〇五
ハドリヤヌス　九九
法皇
　權能　四三三、四三四
　撰任　三六九、三七〇、四二九
　無謬　八八一、八八四
　法令集　四三三
ハッチンソン大佐　六八二、六八八
ハミルトン（パトリック）　六一五
ハレル（ベルトホルド）　五三〇
ハルナック　九六二
ハロルド　九一二、九一三
ハンガリイ　七五〇
ハンブデン　八一二九
パアクレエ（ロボルト）　七六八、七六九
パアクレエ（哲學者）　六九五、七〇四
パアセル大會議　四六七、四六八
パアンス（宣教使）　九三四
バイエス　七一六、七一七
バクスタア　六八七—六八八
バシル　二四四、二五六、二五七
バシライデス　一六四
バットラア　七〇五—七〇八
バプチスト教會　五七一、九〇〇
バルコホカバの亂　五九
バルテロマイ祭日虐殺　六〇九
バルナバ書　一二〇
バロニウス　五
バンヤン　六八七
パウロ（使徒）　三六—四二、一二六、一二七、一四二、一六六
パウロ第三世　五八六、五八七
パウロ（サモサタの）　一七五

パコミウス　二四三
パスカル　七一九、七二〇
パッサウ媾和　六三八
パテソン　九二九
パテルソン（兄弟）　五九四、五九五
パピヤス　一四、一一九
パトリック（聖）　二二〇
パンテイヌス　一四三

ヒ

ヒウーム　七〇八—七一二
ヒエロニムス　二六三、二六四
ヒパチヤ　二一一
ヒッポリタス　一四〇
ヒメネス　五七五、七七六
ヒルデブランド　三七〇—三七二、四三二
ヒンクマアル　三四二
ビイダ　三一七
ビイチヤア（ヘンリイ）　八六三
ビイチヤア（ライマン）　九一四
ビイデルマン　八一七
ビサンチン式建築　二八七
ビウス第七世　八七五、八七六
ビウス第九世　八七六—八八四
ビウゼエ　八三五—八三八
ビウリヨン　六七四—六八七
ビサ大會議　四六六
ビルヂリム、プアザア　七七五

フ

フアーレル　五三五、五四一—五四五
フイリップ第四世（佛國）　三八〇
フイロオ　二五、二六
フイレンチエ大會議　四六六—四七〇
フウカア　六八八
フウパア　六七五
フエルヂナンド第一世　六三九
フエネロン　七二六—七二九
フオーチウス　三六一—三六四、四九三
フオックス（ヂョーヂ）　七六七—七七一
復活節　一九二
フッス　四五七—四六〇、四六七
フッス黨　四六八
フッテン　四七八
フラ・アンヒリコ　四七四
フライ（エリサベス）　九一三
フランセスコ（アシシ）
　三七八、四〇三—四〇九、四四九
フランセス（セエル）　五七七
佛蘭西革命　七八七—七九一
佛蘭西宗教界（最近世）　八八七—八九四
　—政教分離　八九一—八九四
フリイドリッヒ・バルバロッサ　三七四、三七五、三八四
フリイドリッヒ第二世　三七八、三七九、三八四
フルウド　八三二
フルベッキ　九四一
フレッチヤア（ヂョン）　七六一
フレンド教會　七六八—七七一、九一一
フロメン　五三五、五四一
プウス　九一八、九一九
武士教團　三八八

ブシネル　八五九—八六二
ブッチエル　五三一、五三三、五六五、六三〇
ブラウン（ロボルト）　六七七、六七八
ブラウン　九四〇
ブリコネエ　五三六
ブリンガア　五四九
ブルウノオ
ブルガリヤ人　六九一
ブルックス（フイリップス）　三四九、三五二
ブリスキリヤン、　八三二、八三三
ブリニウス　二八〇、二八一
プロテイメス　九五—九八
一一〇、一一一

へ

ヘエゲル　八一一—八一四
ヘフエーレ　八八一
希伯來書　八四
ヘボン　九四〇
ヘルデル　八〇一—八〇二
ヘルマス　一一九、一二〇、一二二
ヘルマン　九〇一、九〇二
ヘンリイ第二世　三七五、三七六
ヘンリイ第八世　六二五—六二九
ペエコン　六九一
ペエメ　七四三、七五六
ペギニ及びペガアザ　四二二—四二四
ペケット　三七五、三七六
ペザ　五三八、五五四
—原本　五五四
ペネデクタス　二四五、二四六
ペルギイ信條　五五一、五九六
ペルナアルド　三九六、三九八—四〇一
ペレンガリウス　三五七
辨證家　一二八—一三六
ペントレエ　三〇四
ペンゲル　七五七
ペエレ　七一二—七一四
ペテロ・ダリイ　四六五
ペテロ　三一、三二、四六
ペテロ（十字軍の遊說者）　三八二、三八三
ペテロ大帝　六六九、七三三
ペトラルカ　四七三
ペトルス・ロムバルドス　三九七
ペラギウス及び其の神學　二七三—二七五
半ペラギウス說　二七六
ペン（ウイリヤム）　四六八、四六九、七七六

ホ

ホイットギフト　六七六、六七七
ホイットフイルド　七五七—七六三、七七八
封建制度　八六二
ホッザ　八六二
ホップス　六七一、六九一、六九二
ホプキンス　八五五、八五六
ポエチウス　三〇〇
ポゴミイル　三五九
ポッカチオ　四七四
ポッシュエ　七二七—七二九
ポニフアシウス第八世　三七九、三八〇
ポヘミヤ使道　三五二
ポリカルプス　一一九

マ

マキシミリヤン第二世　六三九、六四〇
マシウ（セオバルド）　九一四
マニ教　一六八—一六九
マルカス・アウレリウス　九九、一〇〇
マルブルゲの會見　五一八
マルブルゲ信條　五一八
マルキオン　一六五、一六六
マルチヌス　二四四
マルチン（ヘンリイ）　九三〇
ミケル・アンゼロ　四七四
ミサ祭　四四二、四四三
ミステリ（機密）　四九〇
ミトラ教　二二
未來記文學　二七
ミル　八四四、八四五
ミルトン　六八七

ム

ムサデエ　六六三、六六四
ムハメッド及びムハメッド教　三〇八—三一四、九二八
ムハメット第二世　四八六—四八九
ムラトリの斷片　一七七
ムラド第一世　四八五—四八九

メ

メソヂウス　三五〇、三五一
メソヂスト教會　二二
七五三—七六六、八七〇、八七一
メヂチ　四六二
メランヒトン　五〇四、五一四、五六一、六三七、六四一—六四三
メリイ（英女皇）　六三一、六三二
メリイ（スコットランド女皇）　六一五—六二三
免罪　四四六—四四八
免罪符　五〇三、五〇五
メンノオ・シメオンス　五七三
メンノナイト　五七三、七七一

モ

モカリス　八四〇—八四二、九二五、九二六
モナア（トマス）　四八一
モスハイム　五

モナルキヤニズム（唯一神教）　一七四
モフアット（ロボルト）　九二六—九二八
モラヴイア派　七四九—七五二、七五八
モリソン（ロボルト）　九三三
モリノス　七二三、七二四
モルガン　七〇二
モンタナス　一八三—一八五
モンタニスト　一八三—一八五
モントモレンシイ　六〇九

ヤ

ヤコブ　三六、五六、五七

ユ

ユーダノー　五五〇、六〇六、六一三、七一五、七一六
ユウゴオ（神秘家）　四〇一
ユウセビイユス　四、二二五、二二七—二二九、二五三
ユスチヌス　一二九、一三三—一三六
ユスチヤニ　四八七
ユダヤ教　二三、二四
ユニテリアン　八五七、八五八
ユリアヌス　二〇七—二一〇
ユスチニヤン帝　二一二

ヨ

ヨヴイニヤン　七
預言者　二九〇
ヨセフ第二世　七八二、七八三
ヨハネ　五三、五四
ヨハネ第七世　六〇—六七
ヨハネ（ダマスコの）　四七〇、四八六
ヨハネ教團　三二四、三八八

ラ

ライデン包圍　五九九—六〇〇
ライネツ　五七八、五八五、五八七
ラコルデヤア　八八八
ラチマア　六二九
ラテラン宮　三四四、三四五
ラテラン會議　四二八—四三〇
ラメネエ　八八七、八八八
ラフアエル　四七四

リ

リヴインゲストン　九二七
リオン會議　四三〇、四三一
リシリウ　六一三、六四八
リチヤルド　四〇二
リッチル　七、八九八—九〇二
リドレエ　六二八、六二九
リリイフ・チヤアチ　八四九
倫理主義　一二五、一二六

ル

ルウテル　四九八、四九九、五〇〇—五二五、五三二、五五五—五六二
ルクフイナス　二四七、二八〇、二六五、二六六
ルウルド　八八九、八九〇
ルキヤヌス　一〇六—一〇七
ルキヤン（アンテオケ）　二二二
ルスブレエク　四二二
ルドルフ第二世　六四〇
ルナン　八八八、八八九
ルネエサンス（文藝復興を見よ）　四八二、四八三
ルネエサンス式　五三三、五三四
ルフエーブル　四四九、四五〇
ルリイ（ライモンド）

レ

礼拝　七二—七六、二八六—二九四、四三九—四四八
レオ第十世　五一〇
レッシング　八〇〇、八〇一
練獄説　三二二、四六九、四七〇

ロ

ロイヒリン　四七七
ロオ（ウイリヤム）　七五六、七五七
ロガテ　八二〇
ロッド　六八二、六三八
羅馬帝國　一七—二七
羅馬教會　四三六、四三七、七八一—七八六
ロオマネスク式　四八一、四八二
ロゴス　一三六、一五〇、一五一
露西亞　三五二、六六七—六六九
ロック　六九四、六九五、六九八、六九九
ロッエ　八九八
ロトマン　五七〇
ロボルトン　八四三
ロマノフ（ミカエル）　六六八
ロマノフ（フイラレット）　六六八
ロヨラ　五七七—五八五
ロラルド　四六三、六二三

ワ

ワルドオと其の徒　四五三、四五五
ワレンスタイン　六四四—六四六
ワオード　八三七

索引終

大正三年八月十九日印刷
大正三年八月廿一日發行
大正九年一月廿五日再版

定價金四圓

版權所有

著者　柏井園

發行者　東京市京橋區明石町八番地　エス、エッチ、ウエンライト

印刷者　東京市京橋區銀座四丁目一番地　村岡儆三

印刷所　東京市京橋區銀座四丁目一番地　福音印刷株式會社

發行所　東京市京橋區明石町八番地　日本基督教興文協會

發賣所　教文館、警醒社、丸善書店、岩波書店
基督教書類會社

終